

たに
谷遺跡 2 ・ みょうばる
女原遺跡 5

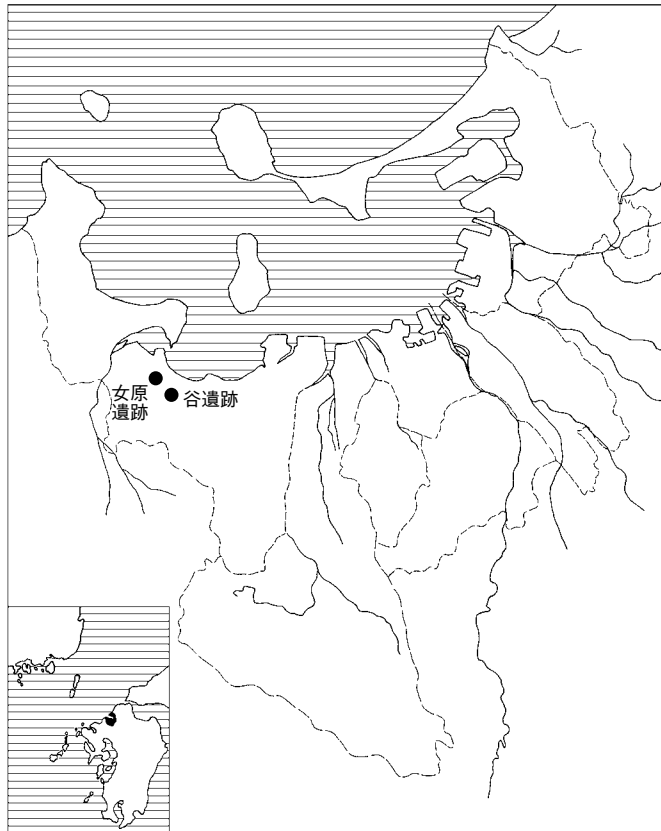
－谷遺跡第3次・女原遺跡第7次調査の報告－

2 0 1 2

福岡市教育委員会

たに
谷遺跡 2 ・ みょうばる
女原遺跡 5

－谷遺跡第3次・女原遺跡第7次調査の報告－



遺跡略号 TAN-3 MBR-7
調査番号 0862 0920

2 0 1 2

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならずわが国のかげがえのない財産ではありますが、開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書は伊都土地区画整理事業に伴い実施した谷遺跡第3次調査と女原遺跡第7次調査の成果を報告するものです。遺跡周辺は、弥生時代の大規模環濠集落として注目されるようになった今宿五郎江遺跡、6世紀の今宿平野の首長が眠る大塚古墳、平安時代の鴻臚館に瓦を供給した女原笠掛瓦窯跡など、数多くの重要な遺跡が近年の大規模な発掘調査の成果によって、明らかになってきました。

谷遺跡第3次調査では、弥生時代後期を中心とする井堰や水路などがみつきり、今宿五郎江遺跡の生産遺跡の一端が明らかになりました。遺存することが稀な木製品も多量に出土しており、弥生時代の生活を復元するうえで、重要な資料となることでしょう。

女原遺跡第7次調査では、古墳時代後期を中心とする集落がみつかりましたが、縄文時代早期以前の石器や、古墳時代初頭の吉備系土器など、各時代の注目すべき成果があがっています。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会
教育長 酒 井 龍 彦

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が伊都土地区画整理事業に伴い行った谷遺跡第3次調査と女原遺跡第7次調査の発掘調査報告書である。
2. いずれも、調査と整理は森本幹彦が担当した。実測・撮影等の作業を行った者は以下の通りである。
 - ①谷遺跡3次調査
遺構実測・撮影・製図：森本
室内整理事業：篠田千恵子、下山慎子、田中ヤス子、村上信子、八木一成（整理補助員）
遺物の実測：森本
遺物実測図の製図：土器を熊埜御堂和歌子（技能員）、木製品、石製品を森本が行った。
遺物の撮影：森本
自然科学分析：木製品の樹種同定と土壌の花粉分析を古環境研究所、石斧と赤色顔料の蛍光X線分析を西澤千絵里（福岡市埋蔵文化財センター）、土器胎土中の圧痕分析・写真撮影を山崎純男（元福岡市文化財部長）が行った
 - ②女原遺跡第7次調査
遺構実測：森本のほか、瀬戸啓治、時吉ひとみ、深溝嘉江（発掘作業員）
遺構実測図製図：森本
遺構撮影：森本
空中写真撮影：空中写真企画
室内整理事業：党早苗、篠田千恵子、下山慎子、田中ヤス子、村上信子、八木一成（整理補助員）
遺物の実測：森本
遺物実測図の製図：熊埜御堂
3. 本書の記述はⅠ～Ⅳ章を森本、Ⅴ章を古環境研究所が行った。編集は森本が行った。女原遺跡出土の古墳時代後期の須恵器に関しては、中村勝氏よりご教示いただいた。
4. 各調査の基準座標は調査区ごとに任意に設定したものである。国土座標の測量に際しては、伊都土地区画整理事業に伴い設置された基準点(日本測地系)を使用した。座標北は真北より0°19'西偏する。本書で用いている方位記号は全て座標北である。
5. 本報告の出土資料および記録類は平成24年度に埋蔵文化財センターで収蔵保管する予定である。

谷遺跡 第3次調査		遺跡調査番号	0862
地番	福岡市西区今宿町	遺跡略号	TAN-3
分布地図番号	112 今宿	遺跡面積	290 m ²
調査期間	2009(平成21)年3月2日～2009(平成21)年4月9日		

女原遺跡 第7次調査		遺跡調査番号	0920
地番	福岡市西区女原	遺跡略号	MBR-7
分布地図番号	120 周船寺	遺跡面積	2400 m ²
調査期間	2009(平成21)年8月21日～2009(平成21)年11月9日		

本文 目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡と周辺環境	3
III. 女原遺跡第7次調査の報告	
1. 調査の概要	5
2. 調査の記録	
1) I区の遺構	5
2) 出土遺物	12
3. まとめ	14
IV. 谷遺跡第3次調査の報告	
1. 調査の概要	17
2. 調査の記録	21
1) 第1面の遺構	22
2) 第2面の遺構	24
3) 第3面の遺構	25
4) 出土遺物	29
3. まとめ	52
V. 谷遺跡第3次調査の自然科学的分析	63

挿図・写真図版 目次

Fig.1 今宿平野の遺跡分布 (1/25000) …	2	Fig.12 出土土製品実測図 (1/2) …	12
Fig.2 調査地点と周辺 (1/6000) …	6	Fig.13 出土石製品実測図 (1/4) …	13
Fig.3 女原遺跡第7次調査地点 (1/1000) ……………	6	Fig.14 出土石器実測図 (2/3) …	13
Fig.4 女原遺跡第7次調査遺構配置図 (1/300) …	7	Fig.15 谷遺跡の調査地点と周辺の遺跡 (1/4000) …	18
Fig.5 I区遺構配置図 (1/100) …	8	Fig.16 弥生時代後期前後の谷遺跡と 今宿五郎江遺跡 (1/2000) …	19
Fig.6 土層図 (1/40) …	9	Fig.17 谷遺跡第3次調査地点 (1/500) …	20
Fig.7 溝の断面図 (1/40) …	9	Fig.18 谷遺跡第3次調査のグリッドと区 (1/200) …	21
Fig.8 掘立柱建物実測図 (1/80)、柱穴06 遺物出土状況図 (1/20) …	10	Fig.19 調査区北壁・南壁土層図 (1/60)	22
Fig.9 出土土器実測図1 (1/3) …	11	Fig.20 第1面遺構配置図 (1/100) …	23
Fig.10 出土土器実測図2 (1/3) …	12	Fig.21 SX01 実測図 (1/40) …	23
Fig.11 試掘49地点出土土器 実測図 (1/3) …	12	Fig.22 第2面遺構配置図 (1/100) …	24
		Fig.23 SX05 実測図 (1/80) …	25

Fig.24	第3面遺構配置図(1/100) ……	26	Fig.35	調査区東部暗灰色シルト層 出土土器実測図(1/4) ……	35
Fig.25	第3面南部遺構配置図(1/60) ……	27	Fig.36	灰色砂層下出土土器実測図1(1/4)	36
Fig.26	SX04実測図(1/40) ……	27	Fig.37	灰色砂層下出土土器実測図2(1/4)	37
Fig.27	SX07、矢板列1～3、 杭列4・5実測図(1/40) ……	28	Fig.38	灰色砂層下出土土器実測図3(1/4)	38
Fig.28	暗褐色シルト(包含層) 出土土器実測図1(1/4) ……	30	Fig.39	灰色砂層下出土土器実測図4(1/4)	39
Fig.29	暗褐色シルト(包含層) 出土土器実測図2(1/4) ……	31	Fig.40	SX01周辺出土土器実測図(1/4)	40
Fig.30	暗褐色シルト(包含層) 出土土器実測図3(1/4) ……	32	Fig.41	SX02・04・05・07周辺 出土土器実測図(1/4) ……	41
Fig.31	暗褐色シルト(包含層) 出土土器実測図4(1/4) ……	33	Fig.42	土製品実測図(1/4) ……	41
Fig.32	暗褐色シルト(包含層) 出土土器実測図5(1/4) ……	34	Fig.43	木製品実測図1(1/4) ……	43
Fig.33	暗褐色シルト(包含層) 出土土器実測図6(1/4) ……	35	Fig.44	木製品実測図2(1/4) ……	44
Fig.34	古墳時代末から古代の 土器実測図(1/4) ……	35	Fig.45	木製品実測図3(1/4) ……	45
			Fig.46	木製品実測図4(1/4) ……	46
			Fig.47	木製品実測図5(1/4) ……	47
			Fig.48	建築部材実測図1(1/8) ……	48
			Fig.49	建築部材実測図2(1/8) ……	49
			Fig.50	石製品実測図(1/2、1/4) ……	51
PL1.1	調査区全景(東から) ……	15	2	SX01(北から) ……	56
2	I区全景(北から) ……	15	3	SX05(南から) ……	56
PL2.1	I区北部SB1ほか掘立柱建物群 (北から) ……	16	4	第2-3面SX05周辺(東から) ……	56
2	SB2・4周辺(西から) ……	16	PL7.1	SX04周辺(北から) ……	57
3	SP06(SB1)須恵器出土状況 (北から) ……	16	2	SX04上部(北から) ……	57
4	Tr1周辺調査区南壁(北から) ……	16	3	SX04下部(北から) ……	57
PL3.1	第3面調査区全景(北から) ……	53	4	SD08南部(北から) ……	57
2	第3面南部近景(北から) ……	53	PL8.1	SX07(西から) ……	58
PL4.1	第2-3面(北から) ……	54	2	杭列4(西から) ……	58
2	第1面(北から) ……	54	3	杭列5(東から) ……	58
PL5.1	調査区北壁(ABライン)西部 ……	55	4	矢板列1(北から) ……	58
2	調査区北壁(ABライン)東部 ……	55	5	矢板列2西(西から) ……	58
3	V区北壁(CDライン)西部 ……	55	6	矢板列2東(東から) ……	58
4	V区北壁(CDライン)東部 ……	55	7	矢板列3西(西から) ……	58
5	調査区南壁西部(EFライン) ……	55	8	矢板列3東(東から) ……	58
6	調査区南壁東部(F'Gライン) ……	55	PL9	出土木製品1 ……	59
PL6.1	第1面包含層南部(北から) ……	56	PL10	出土木製品2 ……	60
			PL11	出土建築部材 ……	61
			PL12	出土土器・圧痕 ……	62

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本書で報告する谷遺跡および女原遺跡の発掘調査は伊都土地区画整理事業に伴う造成に先立って実施されたものである。伊都土地区画整理事業は福岡市西部の今宿平野東部を対象に計画された区画整理事業で、施工面積は約130haである。

1996（平成8）年11月、都市整備局（現・住宅都市局）伊都区画整理事務所から事業地内の埋蔵文化財について確認調査の依頼があった。福岡市教育委員会埋蔵文化財課では事業地全体について遺跡の確認のための試掘調査が必要と判断し、区画整理事務所と協議を重ね、試掘地点の選定を行った。広大な事業地内における埋蔵文化財包蔵地の範囲確定や、かつての潟湖と考えられる今宿砂丘後背地などの古地形復原を目的として、1996年12月～1997年2月、計68箇所の試掘調査を実施した。この結果、事業地南部の低丘陵や沖積台地上を中心として埋蔵文化財の分布が確認され、事業地北部の大半は砂丘後背湿地に当たり埋蔵文化財分布の可能性はないと判断された。各地点の包蔵地範囲内については、工事工程との調整を行いながら必要範囲について随時、確認調査を行い、遺構密度など埋蔵文化財の内容を確認したうえで、本調査に着手するという手順をとることとなった。本調査は2002（平成14）年度の今宿五郎江遺跡の調査から始まった。

本書で報告する谷遺跡第3次調査は確認調査を2009（平成21）年2月25日に行い、敷地の西半部で遺物の包含層を確認した。その敷地の西半部（290㎡）を対象とした本調査は2009（平成21）年3月2日～同年4月9日に実施した。当初は年度内で終了予定の調査であったが、複数ある遺構面や木製品の多量出土を隣地の調査や確認調査からは予想できず、期日内での調査完了が困難となり、2週間調査期間を延長する許可を原局より頂いた。

女原遺跡第7次調査は確認調査を2009（平成21）年7月9日に行い、敷地全面で遺構や遺物の散布を確認した。本調査は2009（平成21）年8月21日～同年11月9日に実施した。調査報告書作成のための整理はいずれも2010（平成22）年度から2011（平成23）年度に行った。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託	福岡市住宅都市局（旧・都市整備局）伊都区画整理事務所		
調査主体	福岡市教育委員会		
	教育長	酒井龍彦	山田裕嗣（平成19～22年度）
	文化財部長	藤尾浩	宮川秋雄（平成21・22年度）、矢野三津男（平成19・20年度）
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課課長	田中壽夫	
	埋蔵文化財第2課調査第2係長	菅波正人	
	埋蔵文化財第2課調査第1係長	杉山富雄（平成19～21年度）	
庶務担当	埋蔵文化財第1課	管理係	古賀とも子
事前協議	埋蔵文化財第1課事前審査係長	宮井善朗	
		事前審査係	阿部泰之（平成20・21年度）
谷遺跡第3次調査担当	埋蔵文化財第2課	調査第2係	森本幹彦（平成20年度）
女原遺跡第7次調査担当	埋蔵文化財第2課	調査第2係	森本幹彦（平成21年度）



- 1 谷遺跡 2 今宿五郎江遺跡 3 大塚遺跡 4 青木遺跡 5 女原笠掛遺跡 6 女原遺跡 7 徳永B遺跡 8 今宿遺跡
 9 今山遺跡 10 徳永A遺跡 11 周船寺遺跡 12 飯氏遺跡 13 飯氏引地遺跡 14 蓮町遺跡 15 丸隈山遺跡 16 山崎遺跡
 17 千里中原遺跡 18 千里深谷B遺跡 19 千里深谷A遺跡 20 女原上ノ谷製鉄跡 21 新開製鉄跡 22 青木城跡
 23 相原製鉄A遺跡 24 相原製鉄B遺跡 25 相原製鉄C遺跡 26 本村遺跡 27 焼山製鉄遺跡 28 堀ノ内製鉄遺跡
 29 堀ノ内遺跡 30 鋤崎遺跡 31 鋤崎製鉄A遺跡 32 鋤崎製鉄B遺跡 33 ショウガ谷製鉄跡 34 飯氏古墳群A群
 35 飯氏古墳群B群 36 飯氏古墳群C群 37 飯氏古墳群D群 38 飯氏古墳群E群 39 飯氏古墳群F群 40 飯氏古墳群G群
 41 飯氏古墳群I群 42 飯氏古墳群J群 43 徳永古墳群A群 44 徳永古墳群B群 45 徳永古墳群C群 46 徳永古墳群D群
 47 徳永古墳群G群 48 徳永古墳群H群 50 女原古墳群A群 51 女原古墳群B群 52 女原古墳群C群 53 女原古墳群D群
 54 女原古墳群E群 55 新開古墳群A群 56 新開古墳群B群 57 新開古墳群C群 58 新開古墳群D群 59 新開古墳群E群
 60 新開古墳群F群 61 谷上古墳群A群 62 谷上古墳群B群 63 谷上古墳群C群 64 相原古墳群A群 65 相原古墳群B群
 66 相原古墳群C群 67 相原古墳群D群 68 相原古墳群E群 69 相原古墳群F群 70 相原古墳群G群 71 相原古墳群H群
 72 相原古墳群J群 73 本村古墳群A群 74 焼山古墳群B群 75 鋤崎古墳群A群 76 鋤崎古墳群B群 77 油坂古墳群A群
 78 油坂古墳群B群 79 長垂山古墳群A群 A 飯氏B14号墳 B 兜塚古墳 C 丸隈山古墳 D 山ノ鼻1号墳 E 山ノ鼻2号墳
 F 若八幡宮古墳 G 下谷古墳 H 大塚古墳 I 新開窯跡 J 谷上B1号墳 K 鋤崎古墳

Fig.1 今宿平野の遺跡分布 (1/25000)

II. 遺跡と周辺環境

今宿平野は糸島平野の東縁部に開ける小平野で、東側を背振山系より北に派生する叶岳・長垂山塊によって早良平野と画され、南・西側を高祖山の山塊によって区切られた東西約6 km、南北約2 kmの小平野である。今山～長垂間の今津湾に面する海浜部では、弓状砂丘が縄文時代後半期以降に形成され、その後背地には近世の干拓事業まで潟湖ないしは干潟がひろがっていた。南の高祖山山麓は北流する小河川の開析により八手状に丘陵尾根が派生する地形をなし、平野東部では叶岳とのあいだに扇状地が発達している。谷遺跡(1)と女原遺跡(6)の調査地点は、高祖山山麓北部の沖積微高地と谷部に立地しており、今津干潟に面するところである。

周辺の歴史的環境や、伊都区画整理事業に伴う調査の概要については、大塚遺跡3（福岡市第1025集）と大塚遺跡4（福岡市第1111集）でまとめている。旧石器時代から中世まで概観するが、ここでは本書の調査成果と関連する、弥生時代から古墳時代の歴史的環境を中心にみていきたい。

旧石器時代や縄文時代は遺物が出土する遺跡が平野内に点在しているが、集落の存在は明確になっていない。平成19年度調査の徳永B遺跡(7)では阿高系土器がまとまって出土しており、近くに貯蔵穴等があったとみられる。今山遺跡(9)では縄文時代前期以降の遺物を包含する砂丘層が層位的に把握され、玄武岩製石斧生産も縄文時代から行われていることが明らかになった（8次）。晩期では周船寺遺跡群（11、旧称の千里シビナ遺跡を含む）や飯氏遺跡(12)で土坑や埋甕などがみついている。

弥生時代前期～中期前半では、平野東部の青木遺跡(4)で集落形成がみられ、谷遺跡2次では突帯文系土器等にともなって矢板、杭列がみつかり、弥生時代前期初頭の水田関連遺構とみられる。海浜部では今山遺跡の玄武岩石斧生産が前期後半から中期前半をピークに盛行しており、今宿遺跡(8)では墓域が形成される。西部の飯氏遺跡や周船寺遺跡でも集落と墓域の規模が大きくなるが、周船寺遺跡7次では、柵列で区画された掘立柱建物主体の集落域がみつかり、注目される。

弥生時代後半期になると、平野の中心的な集落は今宿五郎江遺跡(2)となる。中期後半から後期の環濠集落で、環濠の埋没が進む弥生時代終末期前後には集落域が拡大して、分村が増える。大塚遺跡(3)の最初の集落形成はこの分村であり、遺跡内の各丘陵尾根上に弥生終末期前後の集落が形成される。大塚遺跡14次では終末期前半の鍛冶工房がみつかり、西新町遺跡よりも古い、列島最古段階の竈も備わっていた。水田等の生産域は今宿五郎江遺跡環濠集落周縁の東部から南部に広がっていた可能性が高く、井堰等がみついている。本書で報告する谷遺跡3次調査もそのような生産域の一つで、弥生時代後期から終末期の井堰や畦畔が複数面みついている。今宿五郎江遺跡の墓域は不明瞭であるが、大塚遺跡5次調査で弥生時代終末期前後の甕棺や石棺墓が4基みついている。また、今宿遺跡では継続して墓が営まれており、銅剣副葬墓（2次）もみられる。

古墳時代初頭前後になると、海浜砂丘部の今山遺跡や今宿遺跡でも外来系土器の出土が増えるほか、製塩などが活発になり、新たに交易や生産の拠点となる。今宿五郎江遺跡や大塚遺跡は古墳時代前期前半までは集落が継続するが、前期後半が空白期となっており、谷遺跡も同様の消長をたどるようである。一方、今宿遺跡や飯氏遺跡では断絶なく、古墳時代後半期まで継続的に集落が営まれている。

古墳時代中期前半期は、平野内で小規模な集落が増加するが、女原遺跡(6)は、主にこの時期から集落が形成される遺跡である。同遺跡3次調査地点や大塚遺跡14次・15次地点などでは朝鮮半島系土器の出土が多く、渡来人の居住が想定される。

古墳時代後期の集落は、大塚遺跡など、やや内陸の平野南縁部から丘陵斜面を中心に立地としており、新開須恵器窯(I)や新開古墳群（55～60）が近在する。女原遺跡の中でも、北部に位置する6次調

査や本書で報告する7次調査周辺の当該期の遺構密度は高くなく、中心地はやや内陸に移動する傾向がある。後期後半以降は徳永A遺跡(10)のように、谷筋斜面に立地する集落も出現する。

今宿平野周辺の丘陵部には各時期の前方後円墳や円墳など400基以上の古墳が分布する。首長墳の前方後円墳には、若八幡宮古墳(F、前方後円墳集成2期)、山ノ鼻1号墳(D、集成3期)、鋤崎古墳(K、集成4期)、丸隈山古墳(C、集成5期)、兜塚古墳(B、集成8期)、大塚古墳(H、集成9期)、飯氏二塚古墳(Bの西、集成9期)などが知られる。古墳時代前期の前方後円墳と考えられてきた山ノ鼻2号墳(E)は近年の調査によって、円墳2基と周辺に木棺墓などが伴う古墳時代中期初頭前後の墓域であることが明らかになった。古墳時代後期後半になると谷上B1号墳(J、集成9期末)や飯氏B14号墳(A、集成10期)など、前方後円墳は40m未満となり、群集墳の築造が活発になる。女原笠掛遺跡(5)の直径約30mの古墳周溝(「今宿小塚」)はこの時期の大形円墳または小形前方後円墳である。

奈良時代前後では製鉄関連の遺跡が多くみつかっている。大塚遺跡14次と鋤崎製鉄A遺跡(31)1次では製錬炉と横口付炭窯が、飯氏遺跡8次では製錬炉と鍛冶炉がみつかり、時期は7世紀～8世紀を中心とするものである。砂鉄に恵まれる糸島地方では奈良時代前後に製鉄が活発になるが、奈良時代後半に軍事拠点として築城される怡土城などに供給されたとみられている。

平安時代は今宿平野でも中国陶磁器や緑釉陶器が多量に出土する遺跡がみられるようになり、それらには大宰府の外郭施設があった可能性が考えられている。一つは徳永A遺跡(10)で、丘陵部の9世紀代を中心とする包含層から越州窯系青磁等の中国陶磁器や緑釉陶器がまとまって出土しており、鉄滓、羽口や瓦の出土も少なくない。「周船寺」という地名から周船司との関連が考えられている。5次調査では上記のような遺物のほか、石製丸軋や、多くの怡土城系瓦が出土しており、鍛冶炉6基や火葬墓などの特異な遺構もみつかり、遺跡の性格をより特徴付ける成果をあげている。今宿五郎江遺跡でも近年の調査で台地縁辺の包含層から越州窯系青磁等の中国陶磁器、緑釉陶器、瓦、鉄滓などが多く出土しており、9世紀後半～10世紀を中心とするようである。13次調査では青銅製の「寶」印が出土している。近在する大塚遺跡17次調査では越州窯系青磁等を副葬した木棺墓がみつかり、その他にも、女原笠掛遺跡(5)の瓦窯や今山遺跡8次調査の石組護岸のドックなど、平安期の今宿平野を考える上で重要な遺構の発見が相次いでいる。

平安時代末前後では、大塚遺跡北部で墾田開発関係とみられる集落が出現し、女原遺跡3次でも当該期かやや後出する水田遺構がみつかり、怡土荘(史料初見1131年)との関連も考えられる。鎌倉時代～室町時代では、今宿五郎江遺跡北部で掘立柱建物等の遺構が密集するようになり、墓もみられる。大塚遺跡南部の5次調査では当該期の「居館」がみつかり、北部では、小規模な集落や墓が点在している。この時期に栄えるのが今津湾北部の今津であり、平安時代末から博多と並ぶ貿易や禅宗の一大拠点となっている。誓願寺南の調査では寺に関係するとみられる建物、溝、井戸、瓦、鉄鐸などが出土しており、勝福寺付近では古墓が発見され、多量の陶磁器が出土したことが知られている。文永の役のと蒙古の再襲来に備えて築かれたのが元寇防塁であり、今宿地区は豊前国の担当であった。長垂山の北西麓から今山の東の海浜砂丘上に築かれるが、遺存状況はあまり良くなく、これまで調査は行われていない。

戦国時代は大塚遺跡の盛期の一つである。17次調査地点を中心とする丘陵尾根上には、屋敷群が面的に展開しており、当該期の造成は、ほぼそのまま現況の地形につながっているようである。同様の集落は、小規模であるが、徳永B遺跡(7)でもみつかり、それらは、16世紀後半には衰退するようであり、青木や今宿周辺に中心が移っていく。

Ⅲ. 女原遺跡第7次調査の報告

1. 調査の概要

本調査地点は女原遺跡の北西に位置し、北に面する東西方向の道は、旧・唐津街道筋である。標高7.0m前後の沖積微高地に立地しており、現況は宅地である。本調査地点南東の近在する箇所では第3・4次調査（202号線バイパス関係）や第6次調査（伊都区画整理事業）が実施されており、古墳時代中期から後期の集落がみついている。中でも第3次調査は、古墳時代中期の朝鮮半島系土器の出土が多い地点である。

調査は現代の造成土と旧耕作土を除去した地表下約60cmの黄褐色シルトを遺構面として行った。地点によっては、この黄褐色シルトの下層に、褐灰色粘質土がみられるが、これらの層から、遺物が出土しないため、微高地の形成時期は明らかでない。

調査区内を地形的に3つに区分し、同時に調査を進めた。3つの区は、Ⅰ区（調査区西の高まり）、Ⅱ区（調査区中央の段落ち）、Ⅲ区（調査区東部の高まり）としたが、いずれも後世の攪乱や削平が著しい。攪乱には近現代の暗渠や、瓦用の粘土採掘坑とみられる土坑が多い。本来の地形は大きく失われているが、Ⅱ区は元々、谷部であって、Ⅰ区とⅢ区が別々の微高地を成していた可能性がある。

Ⅰ区は本調査地点で、最も遺構の検出された地点で、東部には中世に形成された遺物包含層（SX1）も遺存する。主な遺構は古墳時代後期の掘立柱建物4棟と、包含層下で検出した溝4条以上である。

Ⅱ区はⅠ区の遺構面より50cmほど低い段落ち部で、近現代の暗渠などで、著しく攪乱されている。北部に少し遺構面が遺存する箇所があり、柱穴がみついている。

Ⅲ区もⅠ区のように小柱穴が分布し、東部には遺物包含層（SX100）が遺存するが、攪乱が著しく、建物等の把握は難しい。

遺物は包含層や柱穴などから、古墳時代の土師器、須恵器、古代の須恵器、土師器、中世の土器・陶磁器のほか、黒曜石石器（縄文時代早期以前と後晩期）が出土しており、石器は微高地の形成時期を示すかもしれない。遺物の主体は古墳時代後期前半の土器であるが、古墳時代初頭前後の吉備系甕の出土も注目される。

2. 調査の記録

1) Ⅰ区の遺構

検出した遺構は掘立柱建物4棟以上、溝4条以上、柱穴などである（Fig.5）。掘立柱建物の柱穴は小さく（埋土は主に黒褐色土）、1×1間と1×2間（相当）の側柱建物である。ただし、1×1間の建物は削平を受けた竪穴建物であった可能性も考えられる。時期は柱穴出土遺物から古墳時代後期前半が中心と考えられる。中世の土師皿などが出土する柱穴もあるが、建物を抽出することはできなかった。溝と包含層（SX1）は、後述のように、中世の畑の畝間溝や耕作土である可能性を考える。

①掘立柱建物（Fig.8）

SB1 Ⅰ区北東部に位置し、SB3と重複するが、先後関係は不明である。東部の柱穴は、SX1の下で検出した。構造は1×2間、主軸方位はN-2°-Eで、梁行約360cm、桁行630cm、柱間は300cm前後を測る。柱穴は直径30cm前後で、柱の径は不明確である。SP06の上層より、古墳時代後期前半の須恵器坏身と蓋が4個体破碎状態であるが、まとまって出土しており、柱抜き取り後の祭祀に関連するも

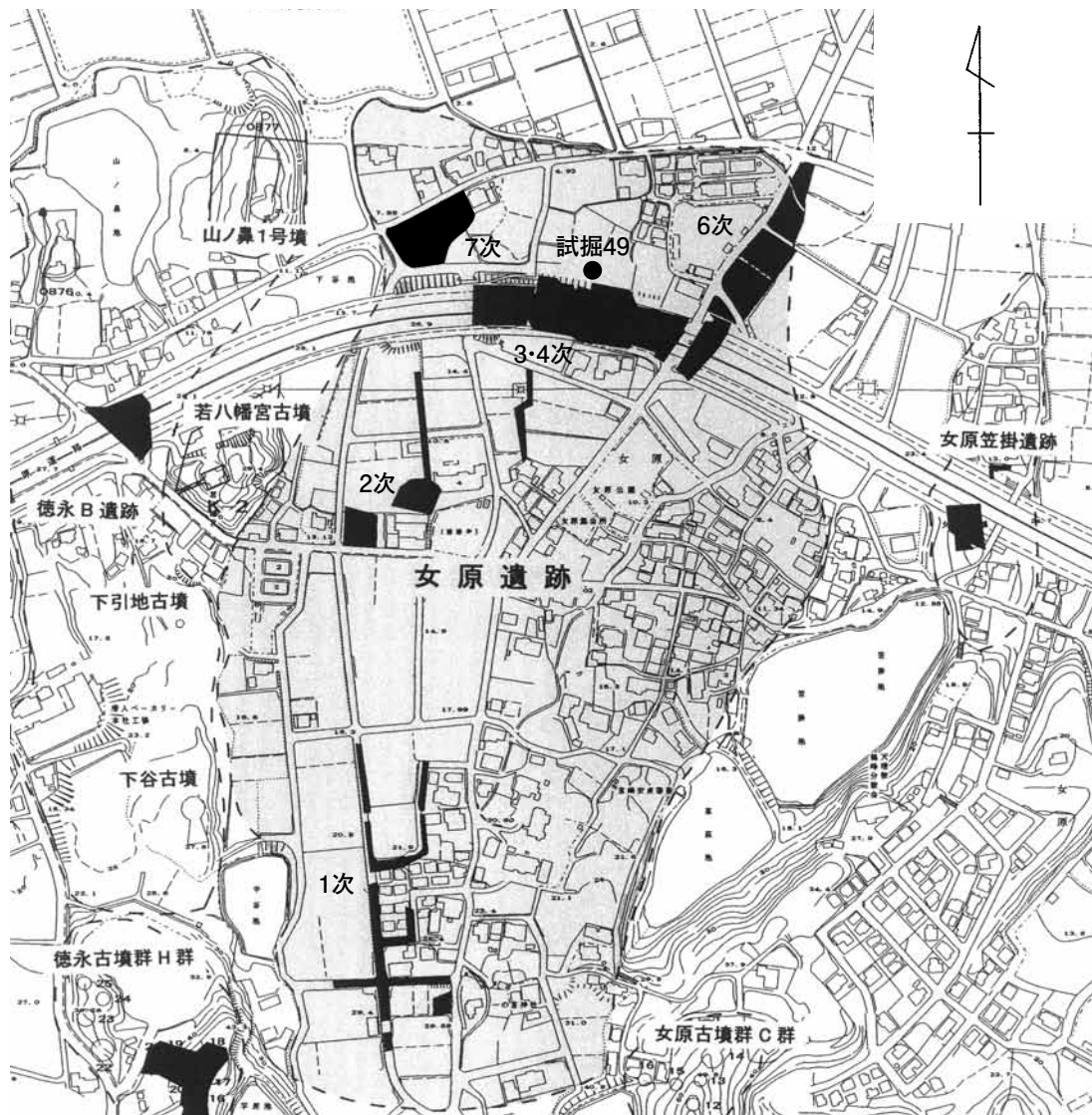


Fig.2 調査地点と周辺 (1/6000)

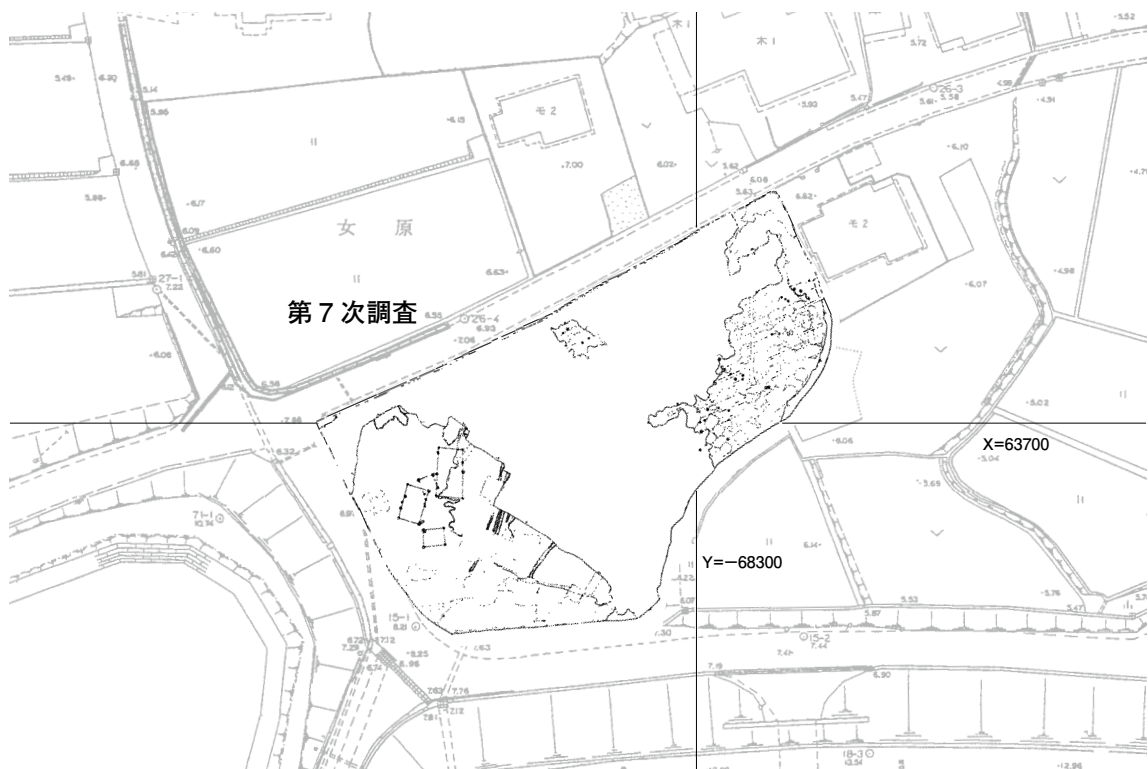


Fig.3 女原遺跡第7次調査地点 (1/1000)

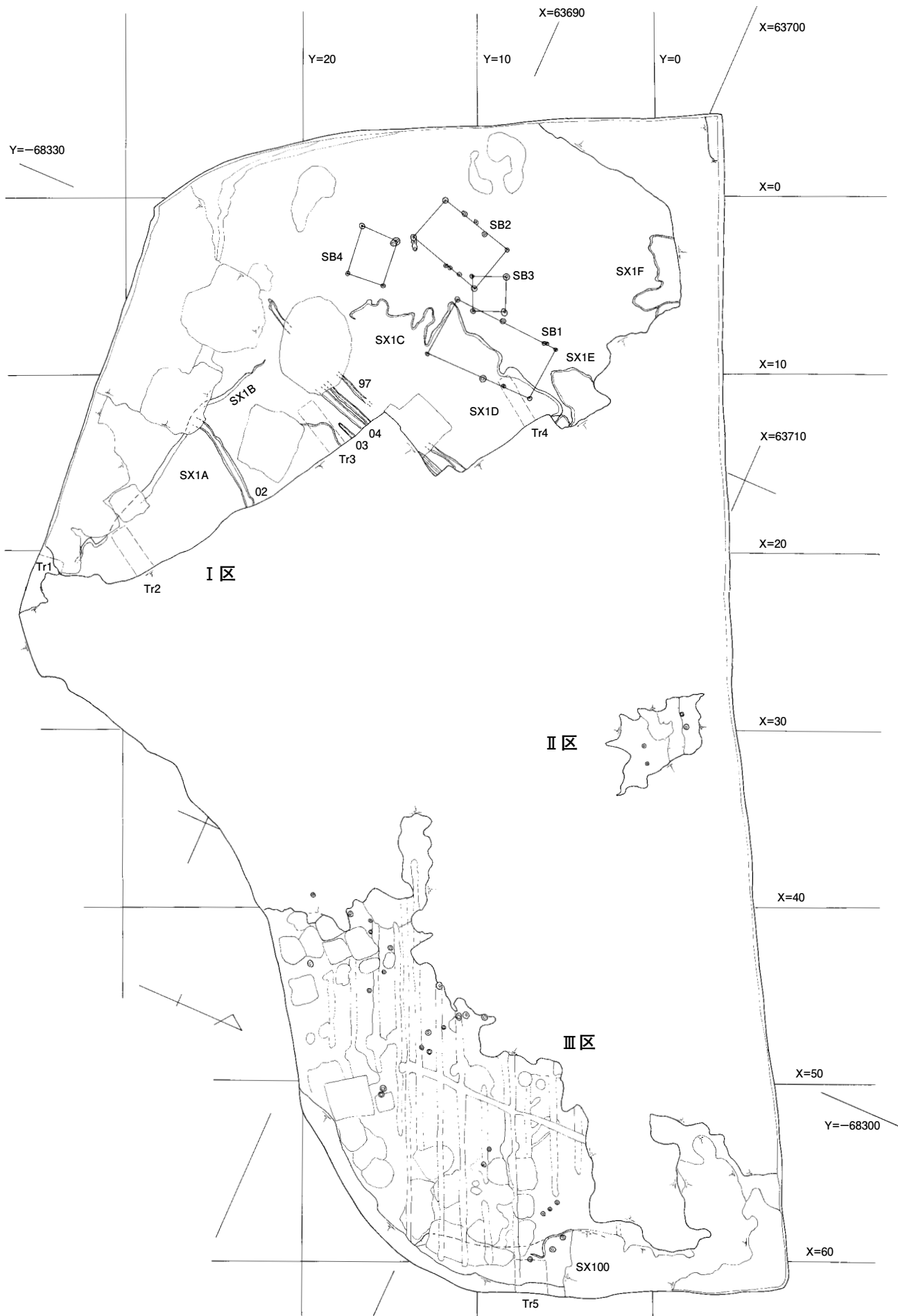


Fig.4 女原遺跡第7次調査遺構配置図 (1/300)

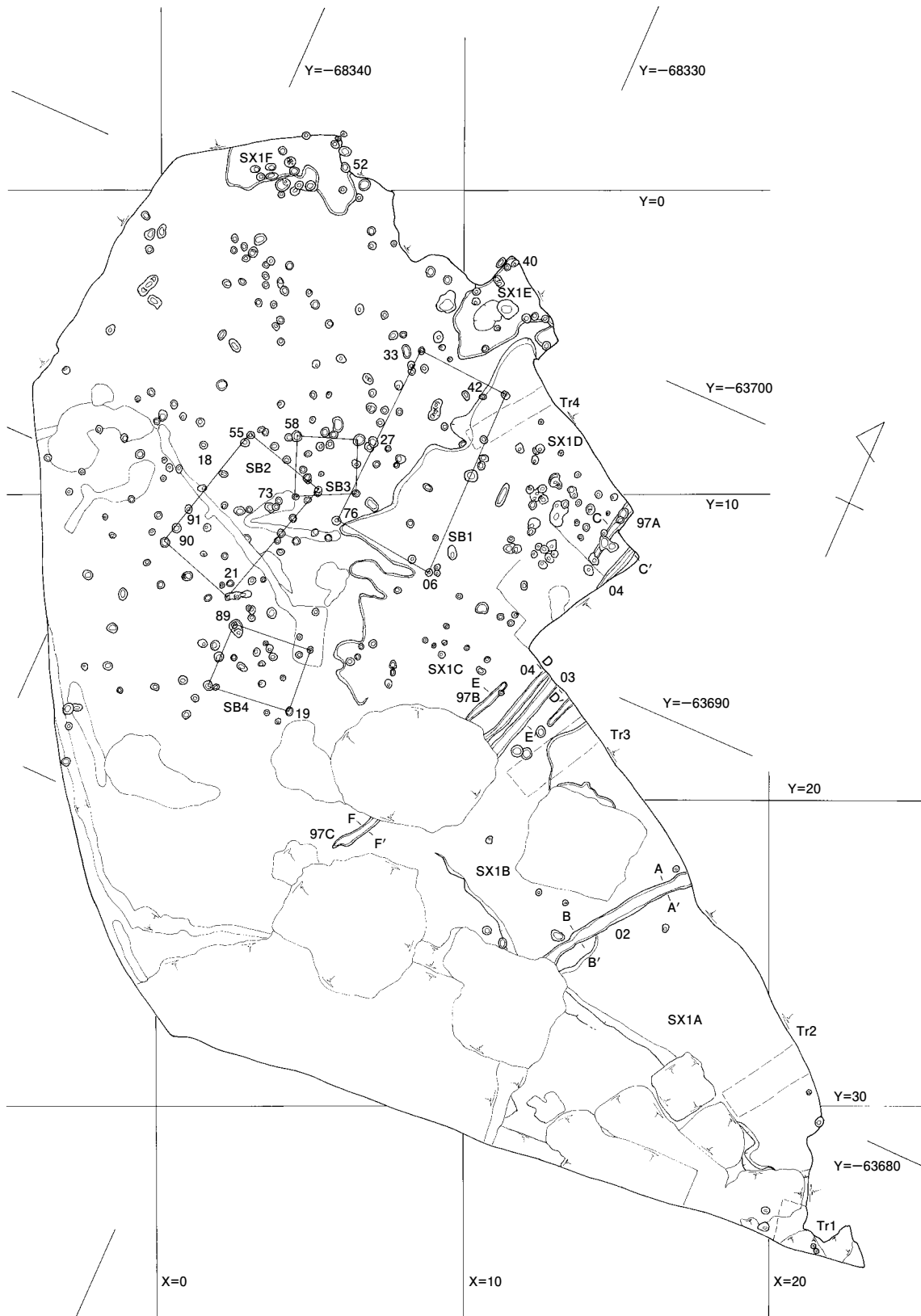


Fig.5 I区遺構配置図 (1/100)

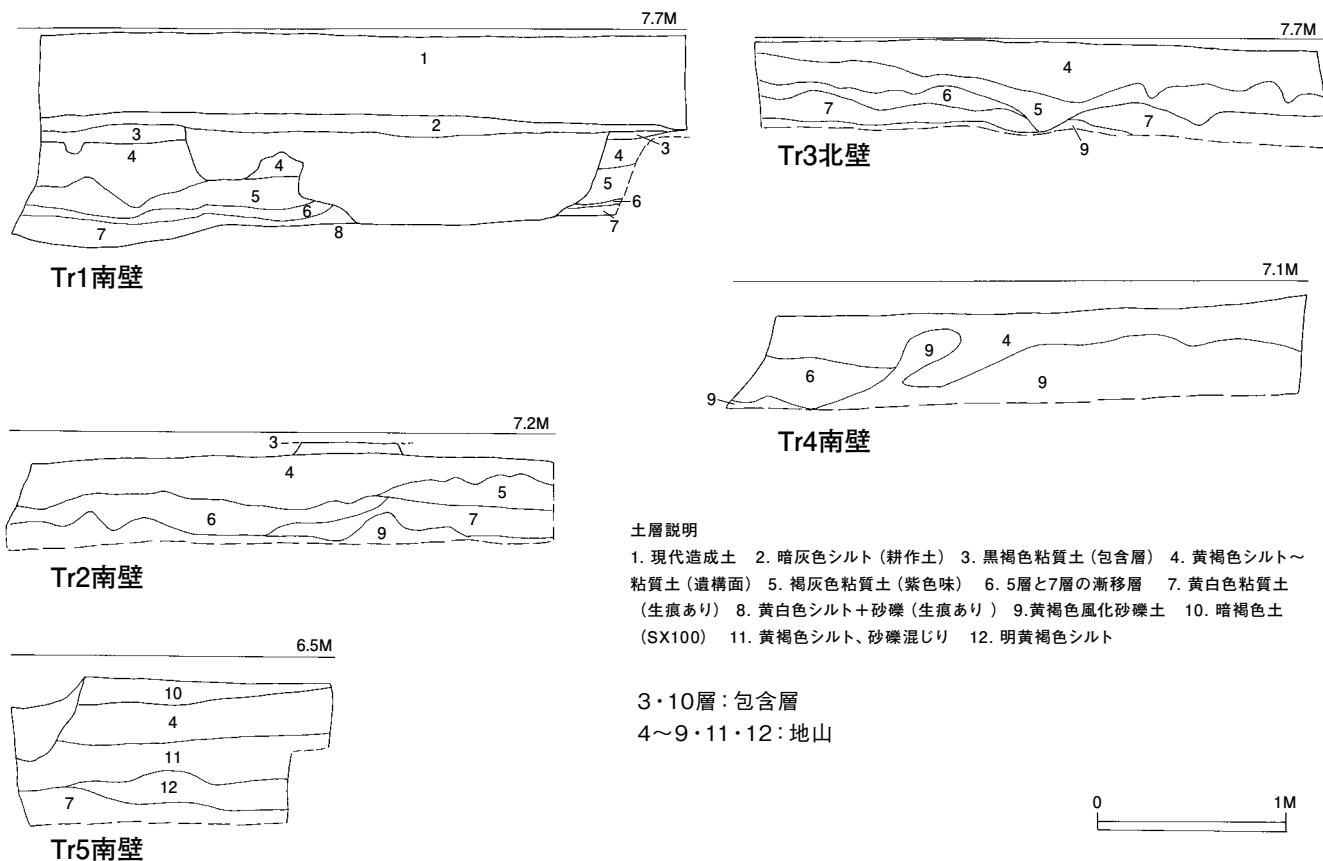


Fig.6 土層図 (1/40)

のとみられる。

SB 2 I区中央に位置し、SB 3と重複するが、先後関係は不明である。構造は屋外棟持柱を有する1×2間、主軸方位はN-14°-Eで、梁行約280cm、桁行450cm、柱間は230cm前後を測る。柱穴は直径30cm前後で、柱の径は不明確である。遺物は土師器片が出土した。時期は不明確であるが、古墳時代後期と考えられる。

SB 3 I区中央に位置し、SB1、2と重複するが、先後関係は不明である。構造は1×1間、主軸方位はN-23°-Wで、梁行約200cm、桁行210cm、柱間は200cm前後を測る。柱穴は直径30cm前後で、柱の径は不明確である。遺物は土師器片が出土した。時期は不明確であるが、古墳時代後期と考えられる。

SB 4 I区中央に位置する。構造は1×1間、主軸方位はN-84°-Eで、梁行約220cm、桁行270cm、柱間は220cm前後を測る。柱穴は直径30cm前後で、柱の径は不明確である。遺物は土師器片が出土した。時期は不明確であるが、古墳時代後期と考えられる。

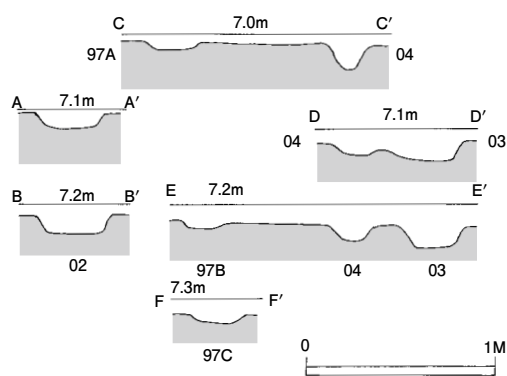


Fig.7 溝の断面図 (1/40)

②溝、包含層 (Fig.6・7)

I区の東部、SX 1 A～Dの下で、幅20～40cm、地山面からの深さ10cm程度の直線的な溝を4条以上検出した(SD02・03・04・97)。埋土はSX 1と類似する黒褐色土であるが、中にはSX 1堆積土中で

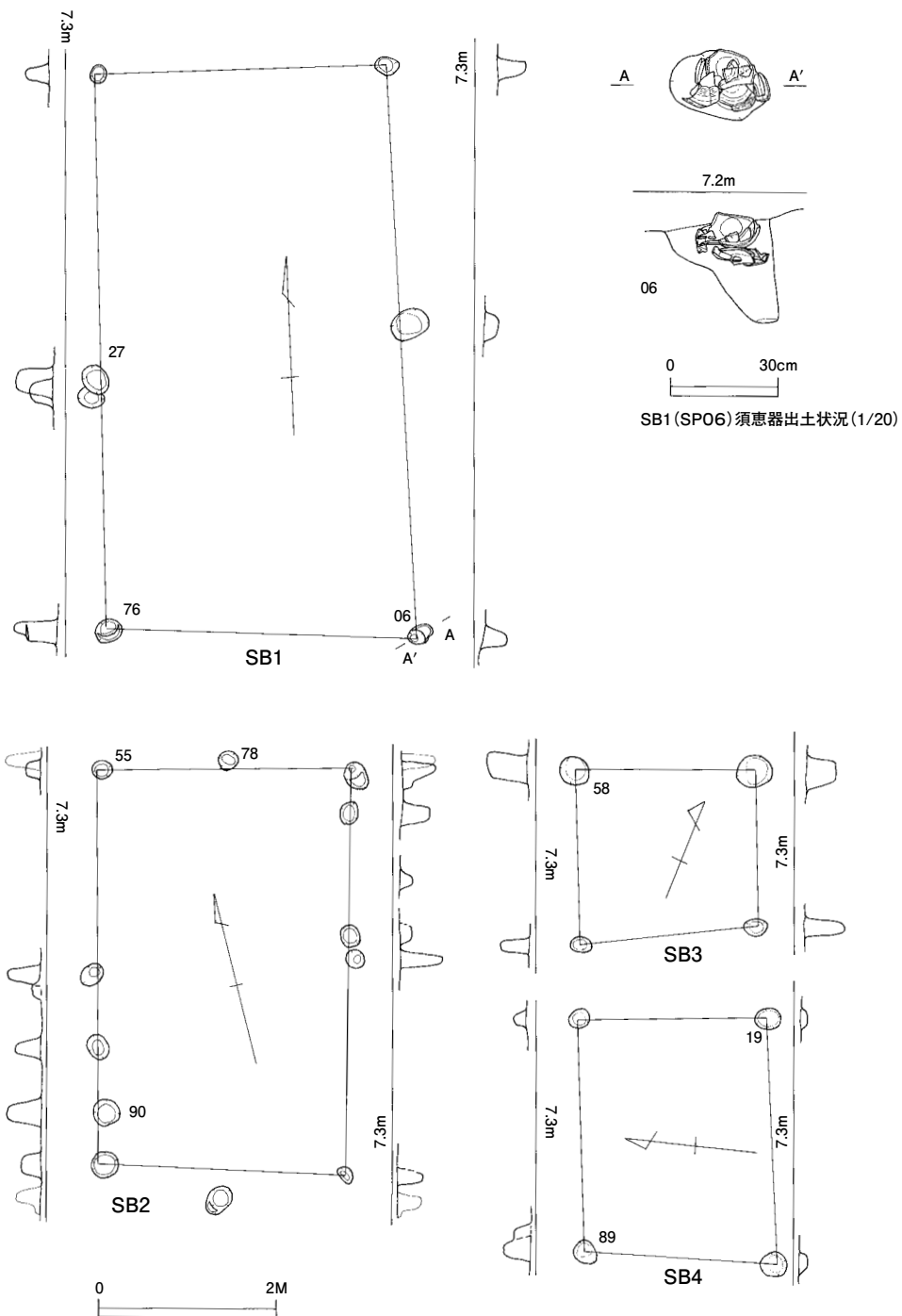


Fig.8 掘立柱建物実測図 (1/80)、柱穴 06 遺物出土状況図 (1/20)

プランを検出できたものもある。地形的にみて、溝の方向は微高地の向きに直交するもので、溝の底面は南西から北東に向かって低くなる。

SX 1 は I 区の東部から北部で検出した、黒褐色土の堆積である。A~D は一連のものであり、E と F はやや独立している。遺物包含層として掘削したが、深さ 10cm 前後で地山面となる。地山面は北、東に向かって低くなる。

これらの溝や黒褐色土の堆積は、その性格が不明瞭であるが、溝の配置などが畝間溝と類似しており、畑状の遺構である可能性を考えたい。SX 1 の黒褐色土は畑の耕作土であり、各溝もその上面より掘削されたものであるため溝の深い部分だけを地山面で検出することができたのではなかろうか。

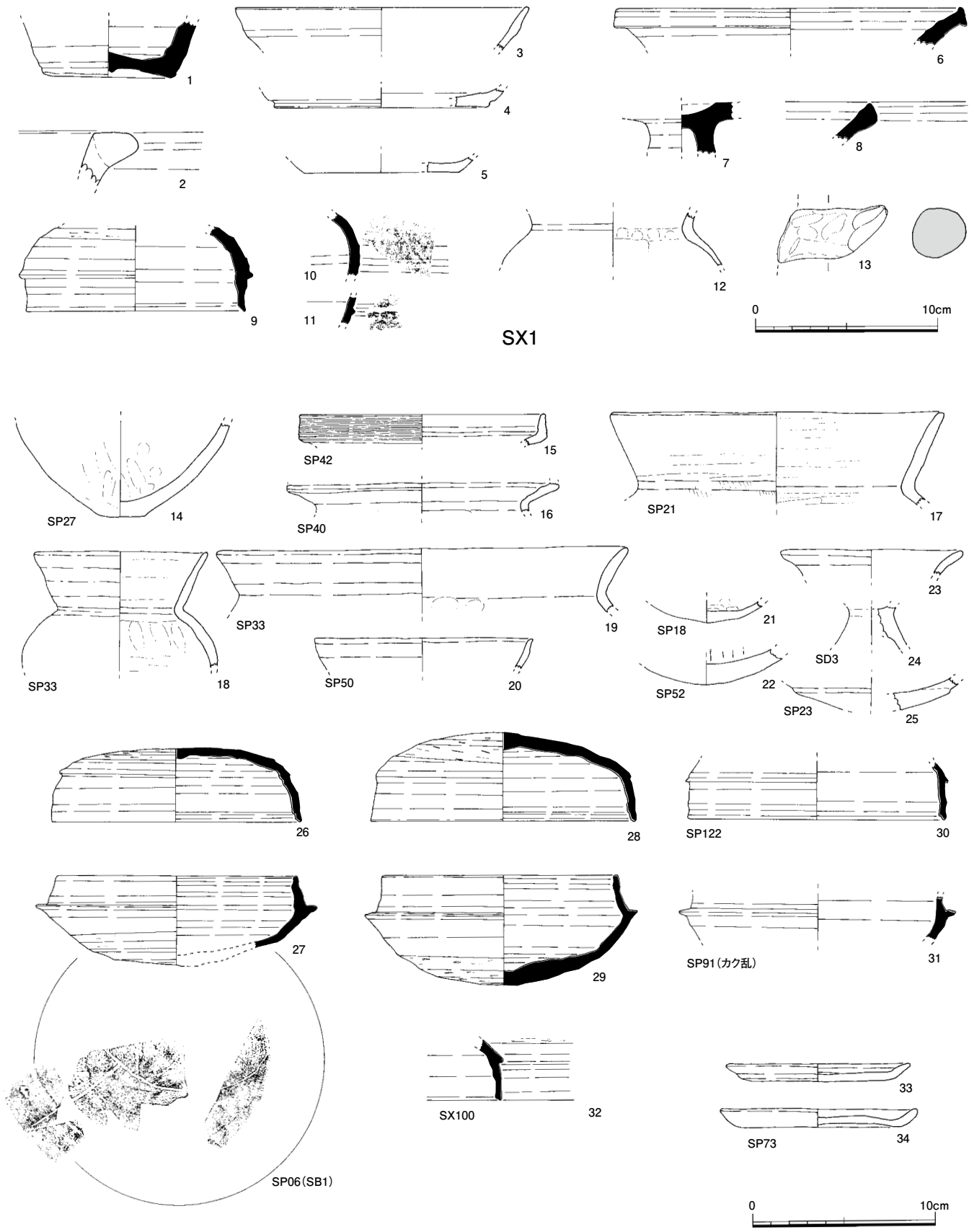


Fig.9 出土土器実測図 1 (1/3)

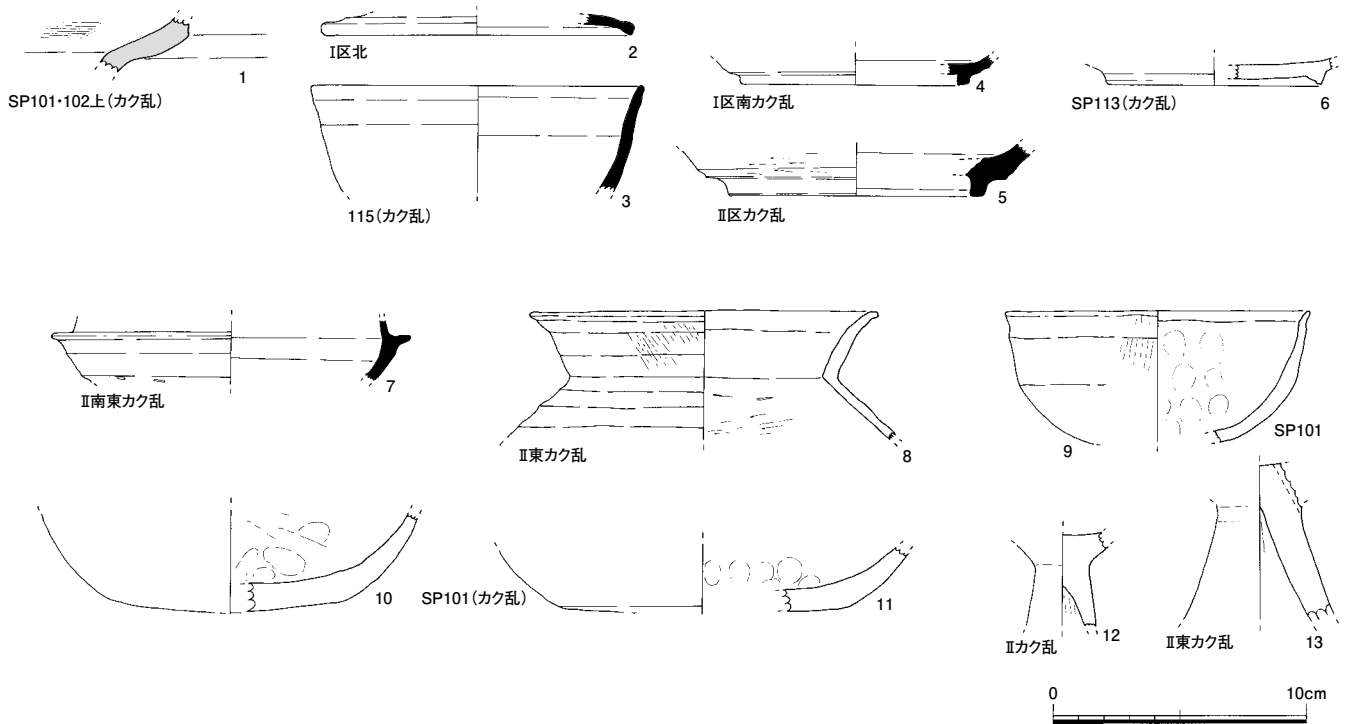


Fig.10 出土土器実測図 2 (1/3)

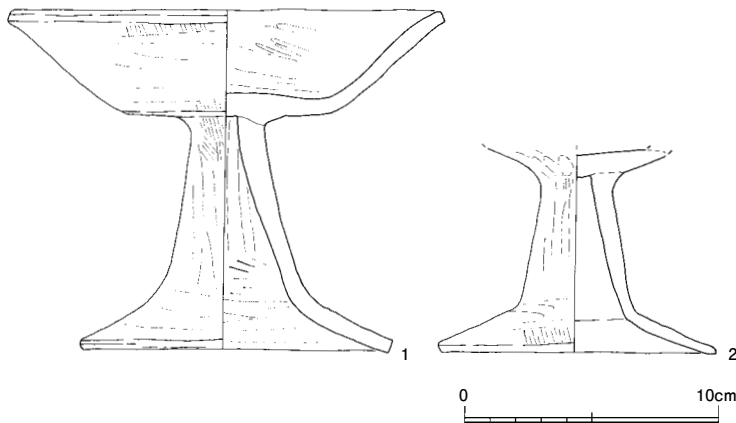


Fig.11 試掘49地点出土土器実測図 (1/3)

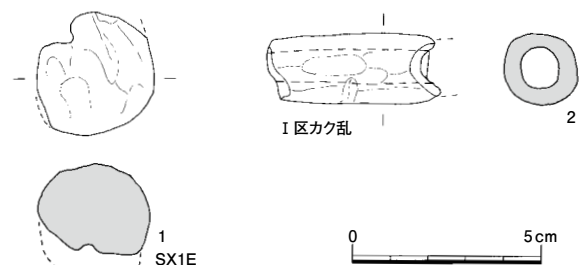


Fig.12 出土土製品実測図 (1/2)

SX 1 からは古墳時代の土器が多く出土するが、中世前半の土器・陶磁器も散見されるので、当該期に形成されたものと考えられる。

2) 出土遺物 (Fig.9~14)

主に上記の遺構や攪乱から、古墳時代後期を中心とする土器が出土した。その他の時期では、縄文時代早期の黒曜石石器、古墳時代初頭前後の土器（吉備系含む）、奈良時代後半から平安時代の土器、中世の土器、陶磁器が出土している。

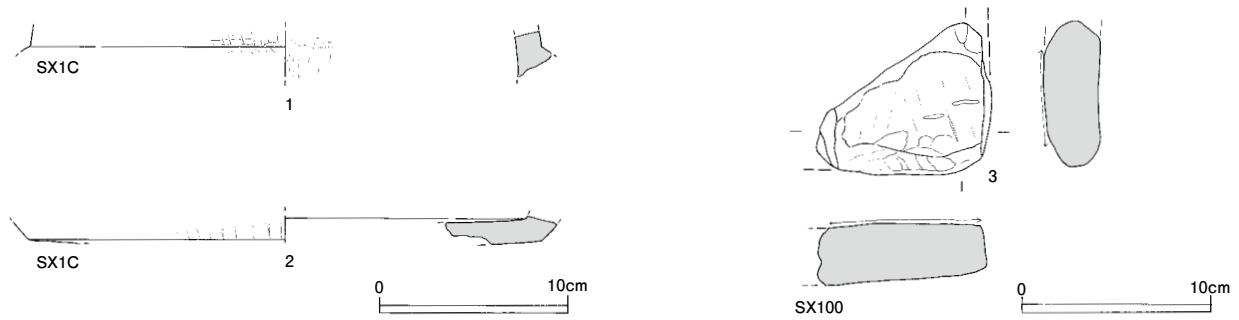


Fig.13 出土石製品実測図 (1/4)

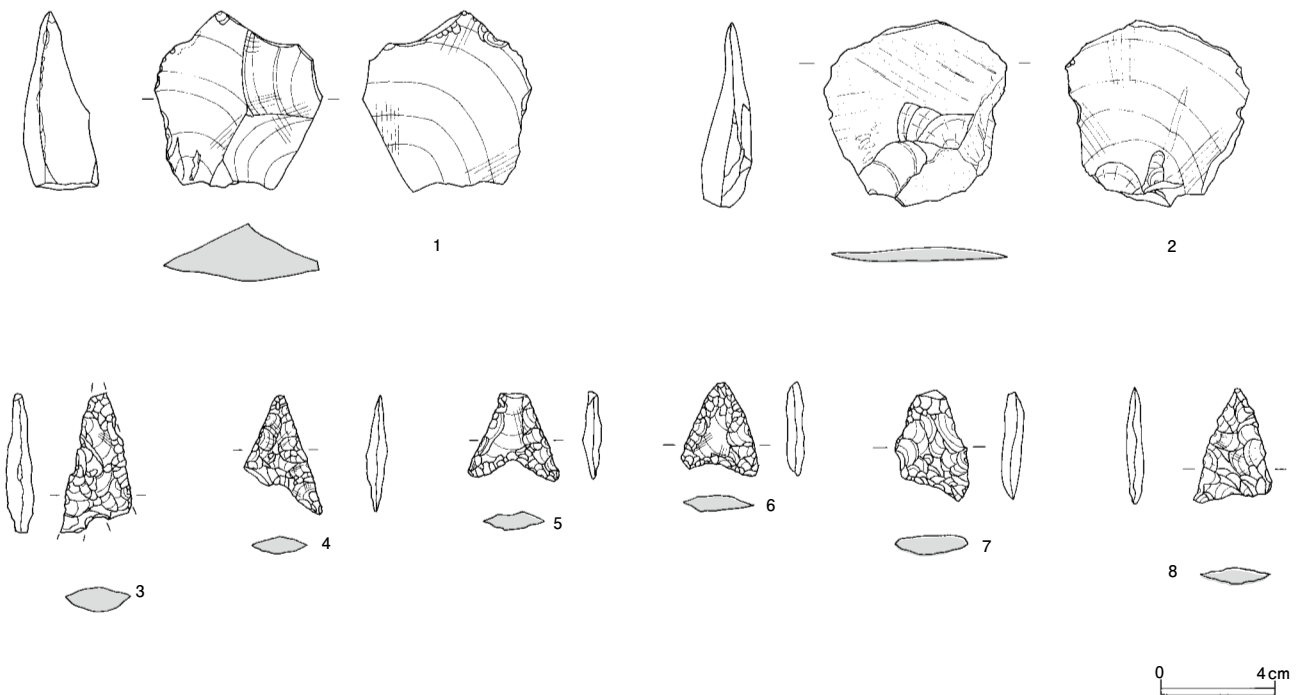


Fig.14 出土石器実測図 (2/3)

①土器・土製品 (Fig.9~12)

SX 1 からはFig.9の1~13のような土器が出土している。1~5は中世前半と考えられる陶器と土器である。1は陶器の壺底部で中国製かもしれない。2は土師質の鍋口縁部とみられる。3~5は土師器の坏・皿であり、5は灯明皿として使用されている。6~8は奈良時代前後とみられる須恵器である。6は広口壺口縁部、7は高杯脚部、8は甕口縁部である。9~11は古墳時代中期~後期の須恵器である。9は杯蓋、10は櫛描波状文を有する・甕などの胴部、11は櫛描波状文を有する無蓋高杯である。12・13は古墳時代中期の土師器である。12は布留式系の直口口縁壺の頸部付近、13は甕把手である。

Fig.9の14~29と33・34はI区の遺構から出土した土器である。14は平底の甕底部であるが、弥生時代後期の土器ではなく、古墳時代初頭前後のいわゆるV様式土器である。15・16は吉備系の甕口縁部である。15は口縁部が直立して外面に擬凹線文が施されている。古墳時代初頭から前期前半の型式である。これらと同時期の在来系土器の出土に乏しいが、21の甕底部などがそれに該当するであろう。18~20・22~25は古墳時代中期から後期の土師器である。17は直口広口壺口縁、18は小型の直口口縁壺上半部、19は甕口縁部、20は布留式系の小型甕または直口口縁壺の口縁部である。23・24は同

一個体の可能性が高く、小型の高坏と考えられる。25は高坏の坏下部である。

26～29はSP06（SB1）よりまとまって出土した古墳時代後期の須恵器坏身と蓋である。27の底部外面にはヘラ記号が施されている。28と29は古墳時代後期前半（小田先生の九州須恵器編年Ⅱ期）の型式で、陶邑産の可能性が高いが、26・27はⅢA期の型式であり、牛頸窯産の可能性もある（中村勝氏ご教示）。また、26は高杯の蓋である可能性があり、法量的にもこれらが各々蓋と身のセットになる可能性は薄い。Fig.9-30、31、32、Fig.10-7も古墳時代後期前半の須恵器坏であるが、SP122出土の30以外は中世以降の包含層（SX100）や攪乱からの出土である。33と34はSP73より一括出土した土師皿で前者は完形に近い。底面に板状圧痕があり、12世紀後半頃のもであろう。Fig.10は攪乱や遺構面から出土した中世以前の土器である。1は瓦質土器（鍋か）の口縁部で中世後半以降のものともみられる。2～5は奈良時代後半から平安時代前半の須恵器で、6は平安時代の土師器である。2は蓋口縁部、3は椀口縁部、4・5は椀の高台部、6は椀または杯の高台部である。8～13は古墳時代の土師器である。8は古墳時代前期前半の広口直口口縁壺である。

Fig.12は土製品である。1は土玉、2は管状土錘である。いずれも時期の特定は難しい。

Fig.11は参考資料である。第3・4次調査区に近い試掘49地点（Fig.12）で、谷斜面の包含層より出土した古墳時代中期の土師器を図化した。いずれも高坏で、古墳時代中期初頭に当たる。

②石器・石製品（Fig.13・14）

Fig.13の1・2は滑石製石鍋、3はシルト岩製の砥石であり、いずれも中世以降の石製品である。

Fig.14は縄文時代以前の黒曜石器である。これらの石器の所見については吉留秀敏氏（本市埋蔵文化財第2課）よりご教示いただいた。石材は1～7が腰岳産で、8が姫島産である。1は旧石器剥片を利用したスクレーパーである。2も縄文時代早期以前の剥片を利用したスクレーパーである。3～6は無茎の有刺式石鏃で縄文時代早期とみられる。7は五角形鏃で縄文時代後・晩期のものである。8は姫路島産黒曜石製の無茎凹基式鏃で、縄文時代後・晩期のものであろう。

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代初頭前後、古墳時代中期～後期中葉、中世前半の遺構・遺物を検出した。出土遺物には縄文時代早期以前の石器もあり、本調査区が立地する沖積微高地の形成時期を示唆するものであろう。後世の攪乱や地形改変が著しいために、遺構面の残りが悪かったが、主要な遺構は、古墳時代後期前半が主体の掘立柱建物と、中世前半の畑作関連とみられる遺構である。

女原遺跡は、古墳時代中期以降に集落形成がなされる遺跡と考えられてきたが、今回の調査では古墳時代初頭前後の遺構・遺物も検出することができた。遺物が少量ながらも、吉備系やV様式系の土器が含まれており、当該期に今山遺跡や今宿遺跡といった海浜部の集落で外来系土器の出土が増加することと関連しているであろう。また、本調査地点の近隣には古墳時代前期の前方後円墳である若八幡宮古墳や山ノ鼻1号墳があるが、今のところその母体となる集落が不明であるので、今後の周辺での調査で古墳時代前期集落が発見されることを期待したい。

今回の調査でみつかった集落関連遺構の主たる時期は古墳時代後期前半で、女原遺跡の集落域が広がる段階である。女原遺跡第3・4次調査成果から、古墳時代中期以降の集落形成には渡来人集団の果たした役割が大きかったと考えられるが、後期以降は大陸色がほとんどみられず、在地集団に埋没しながら集落が発展していったものと考えられる。



1 調査区全景（東から）



2 I区全景（北から）



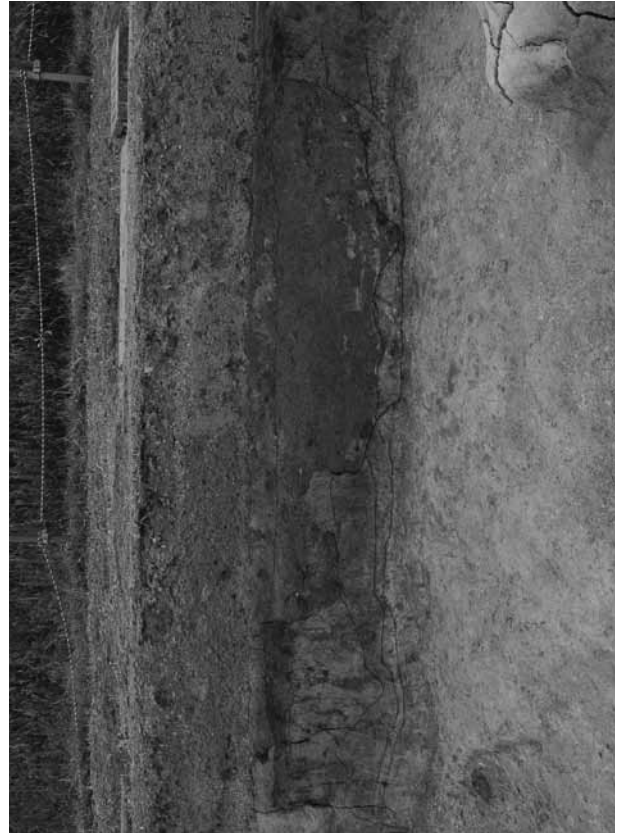
1 I 区北部 SB 1 ほか掘立柱建物群 (北から)



2 SB2・4 周辺 (西から)



3 SP06 (SB 1) 須恵器出土状況 (北から)



4 Tr1 周辺調査区南壁 (北から)

IV. 谷遺跡第3次調査の報告

1. 調査の概要

谷遺跡は今宿五郎江遺跡の南に隣接する遺跡で、弥生時代後期から古墳時代前期については、一連の遺跡群としてみることができる（Fig.15、16）。ここで報告する第3次調査地点は遺跡の北部に位置しており、第1次調査地点の南側隣接地である。沖積微高地縁辺に立地しており、現況は2m以上盛土造成された宅地である。弥生時代後期前後の環濠集落である今宿五郎江遺跡の南約60mのところに位置しており、本調査地点も同時期の遺構と遺物が主体である。

谷遺跡の第1・3次調査地点は弥生時代後期前後の今宿五郎江遺跡と同時期の生産域であり、第2次調査地点ではさらに古い、弥生時代前期の生産域が明らかになっている。

調査は現代の造成土と旧耕作土を除去した地表下約250cmで検出される包含層の精査から着手した。この包含層は第1次調査の「158」と一連のものである。なお、1次調査区の東部は谷の深部であるが、遺構・遺物は検出されていないので、本調査地点でも試掘で包含層が東に広がらないことを確認してから、敷地東半部を調査対象外とした。調査区の西端は地山の青灰色シルトであり、標高7.3mほどの微高地東縁辺に当たる。地山は東側の谷に向かって緩やかに落ちていく。

調査の基準座標は調査区の形状によって任意に設定したものである。

当初は調査の主体が遺物包含層の掘削と考えていたため、Fig.18のように、包含層の方向（谷筋）に直交するように、I～VIの6つに区分して調査を行った。

調査区の中央で検出した遺物包含層は南北に伸びる自然流路状の堆積で、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の土器が多いが、7世紀以降の土器も散見されるので、その時期に形成されたものかもしれない。その南端部には包含層によって埋没している乱杭があり、井堰の一部と考えられる（SX1）。

この包含層より下層には砂層の堆積があり、その下部を中心に、弥生時代終末期前後の土器と木器が多量に出土する。この砂層は弥生時代後期から終末期に機能した水路（SD8）等の覆土である。木器の出土位置は調査区東部に比べて乾燥しており、木器の遺存状態もあまり良くなかったため、個別の検出ごとに実測と写真撮影を行ってとりあげている。

一方、調査区の東部は上層に顕著な遺物包含層がみられなかったが、同時期の層の下10～30cmほどのところで、木製品を含む木材や杭の集中層があった。精査したところ、それらは、大畦畔内部の構築材（SX5）や井堰（SX4）が2時期以上重複したものであった。この大畦畔は自然流路の堆積上に構築されたものであり、井堰と護岸杭列等は下層の自然流路に対応するものである。調査区の南端部に先行トレンチを入れたこともあって、調査では大畦畔と井堰を同時に検出しているが、その先後関係を認識して調査を進めた。

上層の自然流路状の遺物包含層とそれによって埋没する乱杭（SX1）を第1面、調査区東部の大畦畔（SX5）と西部の木器を包含する砂層（SX5廃絶直後の堆積か）を第2面、自然流路が主要な用排水路で井堰（SX4）や付設水路（SD8）が機能していた段階を第3面とする。第3面の基盤層は大部分が地山である。各面の時期の特定は難しいが、第1面は古墳時代前期前半以降、7世紀代まで、第2面は弥生時代終末期から古墳時代前期前半、第3面は弥生時代後期後半から終末期の時期幅のなかで捉えておきたい。



Fig.15 谷遺跡の調査地点と周辺の遺跡 (1/4000)

第1面と第2面の包含層を中心に出土した遺物の主体は弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の土器で、コンテナケースMサイズ約50箱の出土である。土器は破片が多く、完形品は少ない。他の土器は7世紀代の須恵器と土師器が少量である。また、第2・3面からは100点を越える木製品が出土している。杭以外では、建築部材、日常的道具（土木具、工具把、運搬具、漁撈具など）が主体である。仕切りを有する箱形の容器や絵画線刻のある杓子の把も出土しているが、今宿五郎江遺跡のような特

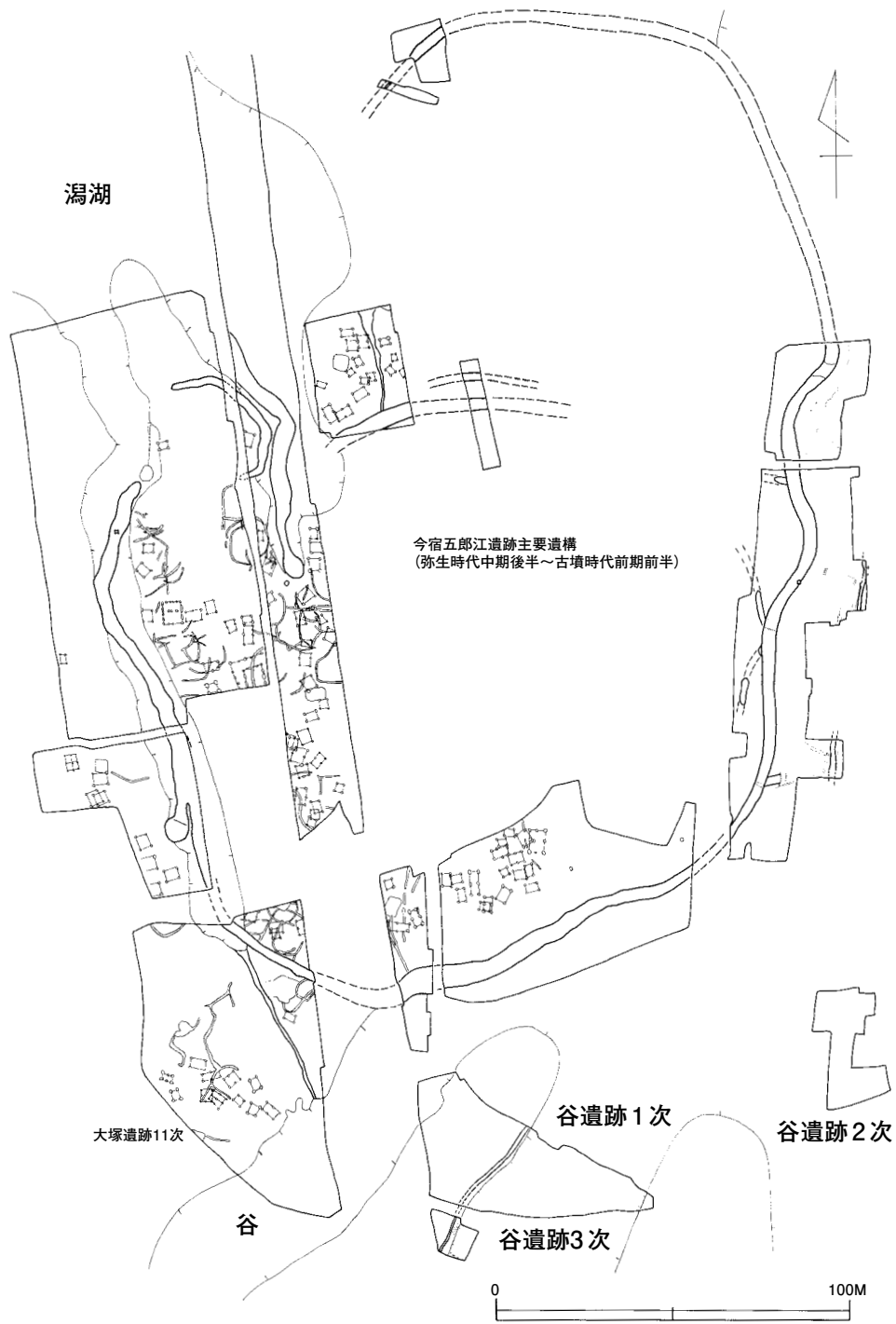


Fig.16 弥生時代後期前後の谷遺跡と今宿五郎江遺跡 (1/2000)

殊木製品の出土は少ない。一方、金属器の出土はなく、石器・石製品の出土も少ない。石製品には土器や木器と同時期の環状石錘と砥石のほか、縄文時代の蛇紋岩製磨製石斧も出土しているが、表土からの出土であり、調査区周辺の低地の開発が縄文時代まで遡るとは言い難い。



Fig.17 谷遺跡第3次調査地点 (1/500)

2. 調査の記録

調査地点の基本層序として、調査区の北壁と南壁の土層実測図を示す（Fig.19）。表土の造成土は省略しており、耕作土以下を図示している。以下の記述の土層番号は南壁の番号を指すものとする。

また、今回の第1～3面の設定は調査時に行ったものではなく、調査後の検討結果によるものである。実際の調査の進行は以下の通りである。

調査では、まず重機で3層までを掘削し、4・5層の遺物包含層を遺構検出面とした。第4層には遺物が多く、包含層とSX1を検出・精査した段階で最初の全景撮影を行った。

調査区南端に先行トレンチを入れたところ、22層周辺で木器や木材を包含する層を検出した。調査区東部の5～8層はあまり遺物が多くないこともあり、第2面調査時には、調査区東部の一部を拡張して、22層上までを重機で掘削している。22層以下を人力掘削で下げたところ、木材の带状集積や井堰を検出した。前者は大畦畔の根固めと考えられる遺構（SX05）であり、後者はそれに先行する井堰（SX04）である。調査区東部のSX05等の精査と併行して、調査区西部も4層以下を掘り下げたが、下の砂層（南・北壁10層：第2面包含層）下部からは木製品が多く出土した。木製品の保存状態が不良のため、個別検出ごとにとりあげ、10層の掘削を進めた。このような事情から第2回目の全景撮影はSX05を中心としたものであったが、調査区西部はおおむね第3面の遺構を検出した状態であった。

SX05の記録後、調査区東部を下層まで掘り進めたところ、井堰SX04に対応する自然流路や護岸の杭列を検出し、調査区西部で先行して検出していた、水路や矢板列との関連も明らかにすることができ、第3回目（最終）の全景撮影を行った。

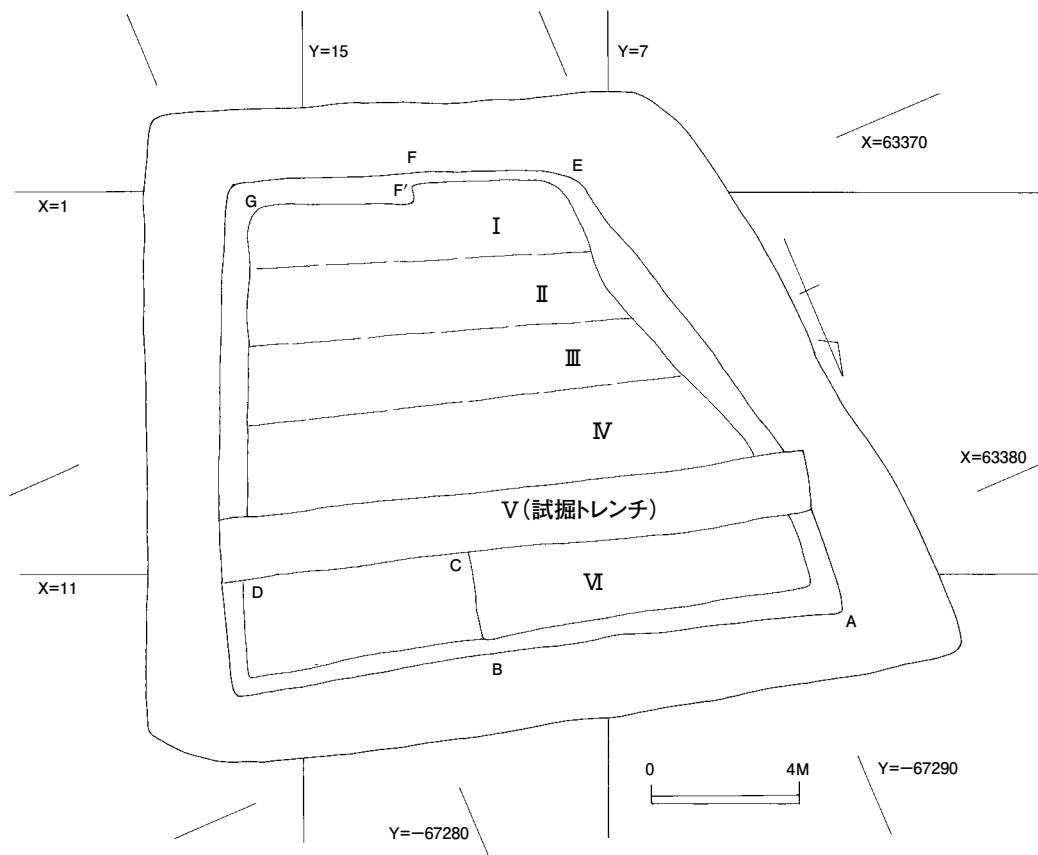


Fig.18 谷遺跡第3次調査のグリッドと区 (1/200)

1) 第1面の遺構 (Fig.20)

調査区中央部付近で検出した南北方向の遺物包含層(4層)とその南端部で検出した乱杭(SX01)である。東部の谷は埋没が進んでいる。

包含層(4層)は、東西幅3m前後、厚み20cm前後で、自然流路の滞水時の堆積である。第1次調査の158と一連のものと考えられる。

乱杭SX01 (Fig.21) は4層に先行するか、その堆積中に設けられたものである。直径10cm前後の丸杭多数と少数の矢板が東西2.5mほどの範囲に不規則に打ち込まれたもので、調査区南外にも続くであろう。周辺に横たわる板や丸木なども含めて、井堰の構築材と考えられる。本調査地点でみつかった水田関連遺構の中では最も新しいものであるが、覆土の出土遺物 (Fig.40) などからも、先行する遺構とかけ離れた時期のものではなく、古墳時代前期前半までの可能性が高いと考える。

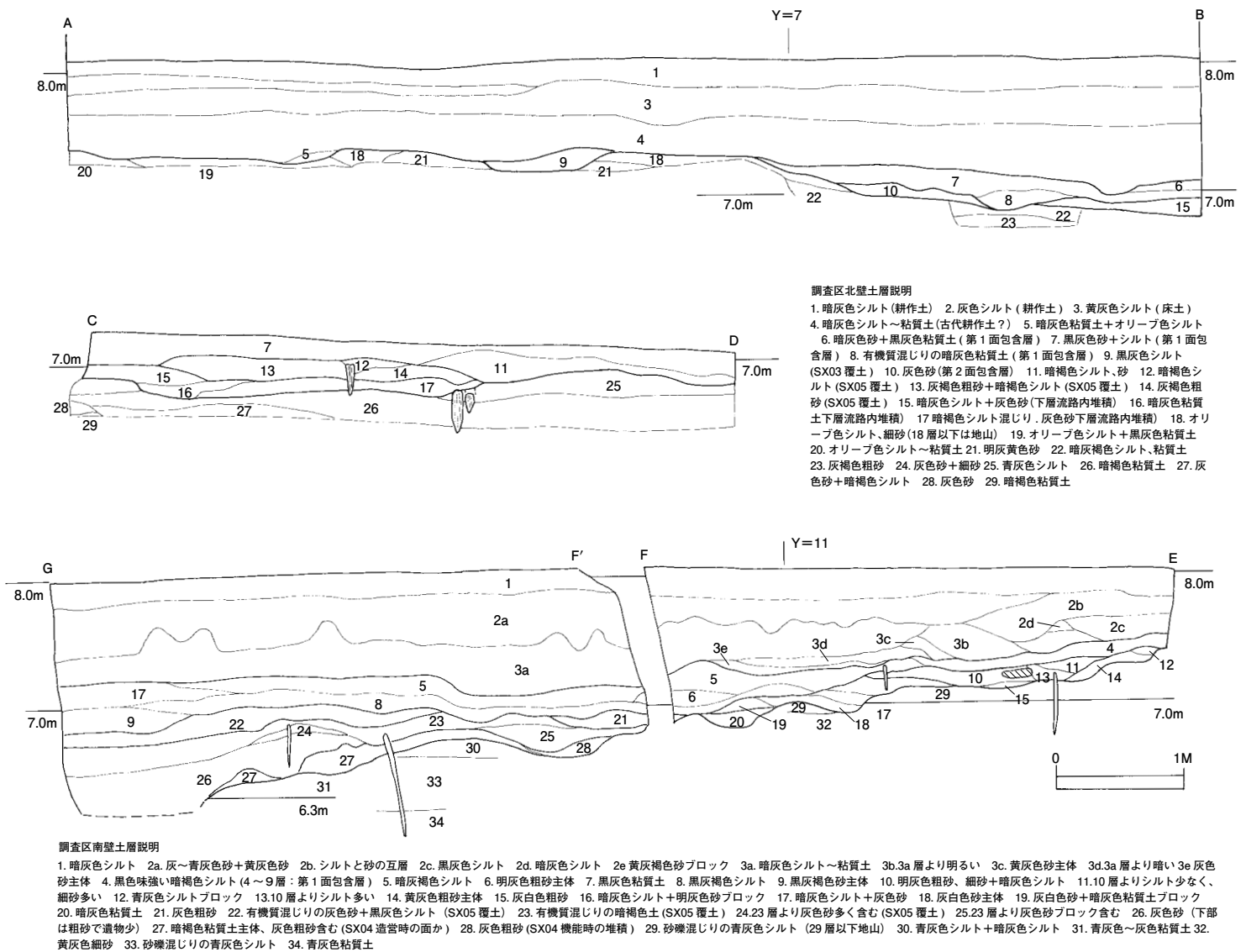


Fig.19 調査区北壁・南壁土層図 (1/60)



Fig.20 第1面遺構配置図 (1/100)

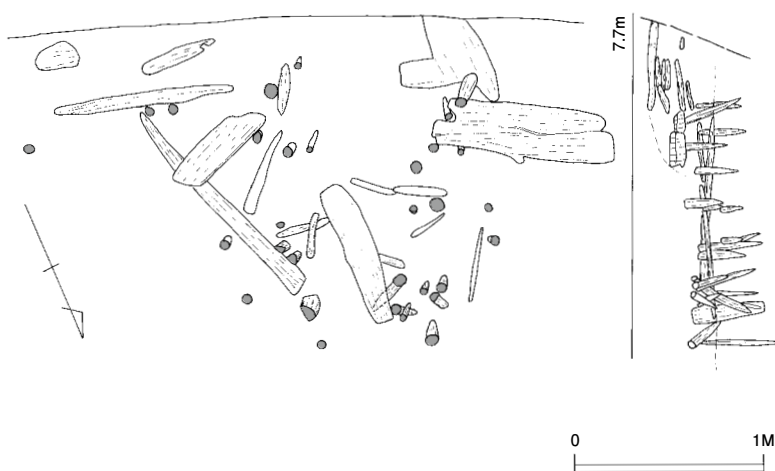


Fig.21 SX01 実測図 (1/40)

2) 第2面の遺構 (Fig.22)

調査区東部に南北方向の大畦畔(内部の構築材) SX05があり、中央部から西部に木製品が出土する砂層(10層)が南北に伸びる。この10層は第3面のSD08等を覆う層である。

10層出土の木製品はレベルがほぼ揃っており、一括的に遺棄されたものであろう。

SX05(Fig.23)は不規則に打ち込まれた丸杭の周囲に長い板材や丸材を含む木材を集積したもので、東比恵3丁目遺跡などに類例のある大畦畔内部の構築材と考えられる遺構である。10層にはやや先行するかもしれない。大畦畔の盛土を平面的に検出することはできなかったが、土層断面から22~24層や北壁の12~14層などがそれに当たると考えられる。また、SX05の中ほどには東に向かって伸びる杭列や木材があり、大畦畔から派生する畦があったと考えられる。木材の集中は調査区の北まで広がっていないが、これは、基盤の弱い箇所の根固めのために設けられたからであろう。木材が集中する範囲の下層は井堰SX4と周辺の水流による攪乱部分に当たる。

SX5には流木やほとんど加工のない木材が多いが、転用木製品もみられる。その木製品には梯子や鼠返しといった建築部材が目立ち、鍬や斧把などの日常道具も含まれる。

これらから復元される大畦畔は幅2.4m前後、高さ20cm以上である。今回の調査では検出できなかったが、調査区の東部まで水田が広がる段階と考えられる。



Fig.22 第2面遺構配置図 (1/100)

3) 第3面の遺構 (Fig.24・25)

調査区東部を南から北に流れる自然流路を主要な用排水路として、その集水用の井堰SX04や付設水路のSD08などが伴う段階である。杭列5は自然流路の護岸杭、矢板列1とSX07は付設水路SD08の護岸、矢板列2と3は南北方向に伸びる畦兩岸の護岸のために設けられたものと考えられる。また、石1や石2も付設水路の水量調整のための簡易な堰として使用されたものであろう。当該期の水田を検出することはできなかったが、調査区の西部に広がっていたものと考えられる。

井堰SX04 (Fig.26) は、水流に直交して20cm間隔ほどで打ち込まれた丸杭列に横木を複数組む構造で、周囲は集水時の水の落下によって窪みが生じている。周辺から出土している鍬や妻壁材なども堰の横木部材として転用されたものであろう。長さ2.5m以上を検出したが、南東端が調査区壁面にか



Fig.23 SX05 実測図 (1/80)

かっており、もう少し伸びるであろう。井堰としては、一般的な構造であり、大規模なものではない。

自然流路が幹線水路と考えられるが、その東岸の一部に護岸用と考えられる杭列5がある。約60cm間隔の丸杭列（二列）であるが、水圧のかかりやすい地形的に東に落ちる箇所に設けられている。

付設水路SD08は調査区西部を南から北に水を流す水路であるが、南部では二又に分かれている（SD08のAとB）。SX09はSX04とSD08Aをつなぐ水口と考えられるが、SX04の下流側にも、SD08Aから伸びる溝状の掘り込みがあり、こちらは水尻と考えられる。矢板列2西がこれを横断するように南に伸びているのは、ここに排水調整のための簡易な井堰があったためであろう。杭列4はその水圧に耐えうる護岸のためのものと考えられる。このようにSD08A周辺は付設水路の水量調整をするための構造となっている。矢板列1とSX07はSD08の護岸のためのものと考えられるが、後者は矢板列に横板を組む構造となっている。溝がある程度埋没してから設けられたものである。

矢板列2と3はそれぞれ二列が平行して南北方向に伸びる。その間に盛土を検出することはできなかったが、周囲の状況からみて、畦の護岸と考えられる。矢板列2西の南延長部分は前述のように水尻閉塞のための立ち木としても機能したものであろう。

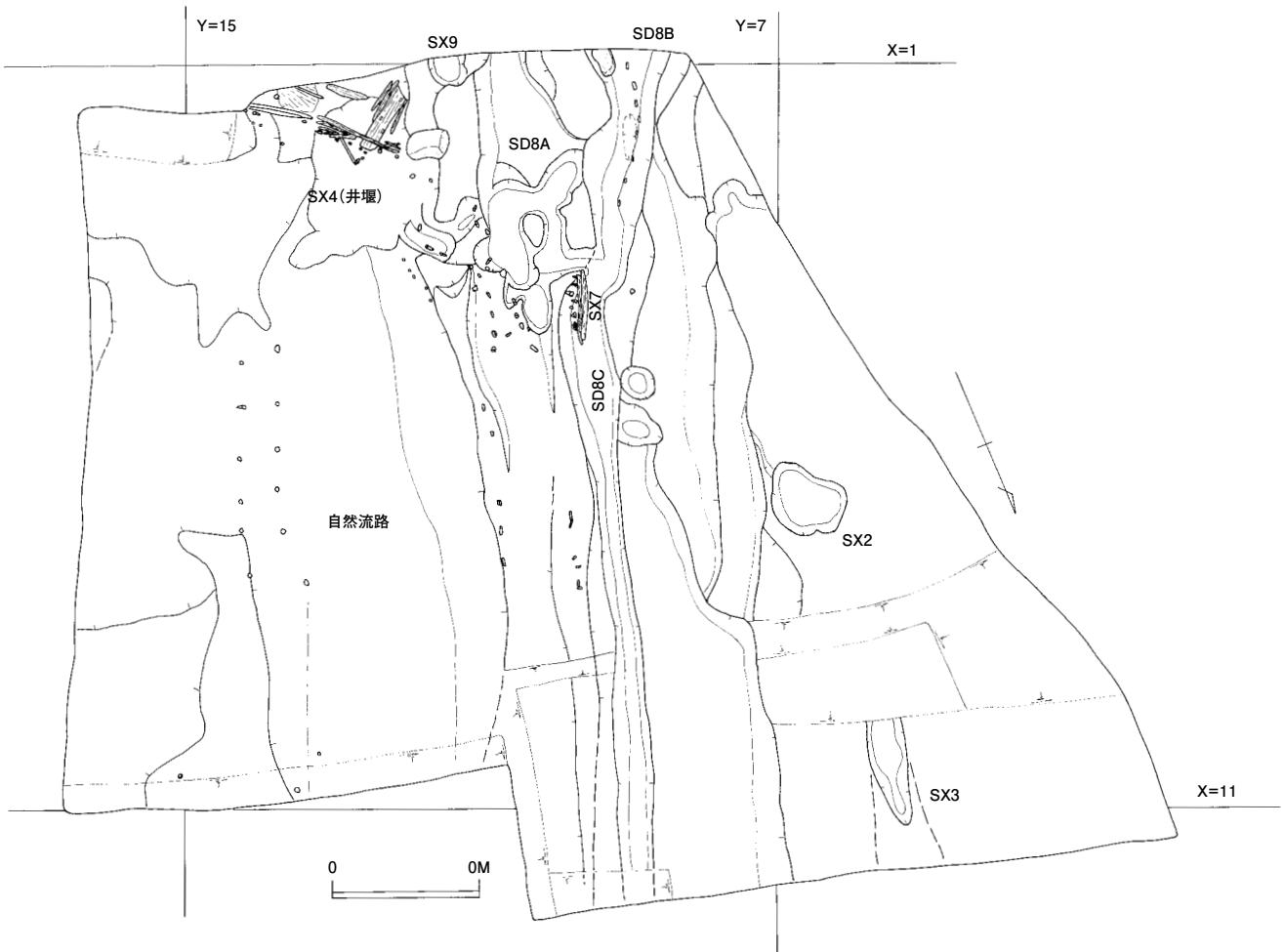


Fig.24 第3面遺構配置図 (1/100)

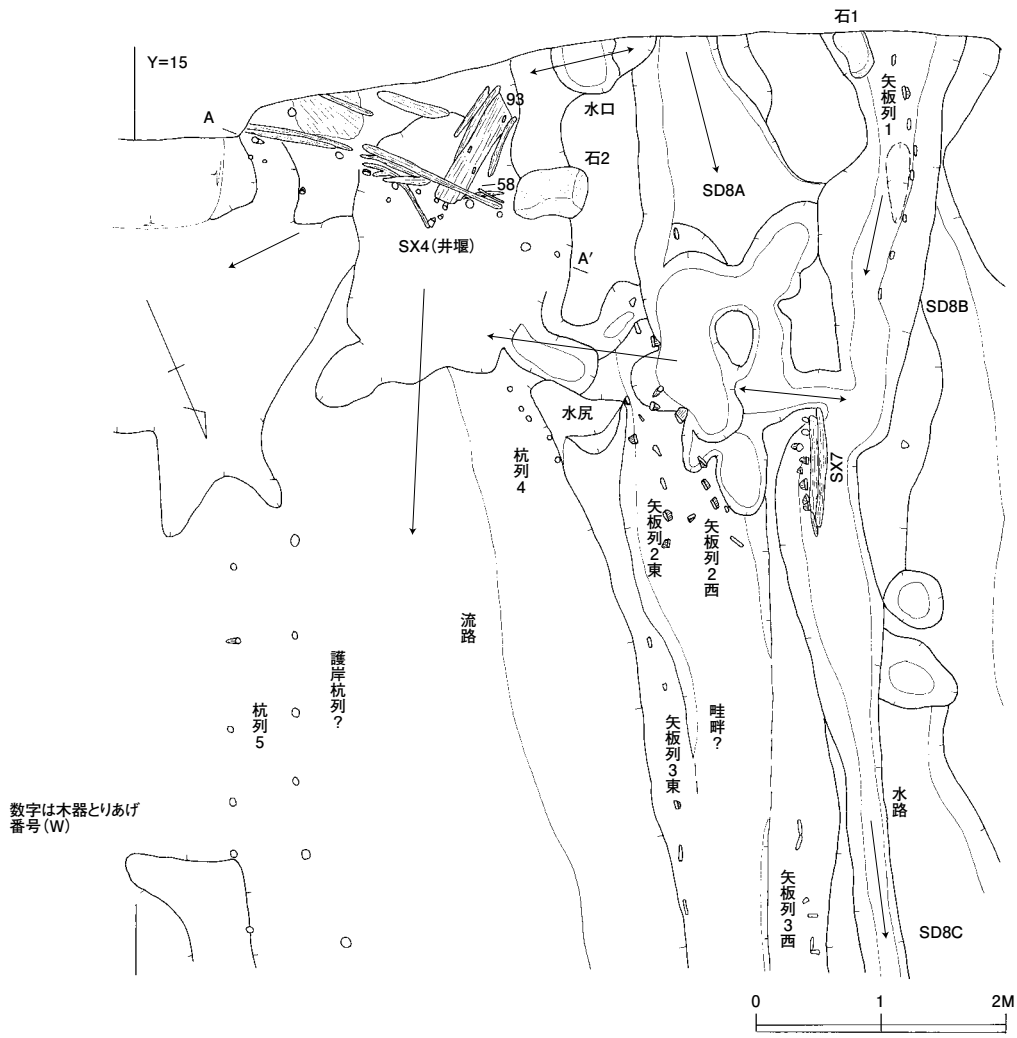


Fig.25 第3面南部遺構配置図 (1/60)

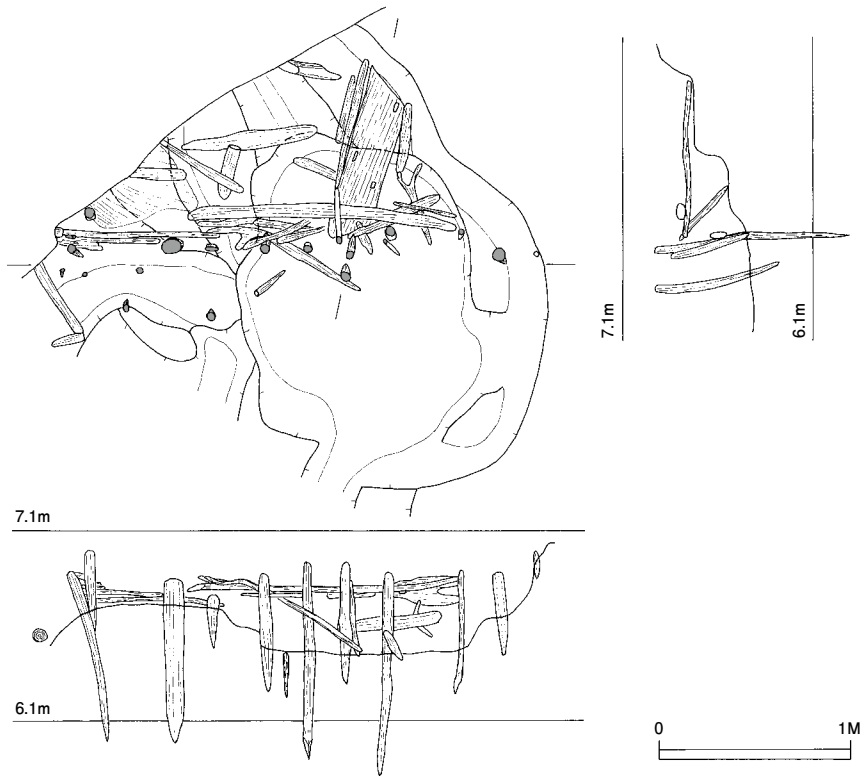


Fig.26 SX04 実測図 (1/40)

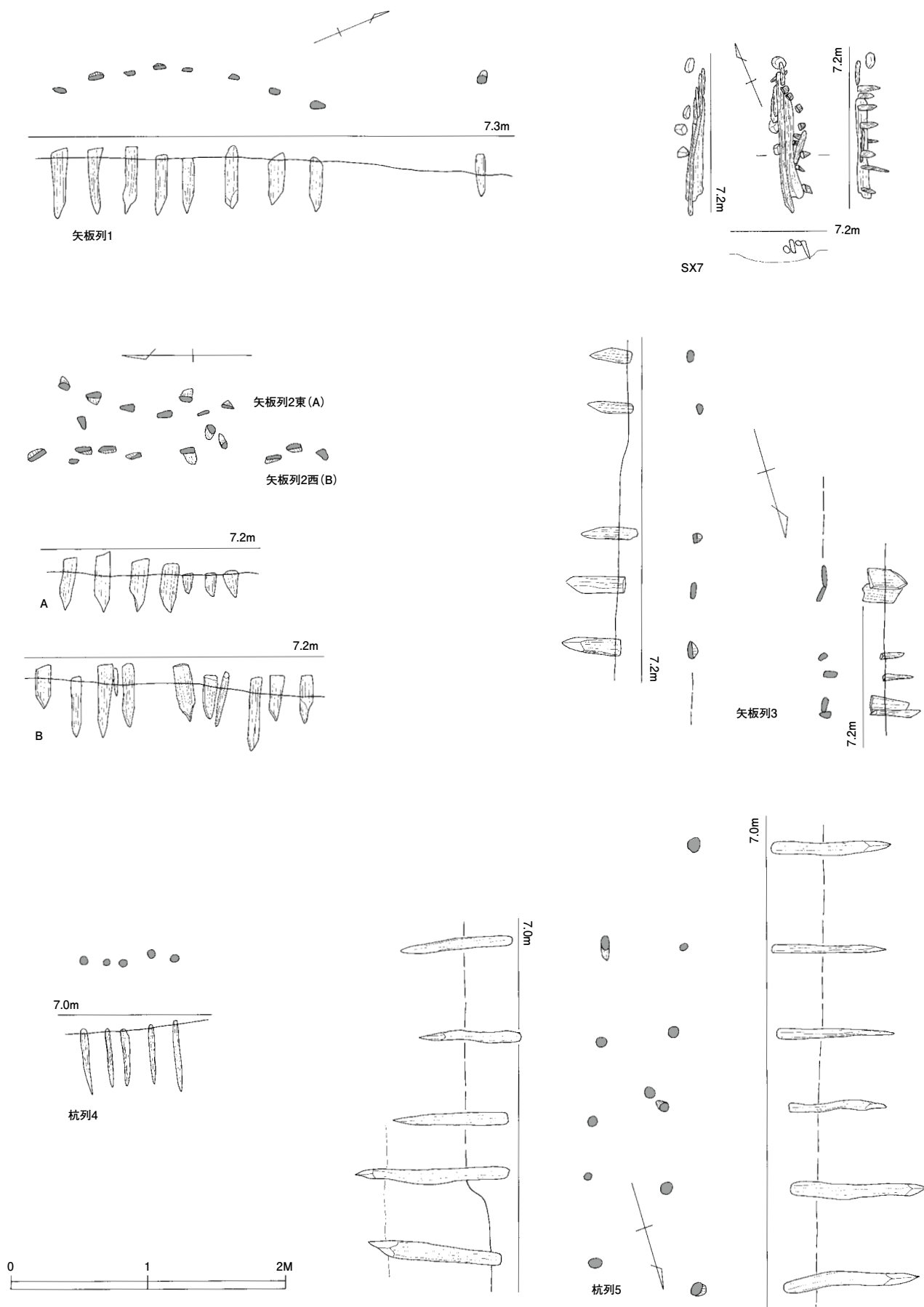


Fig.27 SX07、矢板列 1 ~ 3、杭列 4・5 実測図 (1/40)

4) 出土遺物 (Fig.28~50)

①土器・土製品 (Fig.28~42)

本調査地点から出土する土器は弥生時代終末期前後を主体とする。1面包含層と2面包含層（灰色砂層）からの出土が多い。異系統土器には東海系、近畿系（V様式系、布留系）、豊前系、肥前系などがあるが、隣接する今宿五郎江遺跡に比べて、外来系土器の出土は少ない。

以下、時期の記述は**I期**（弥生時代後期前半）、**II期**（弥生時代後期後半）、**III期**（弥生時代終末期）、**IV期**（古墳時代前期初頭から前半）としたい。糸島地域におけるその指標となる資料は次の通り。

I期：今宿五郎江5次SD2の7層、SD1の10層/同9層 II期：大原B1次SC埋土6層/三雲仲田I-16のSC17

III期：大塚14次SC1/今宿3次SK3、4、三雲仲田SC18 IV期：大塚4次SC26、27、三雲サキノI-1のSC1上層、三雲番上II-6のSC6/三雲中川屋敷I-12のSC06、御床松原SC38 * /は各時期の細別で前がより古い段階の資料を示す。

Fig.28は1面包含層出土の壺と鉢である。1~11はII~III期前後の複合口縁壺である。11は口縁端部が強く外反しており、複合口縁の下端部が鋤先状に突出するIII期の豊前系である。12~14は直口の広口、短頸壺である。15は細頸壺の頸部である。18は広口の大型壺である。口縁端面はナデと列点文が一連の動作で施される。17は杯状でやや精製の鉢、19~21は粗製の鉢である。いずれもIII期前後である。Fig.29は大型甕であるが、III期新相からIV期のものである。2は胴部突帯のタタキ目をほとんど消さず、列点文風の板状小口圧痕が施されている。Fig.30は甕である。1はI期以前の型式で古い。他はII~IV期のものである。15はIV期の布留系甕口縁部小片である。Fig.31には壺・甕等の底部や鉢を示した。底部はI~IV期の型式までみられる。7はII期の壺底部であるが、内底面付近に布目圧痕があり、成形のオサエ時に当てられたものであろう（PL12）。18は焼成前に底部穿孔がなされた鉢で、いわゆる甑形土器である。20の平底甕は近畿V様式系影響とみられる。22や23のような甕の脚台も一定量出土するが、脚台付甕は有明海沿海地域との関連が考えられる。27~33はII~IV期の鉢（壺）であるが、30・31はIV期の布留影響である。34はミニチュアの深鉢で、胴下半部付近は完存している。下半部は平底のコップ形で、上半部はロート状に開く。暗褐色の色調で外面ハケメ調整であるため、精製土器とはいえないが、異形である。Fig.32、33は高杯、器台、支脚である。1はII期でも古相の型式であるが、他はIII~IV期の高杯である。8は小型の有稜高杯である。12は東海系の小型高杯である。外面上部に4条の櫛描直線文と貝殻腹縁による列点文が2段ずつ施されている。13の脚部はナデ調整と粗いハケメ調整が施されているが、矢羽状文を意識したような調整となっており、異系統土器を意識したものであろう。32-24~26と33-1~3は器台である。II期以降の型式である。26は器台の受け部にダンゴ虫状の圧痕がある（PL12）。4~11は支脚である。III期前後の沓形が多いが、11は烏帽子形で、IV期であろう。

調査区東部の1面包含層からの出土遺物はあまり多くない（Fig.35）。1はIV期の複合口縁壺、8も同時期の布留系甕の口縁小片である。7も系譜が不明であるがIV期の異系統甕であろう。9のようなI期以前の型式の甕も出土している。

以上のように1面包含層はIV期までの土器が多いが同層や上層の灰色粘質土からはFig.34のような7世紀以降の土器も出土している。1~6は須恵器であるが、1は長頸壺の肩部付近で7世紀末~8世紀前半、2は返しを有する蓋で7世紀後半、3は8世紀代の蓋、4は7世紀前半の杯身、5は7世紀後半の低脚高杯である。6は6~7世紀の土師器高杯である。

Fig.36-1~15は2面包含層（灰色砂層）出土の甕である。II~III期の型式が主体になるが、11や13のようなIV期のV様式甕も出土している。11は在地系とは異なる右上がりのタタキ目に工具板の年輪の凹凸が明瞭に写っている（PL12）。内面はケズリ調整である。16は大型壺の胴部で三角突帯を4条

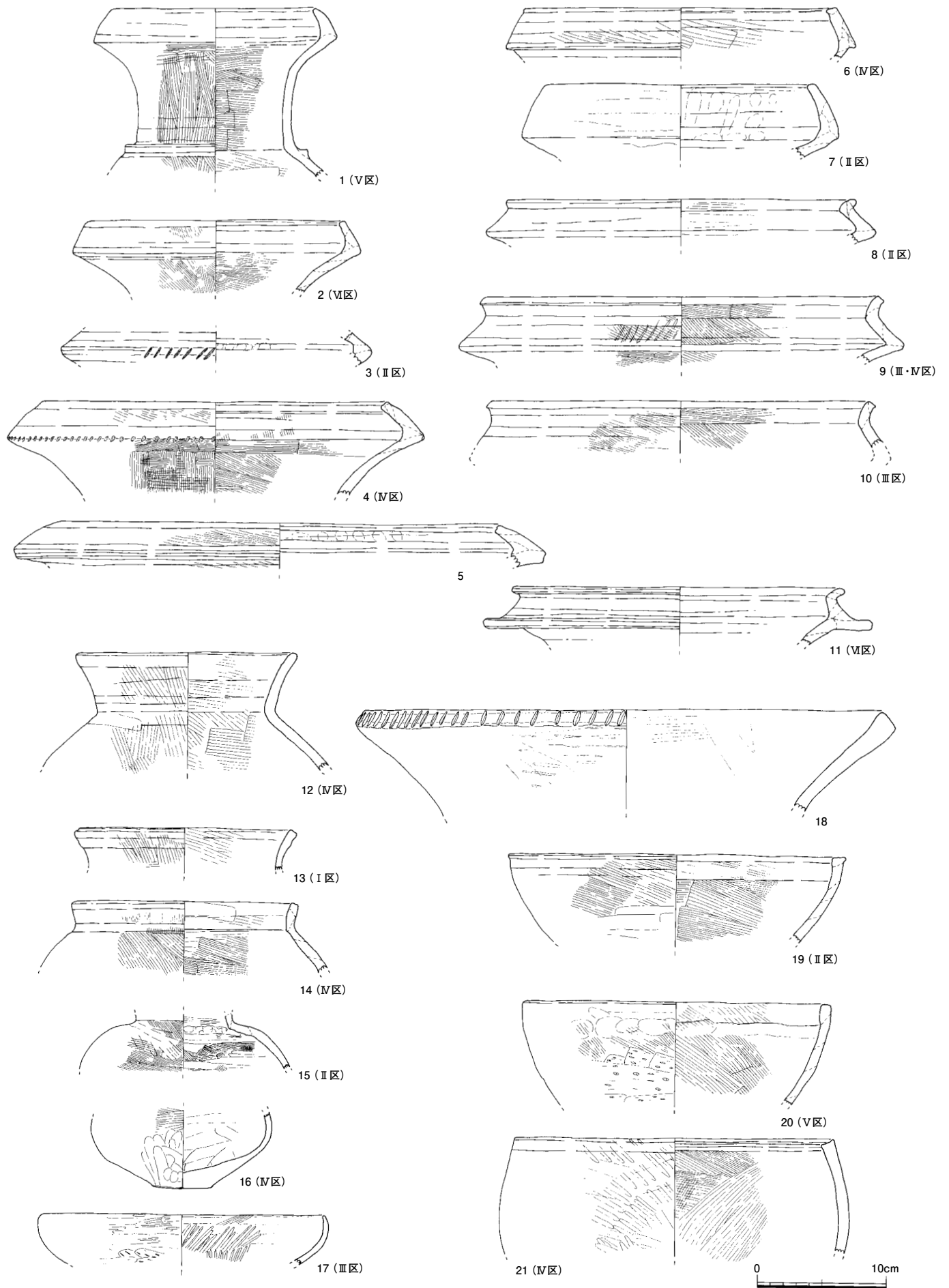
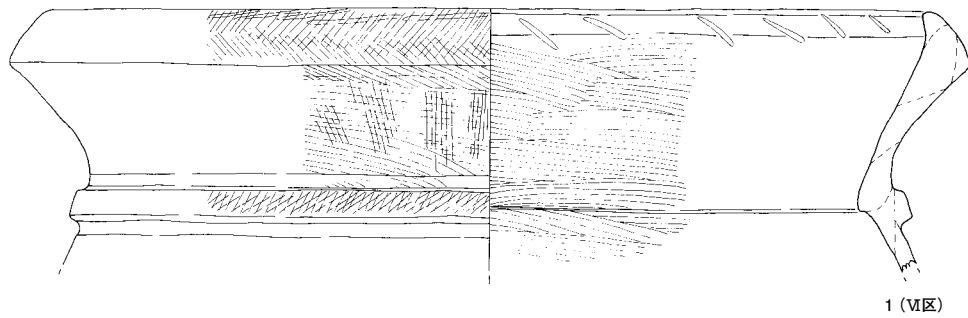
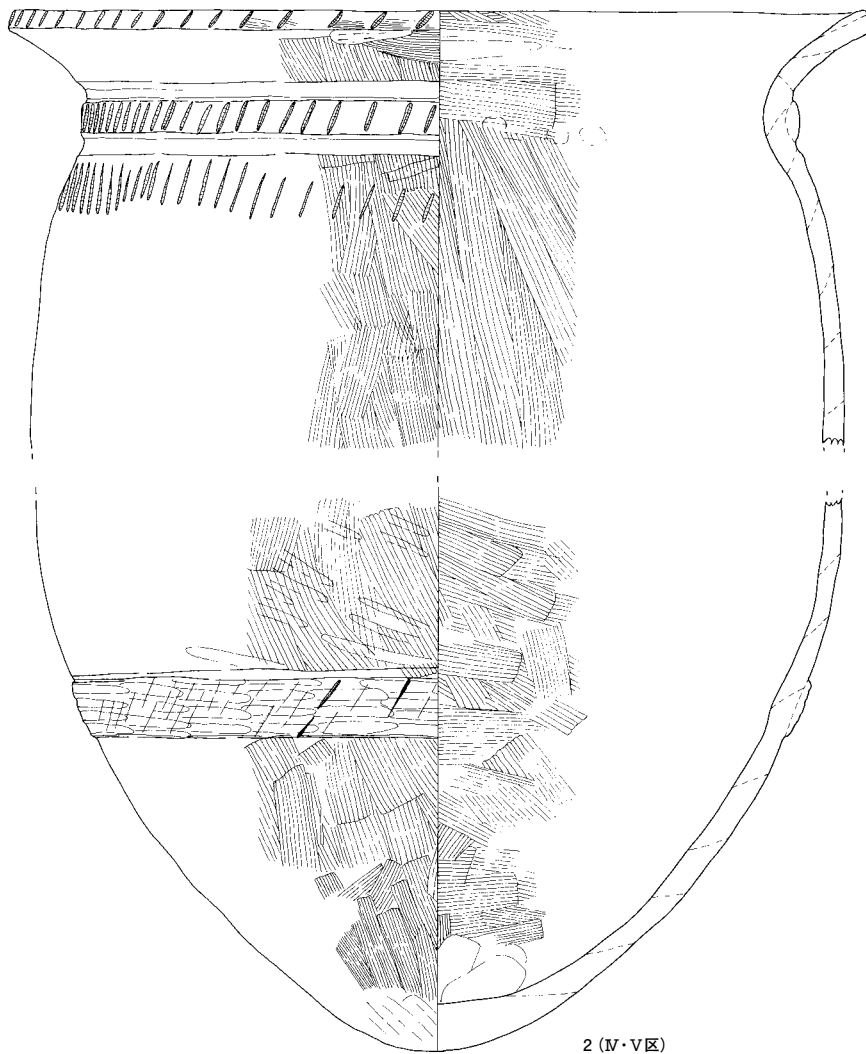


Fig.28 暗褐色シルト (包含層) 出土土器実測図1 (1/4)



1 (Ⅵ区)



2 (Ⅳ・Ⅴ区)



Fig.29 暗褐色シルト（包含層）出土土器実測図2（1/4）

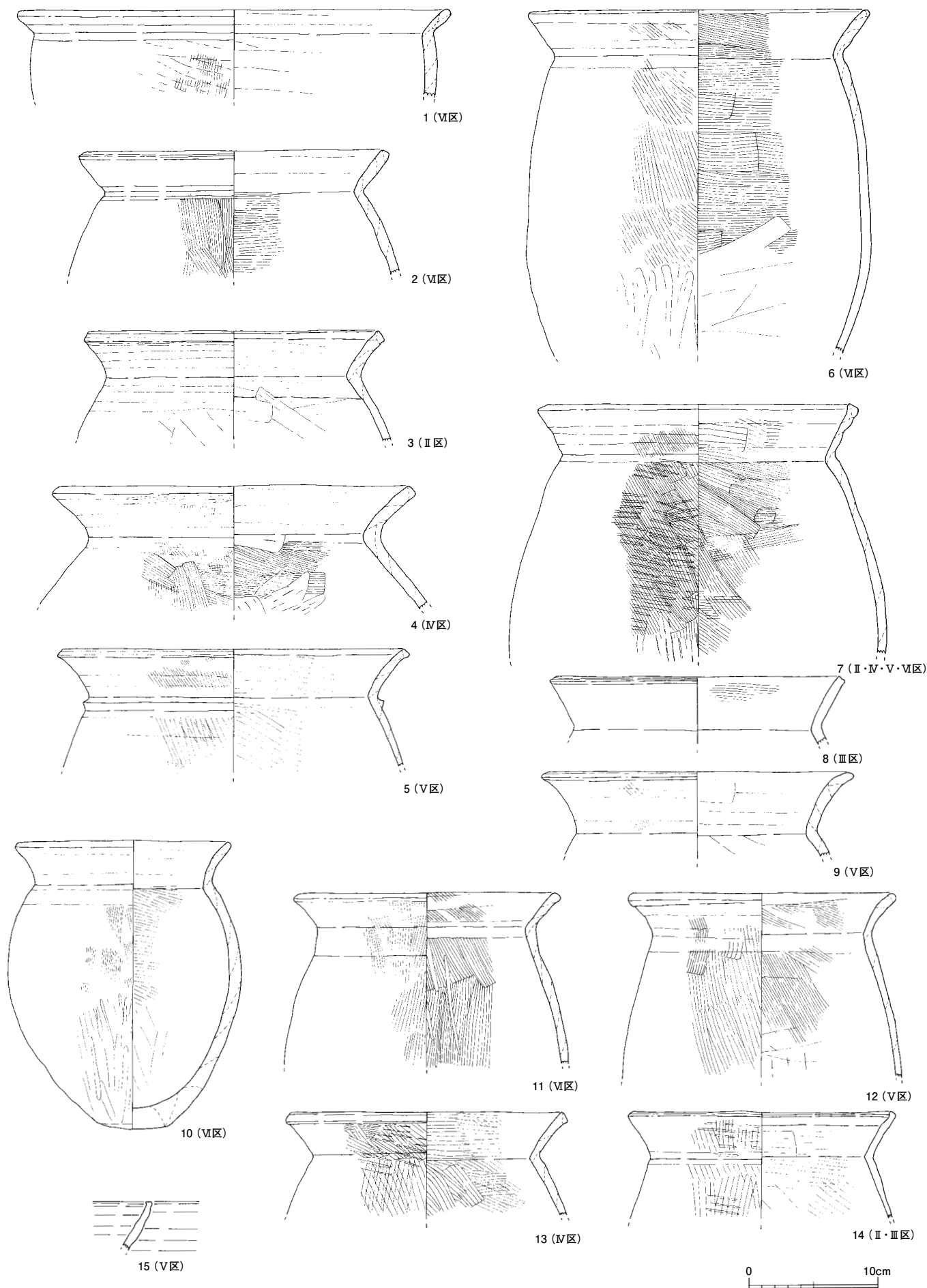


Fig.30 暗褐色シルト（包含層）出土土器実測図3（1/4）

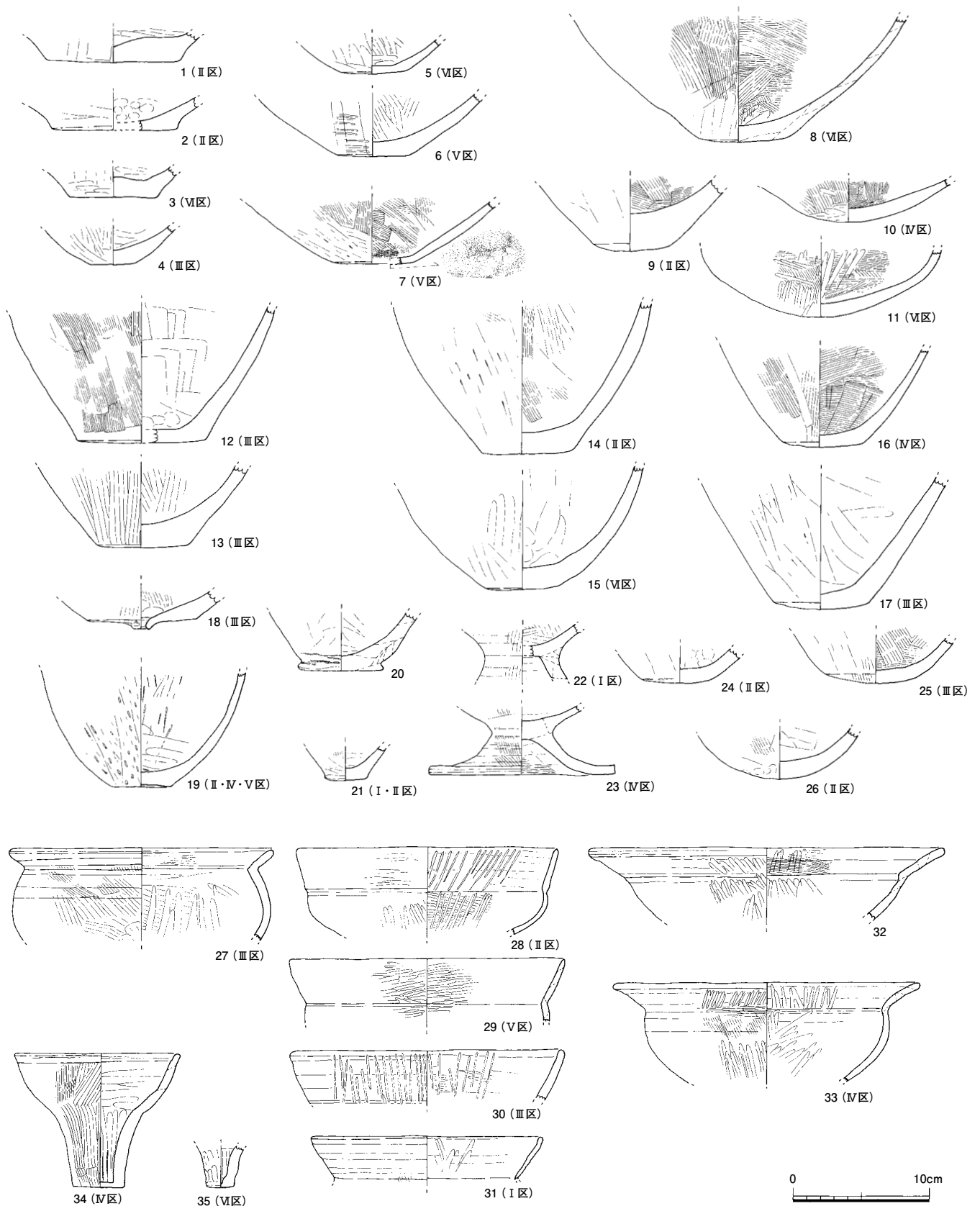


Fig.31 暗褐色シルト（包含層）出土土器実測図4（1/4）

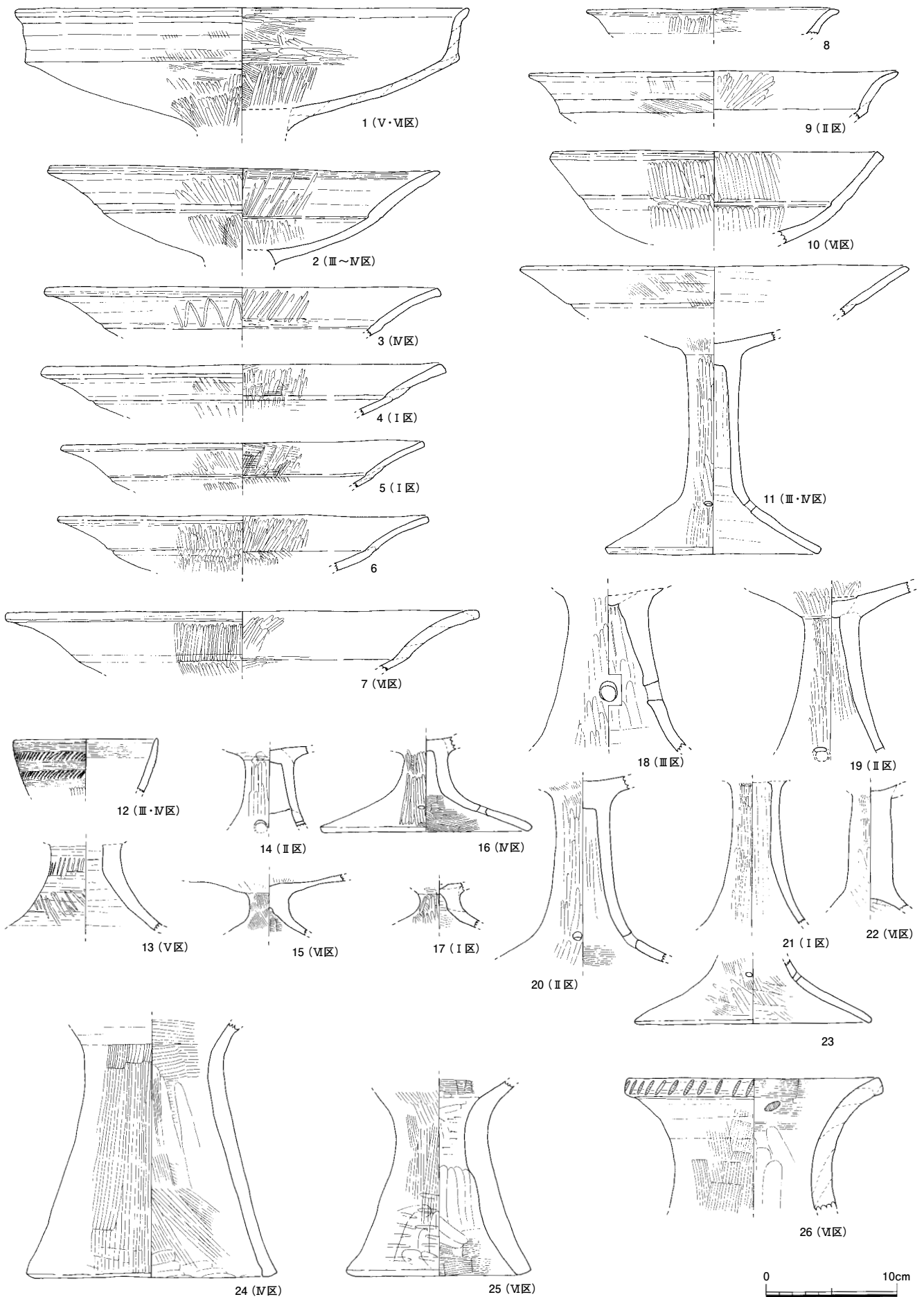


Fig.32 暗褐色シルト（包含層）出土土器実測図5（1/4）

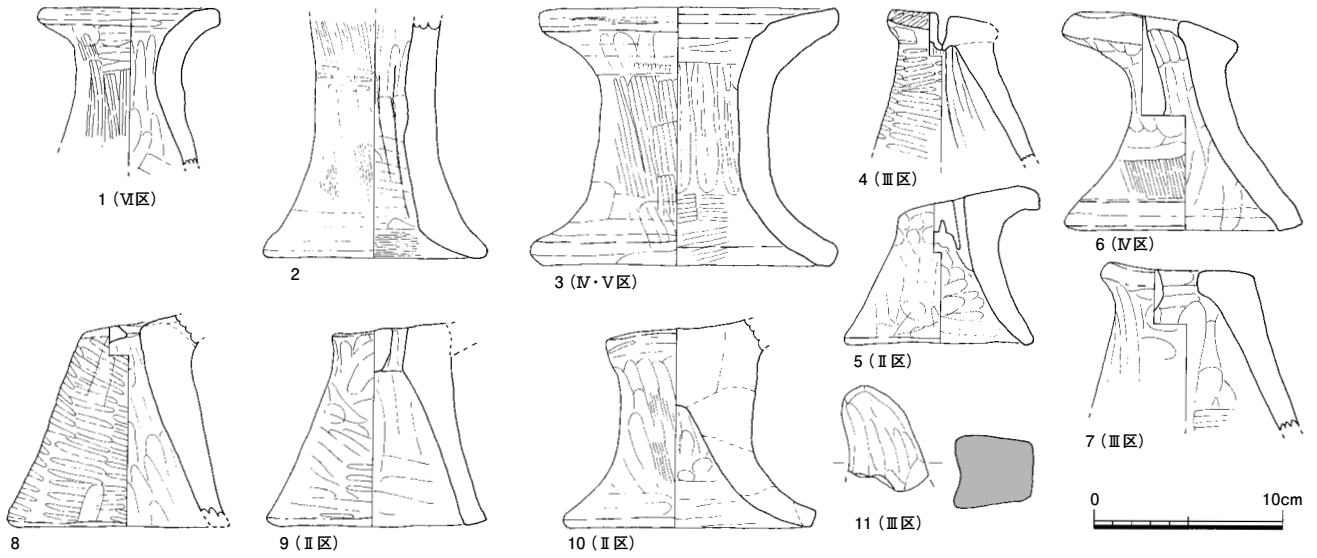


Fig.33 暗褐色シルト（包含層）出土土器実測図 6（1/4）

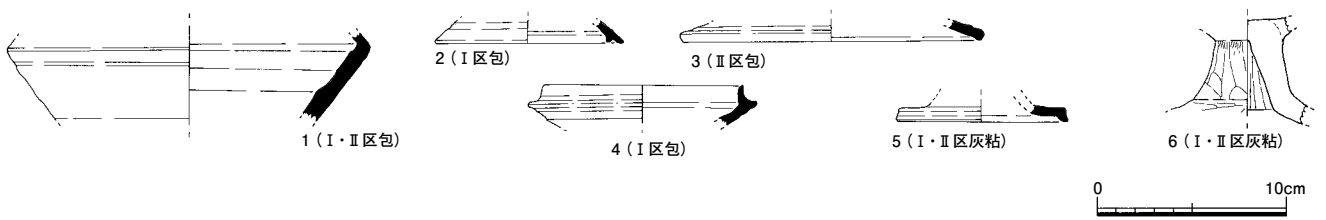


Fig.34 古墳時代末から古代の土器実測図（1/4）

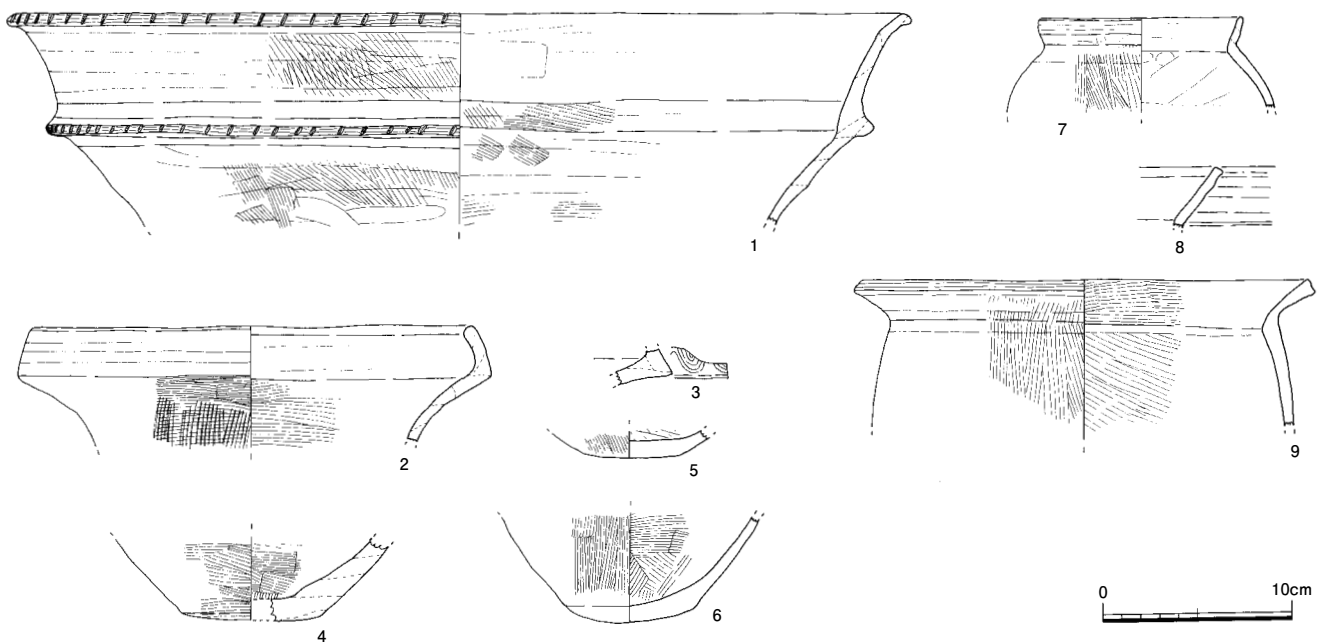


Fig.35 調査区東部暗灰色シルト層出土土器実測図（1/4）

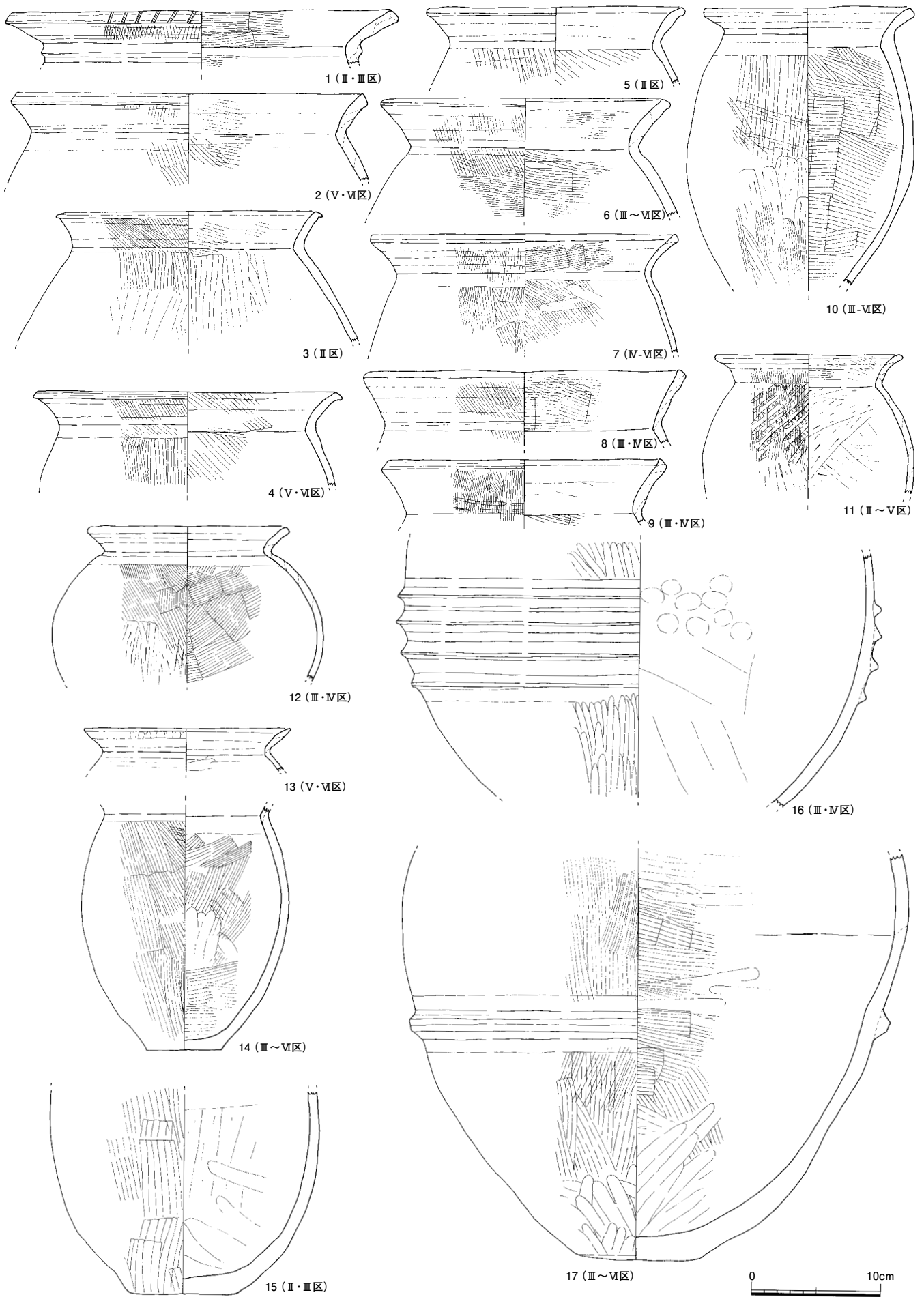


Fig.36 灰色砂層下出土土器実測図1 (1/4)

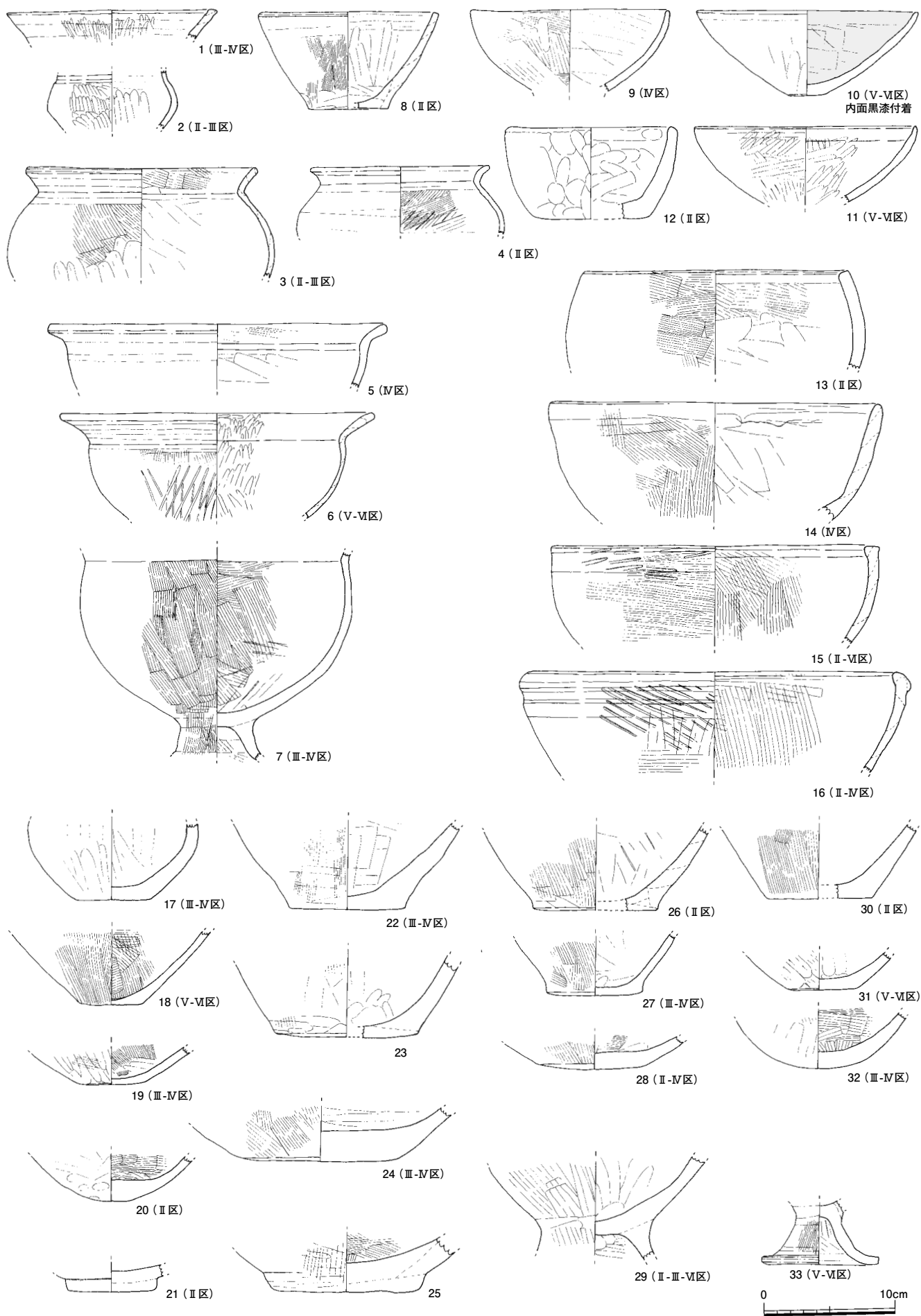


Fig.37 灰色砂層下出土土器実測図 2 (1/4)

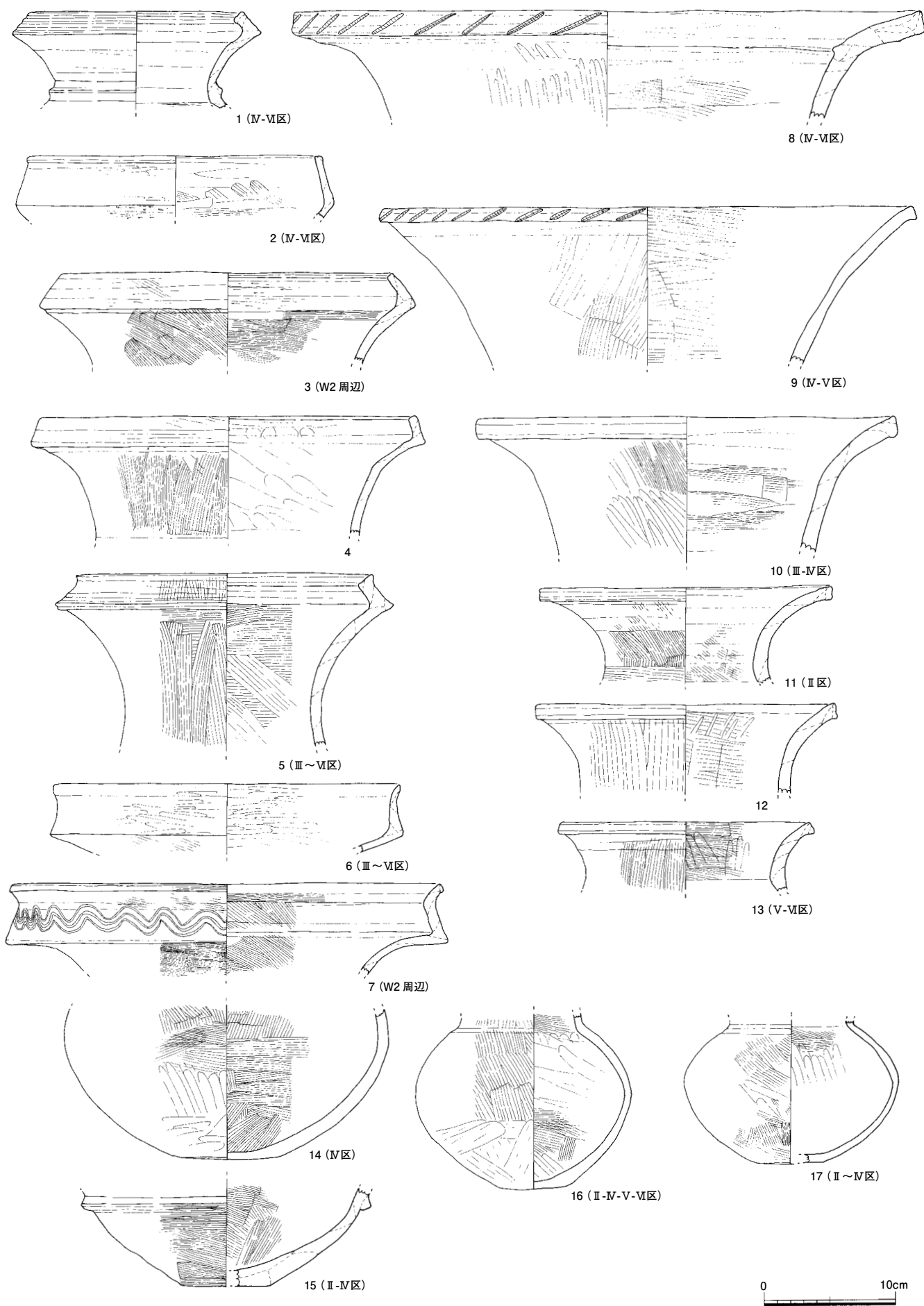


Fig.38 灰色砂層下出土土器実測図 3 (1/4)

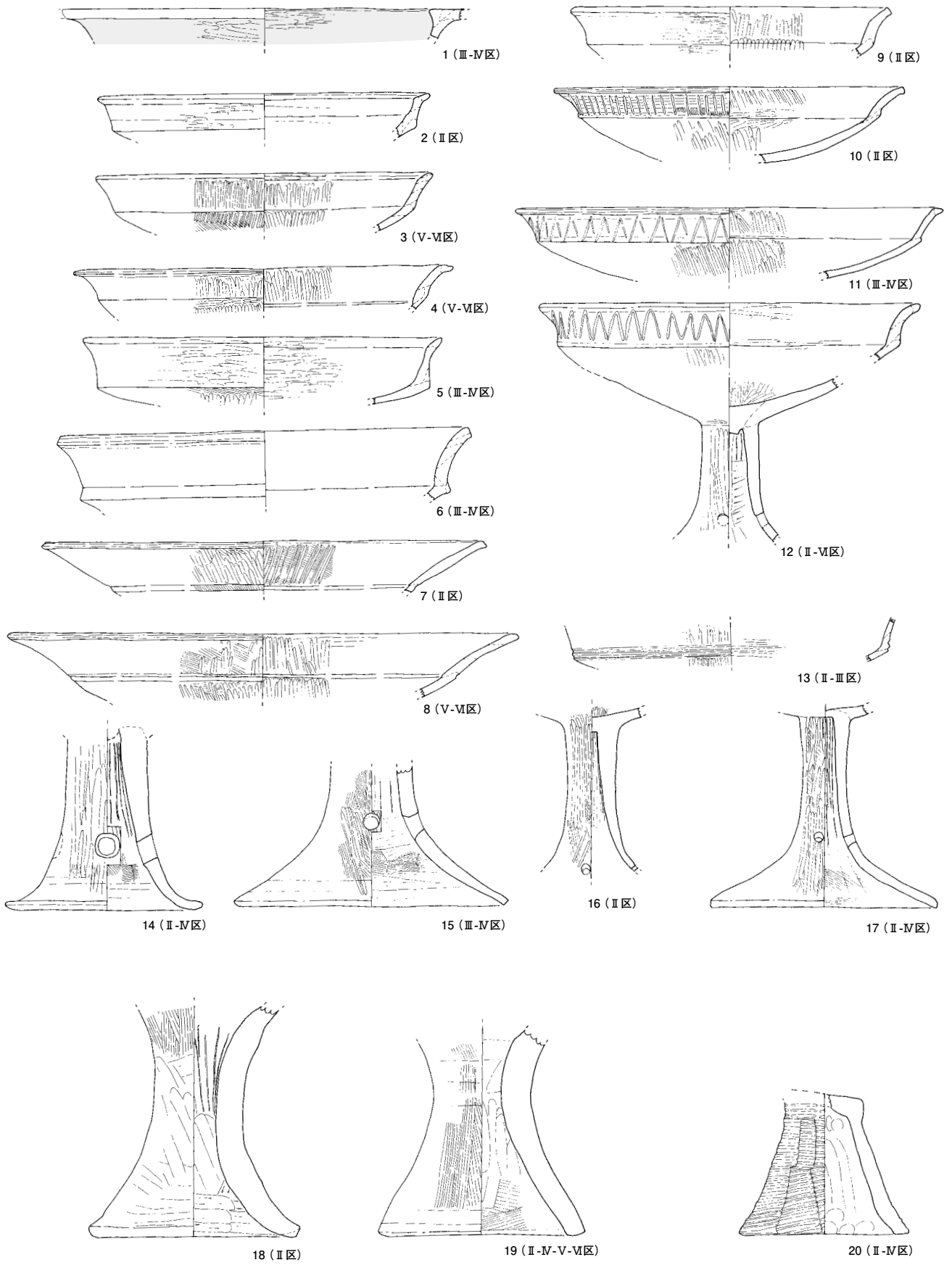
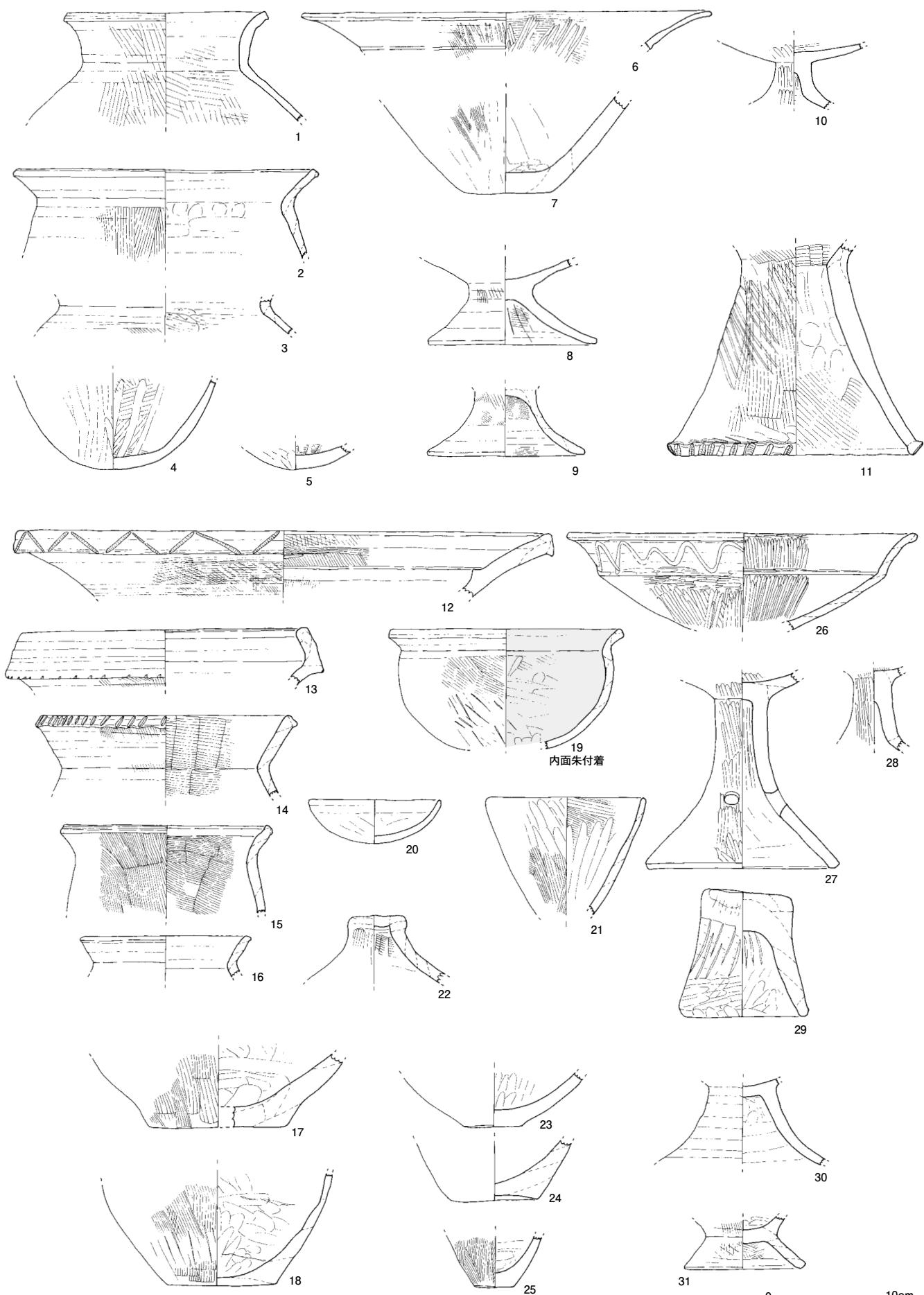


Fig.39 灰色砂層下出土土器実測図 4 (1/4)



1 ~ 11 : SX01 覆土 12 ~ 31 : SX01 下砂層

Fig.40 SX01 周边出土土器実測図 (1/4)

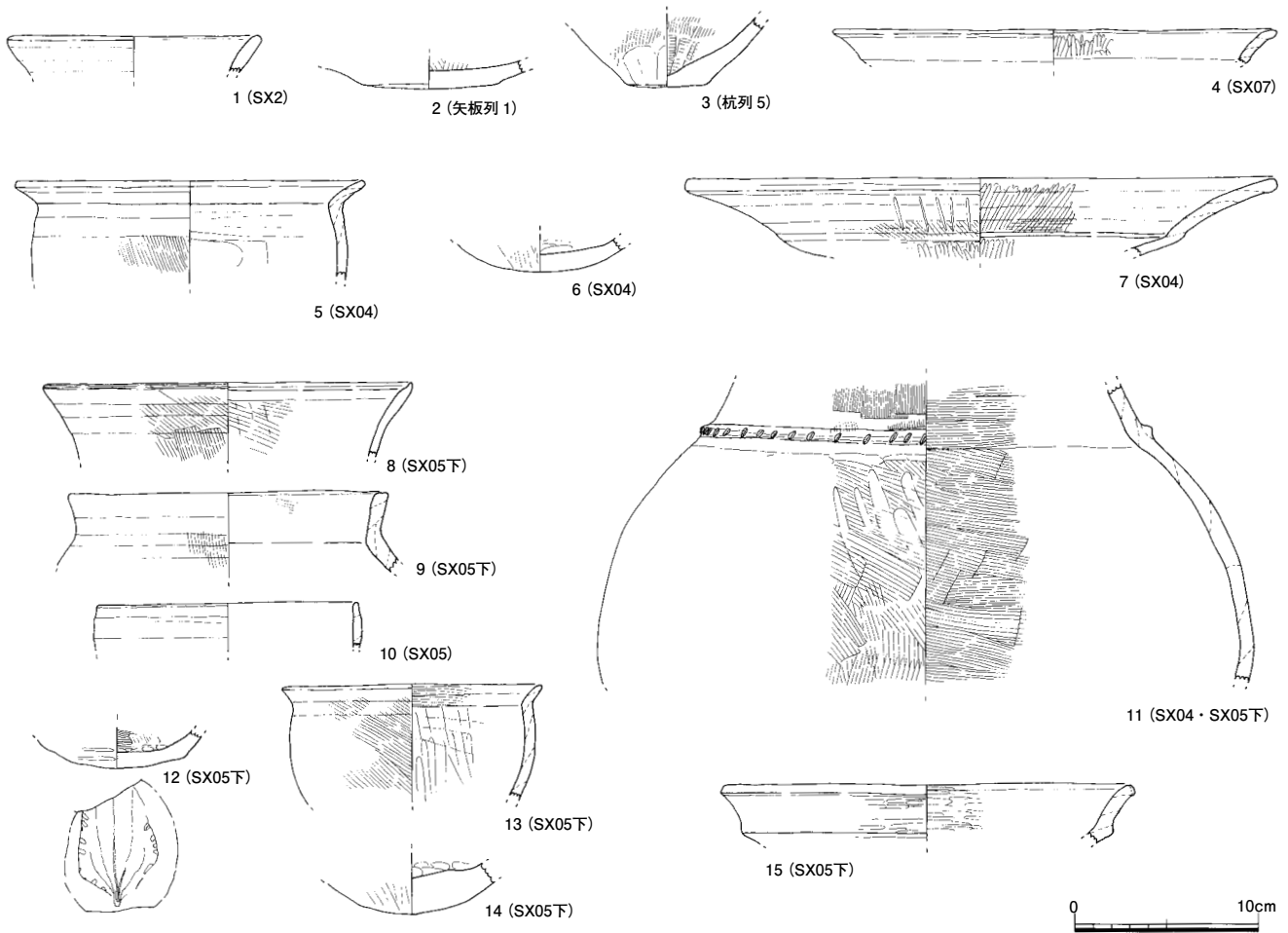


Fig.41 SX02・04・05・07 周辺出土土器実測図 (1/4)

有する。17は大型甕の胴部から底部である。Fig.37は、1がⅣ期の布留系小型壺口縁部で、2がミニチュア壺胴部、8～16が鉢で、17～33が壺、甕、鉢等の底部である。Ⅳ期の型式も含むが、上層に比べてⅡ期の型式が多い。10は内面に黒漆が付着したⅡ期の鉢で、漆入り容器とみられる。21や25はⅤ様式系の壺底部である。Fig.38は同層出土の壺である。複合口縁壺は1・3・4・5のようなⅡ期の型式が多くなっている。1の複合口縁壺は擬凹線文3条が施され、Ⅱ期の山陰や西部瀬戸内の影響とも考えられる。内外面は黒化処理が施されている。7は口縁端部の外反や外面の櫛描波状文などから豊前系と考えられる。8～13は各種の広口壺である。8は鋤先口縁広口壺からの系譜である糸島特有の大型広口壺で、Ⅱ期の型式である。11は広口壺の中でも、口縁の開きが強く、端面も丁寧に調整がなされ、擬凹線文状を呈する。特徴に乏しいが、これも近畿周辺系譜の壺であろう。14～17はやや法量の小さい壺胴部で、長頸の直口壺であろう。Fig.39は高杯や器台、支脚である。高杯もⅡ期の型式が増加し、7のようなⅣ期の型式は減少している。1はⅠ期以前の鋤先口縁の型式で、内外面丹塗りである。2は杯上部の立ち上がりが低いⅡ期の中でも古い型式で、口縁部は突出内傾面である。13は杯部の屈曲位に2条の沈線が施される有稜高杯で、有明海沿海域系譜の高杯と考えられる。器台も18、19などⅡ期以前の型式が多い。20はⅢ期の杳形支脚である。

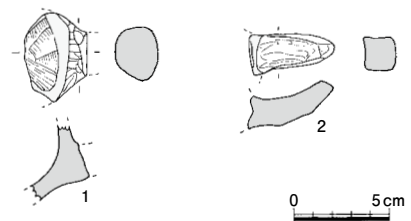


Fig.42 土製品実測図 (1/4)

Fig.40はSX01周辺から出土した土器である。覆土出土土器（1～11）はⅣ期の土器が目立つが、遺構の下層（12～31）はⅡ・Ⅲ期の土器が主体である。3はⅣ期の布留系甕、5は内面に簾状ハケ目に近いナデが施されたⅣ期のⅤ様式系影響土器である。12は38-8系統の大型広口壺で、Ⅲ期以降の型式である。口縁端面に列点文の連続による鋸歯文が施されている。19は内面に水銀朱が付着したⅡ期の鉢であり、外面には煮沸使用による煤が付着する。朱の一部は外面や内面にも付着しており、朱の精製・収納容器としての使用時に破損したものと考えられる。26の高杯はⅢ期の型式で、外面に波状の暗文を有する。SX01はⅢ期からⅣ期のなかで設けられた遺構と考えられる。

Fig.41は井堰等の灌漑関連遺構周辺から出土した遺物であるが、遺構の性格から、共伴関係が明確ではない。第3面の遺構と考えている井堰SX04周辺からは、6・7のようなⅣ期の甕や高杯が出土しているが、5のようなⅠ期以前の甕も出土している。同時期の遺構と理解している矢板列1、杭列5、SX07周辺からは2、3、4のようなⅡ期の甕や高杯が出土しているので、SX04等の成立時期もⅡ期頃に考えておきたい。2面のSX05は、下層からⅡ～Ⅲ期の土器が出土しており、成立時期はⅢ期頃と考えられる。そのような土器の中には12のような底面に葉の圧痕がある壺もある。土器製作時に、器体の回転を容易にするために敷かれていたものであろう。

Fig.42はⅣ区包含層出土の土製品である。いずれも小型の杓子である。1は身の一部、2は把手部分である。

②木製品 (Fig.43～49)

木器は2面包含層やSX4、5などの構築材の一部として出土しており、Ⅱ～Ⅲ期のものと考えられる。出土量は100点を越え、丸杭が最も多いが、それ以外では建築部材（壁材、柱材、鼠返し、梯子など）と日常的道具（耕起具、土木具、工具把、運搬具、漁撈具、容器）が主体である。ただし、耕起具のなかでも鋤を欠く組成となっている。同時期の拠点集落であり、近在する今宿五郎江遺跡からも多量の木製品が出土しているが、同遺跡の木製品組成と比べて特殊な製品（武器・武具類、精製容器、祭祀具など）の出土は少ない。本調査地点でこれに該当するのは、線刻画を有する杓子（把）と仕切りを有する舟形槽などである。樹種については、主要なものについて樹種同定分析を実施しており、それは第Ⅴ章の報告の通りであるが、広葉樹を主体として、器種ごとに木の特性を活かした適正な選択がなされている。用途不明品もあるが、例外的な樹種はみられず、当該期の北部九州における木製品の樹種選択としては通有のものであり、木材は近隣の山林から調達したのと考えられる。ただし、未成品等の製作過程を示すものはほとんどみられない。今宿五郎江遺跡の木製品は組成が豊富であり、未成品や素材の出土も少なくないことから、木製品の生産遺跡と考えられる。谷遺跡の木製品は今宿五郎江遺跡からの供給品が多い可能性は高いであろう。

Fig.43は鋤である。1は広鋤、2は狭鋤、3、4は又鋤である。5も又鋤であるが、他に比べて、股下が短く、肩部も角ばっている。

Fig.44-1は大型の塵取りのような形態である。全長65cm（把22cm身43cm）、身の幅は37cmで深さは2cm未満である。先端近くの左右には円形の穴が開けられている。把の形態は鋤と共通しており、握り部は三角形をなす。現在の発掘道具で言うところのテミにスコップの把を付けたような形態であり、土砂の移動などに用いられる土木具と考えておきたい。本調査地点では鋤が出土していないことから、その機能の一端を担う道具と考えられよう。

類似する福岡県春日市辻田遺跡Ⅱ区出土品は身がやや深く、把手付の槽と報告されているが、本例と同じクスノキで、把も類似しており、土木具であろう。

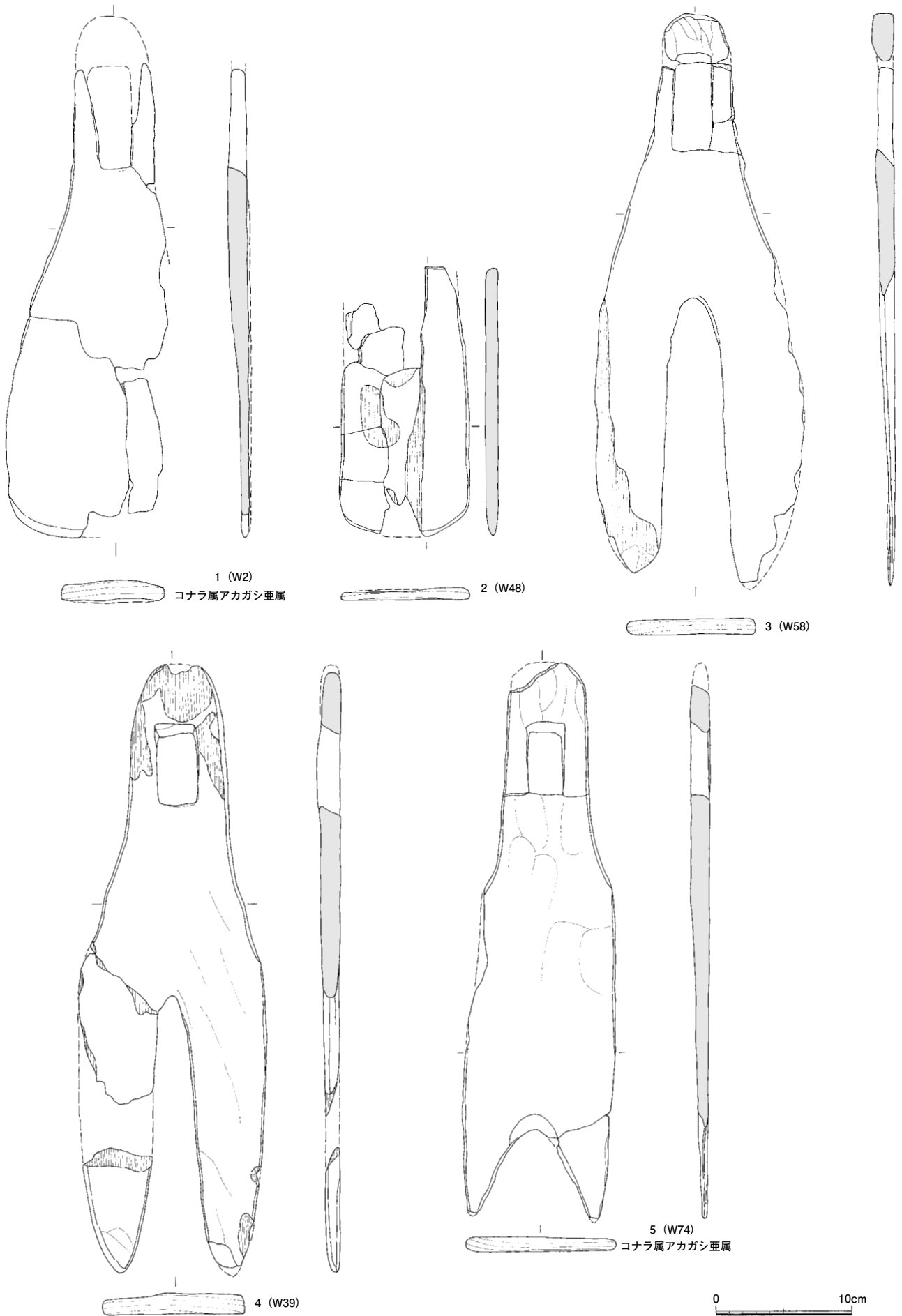
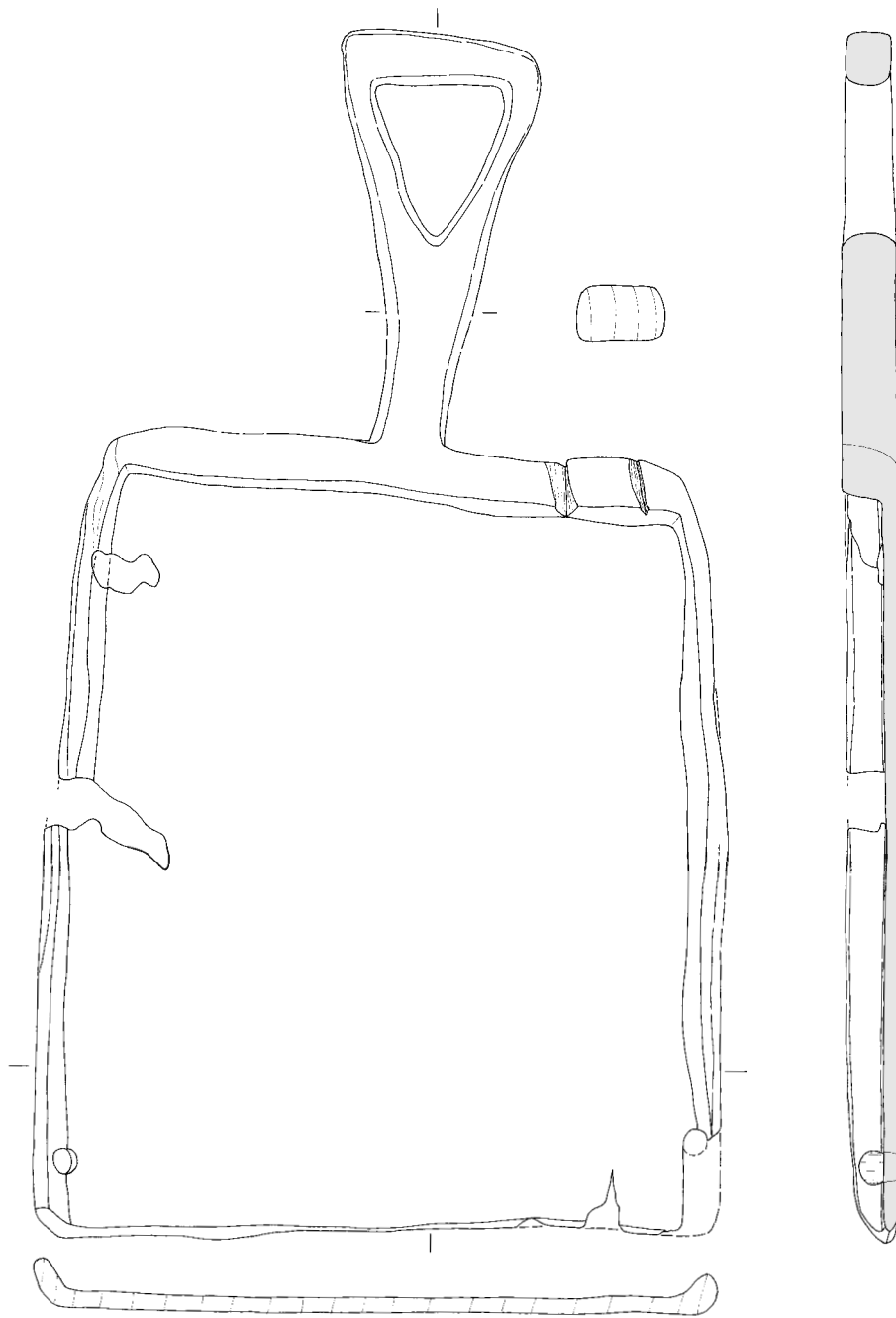
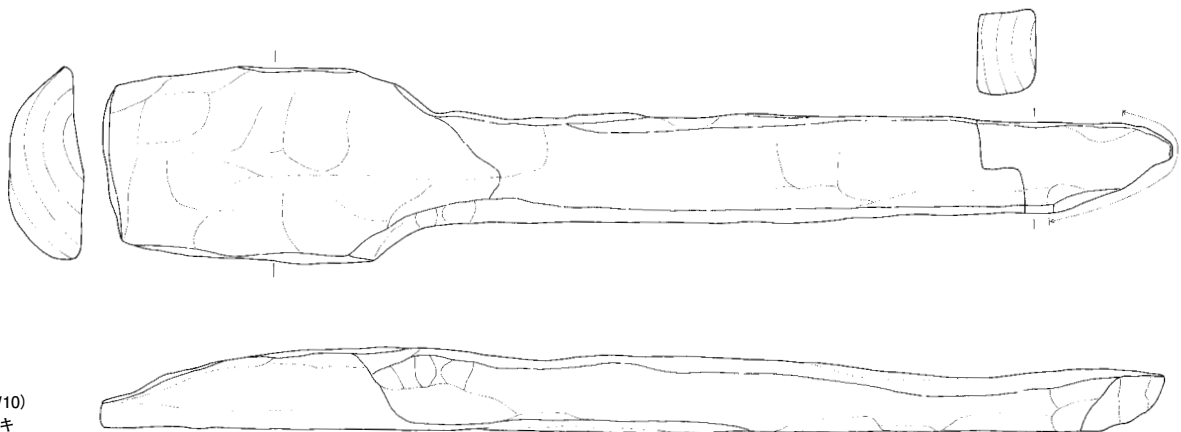


Fig.43 木製品実測図1 (1/4)



1 (W9)
クスノキ

0 10cm



2 (W10)
サカキ

Fig.44 木製品実測図 2 (1/4)

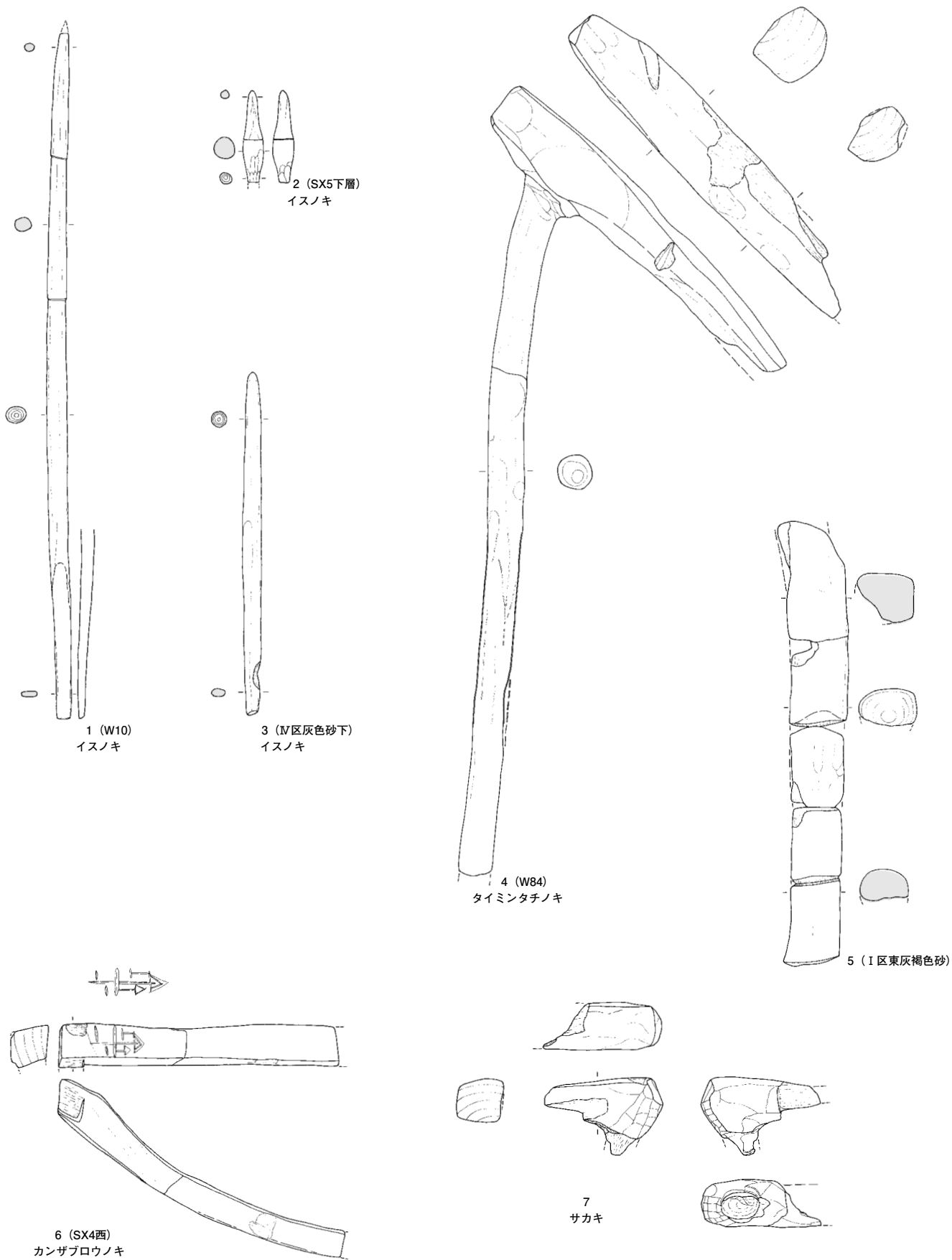


Fig.45 木製品実測図3 (1/4)

0 10cm

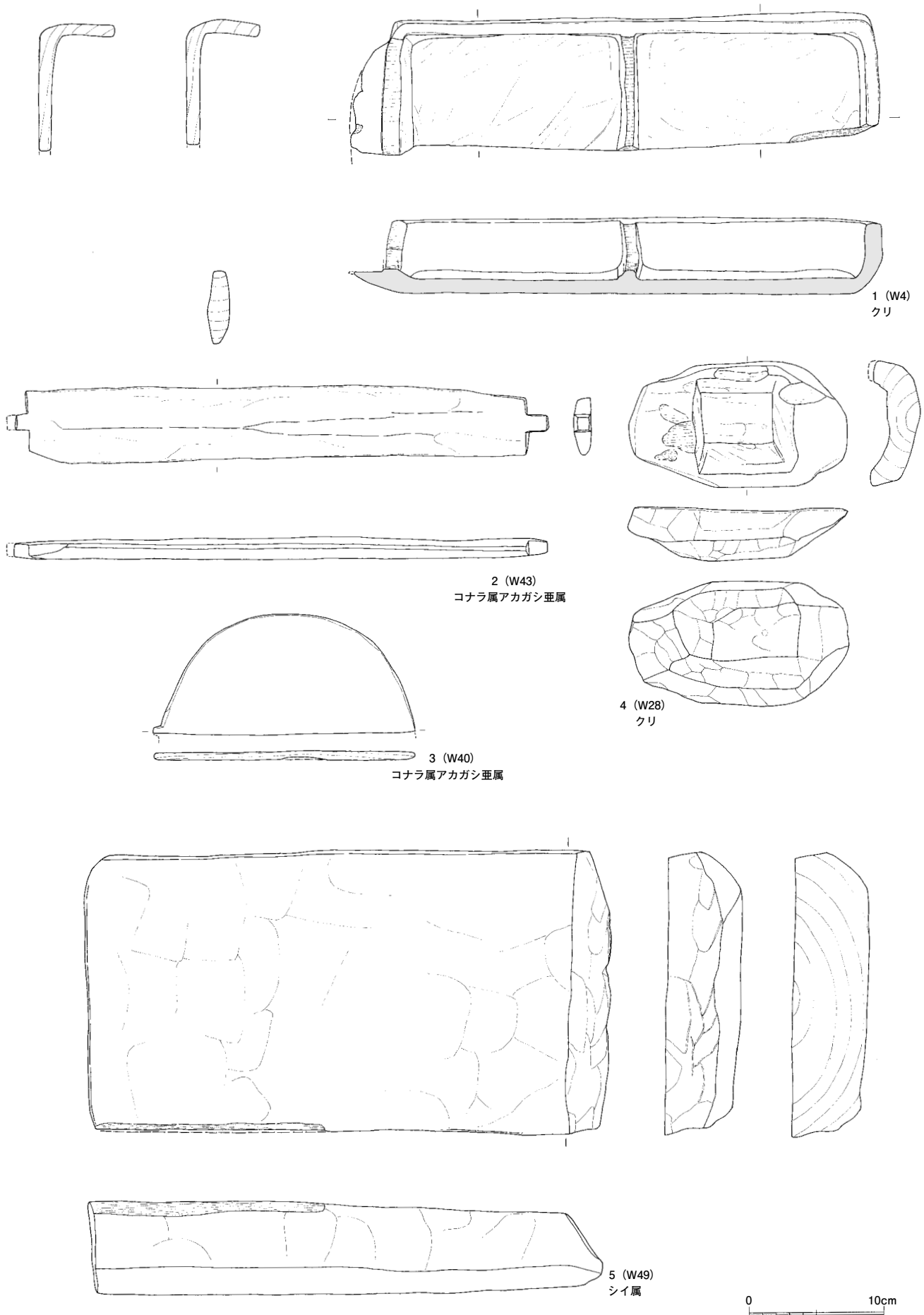


Fig.46 木製品実測図4 (1/4)

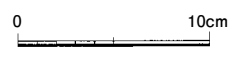
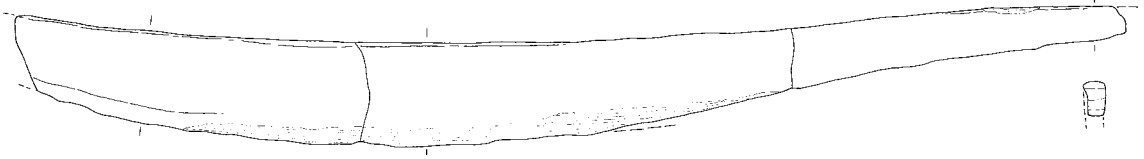
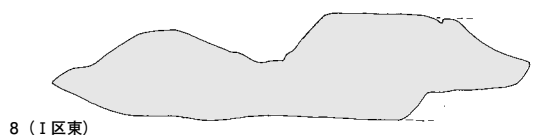
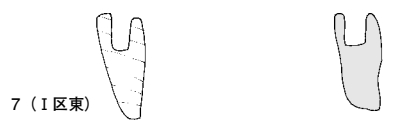
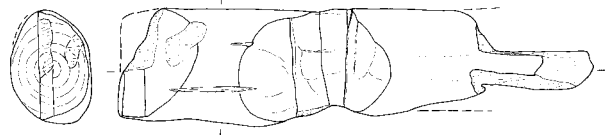
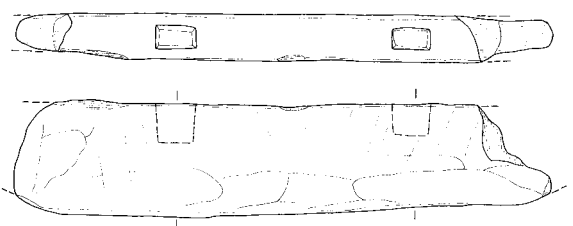
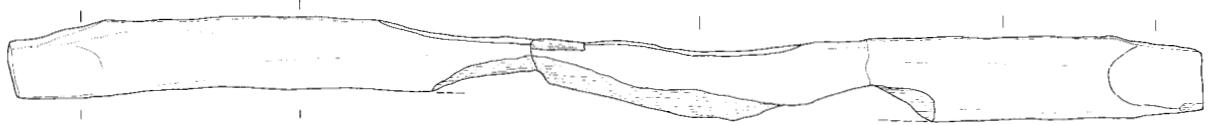
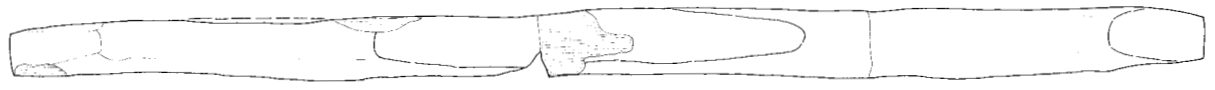
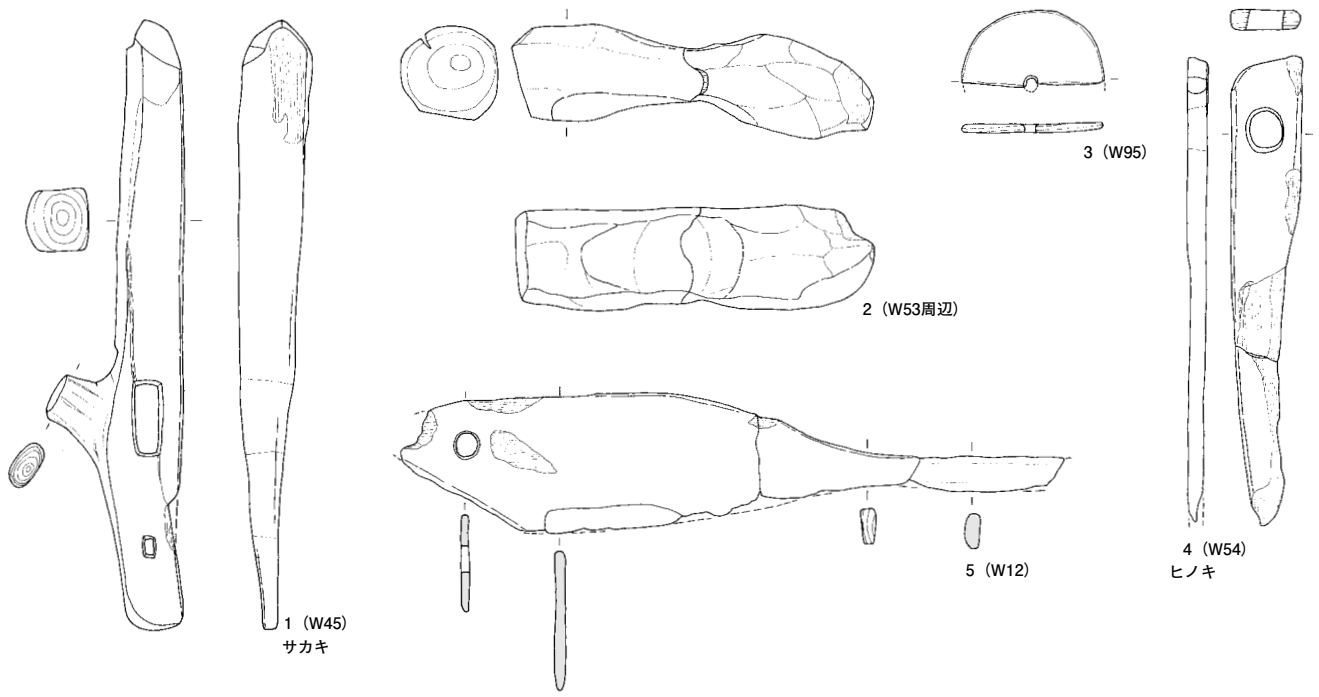


Fig.47 木製品実測図 5 (1/4)

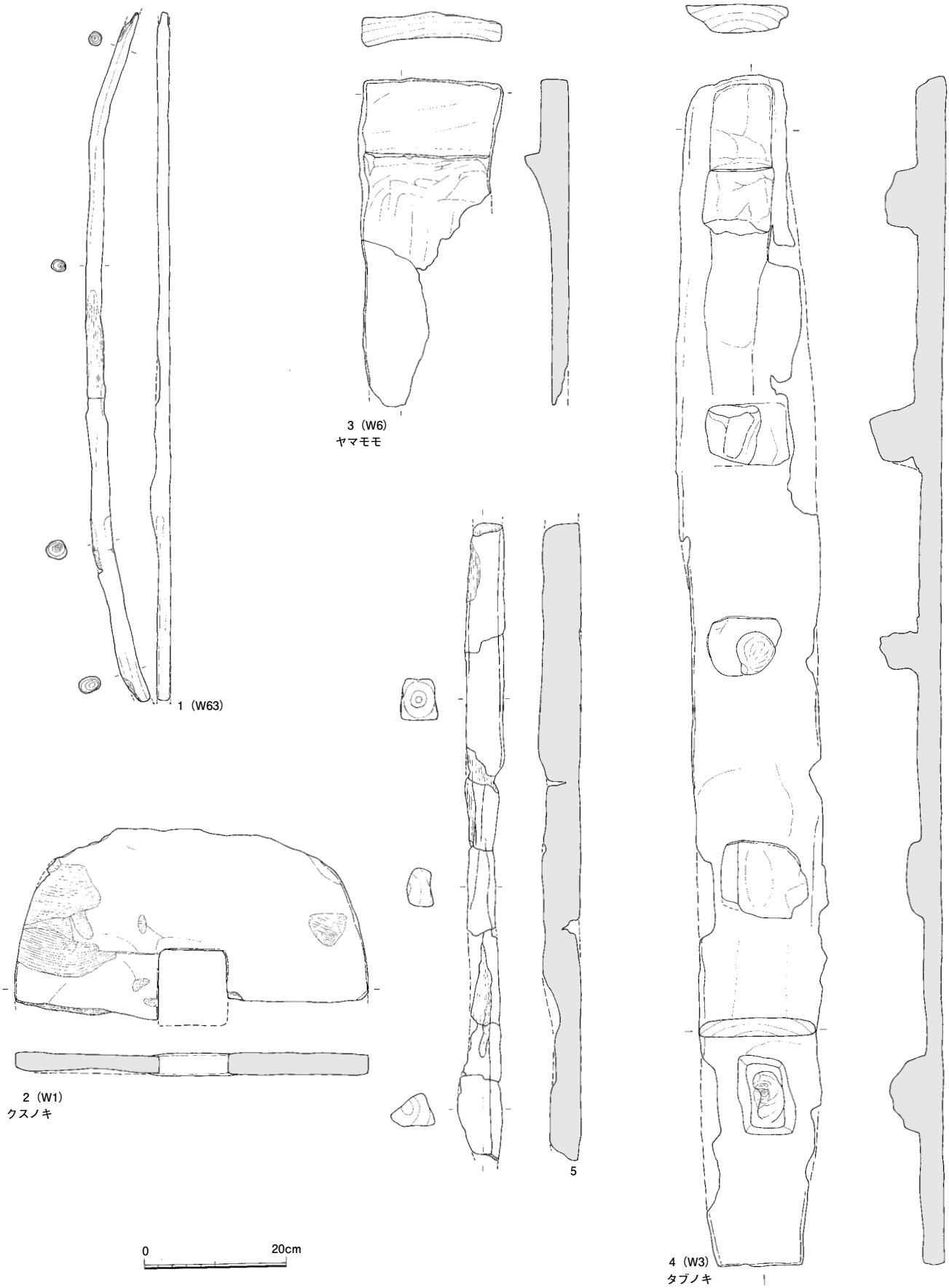
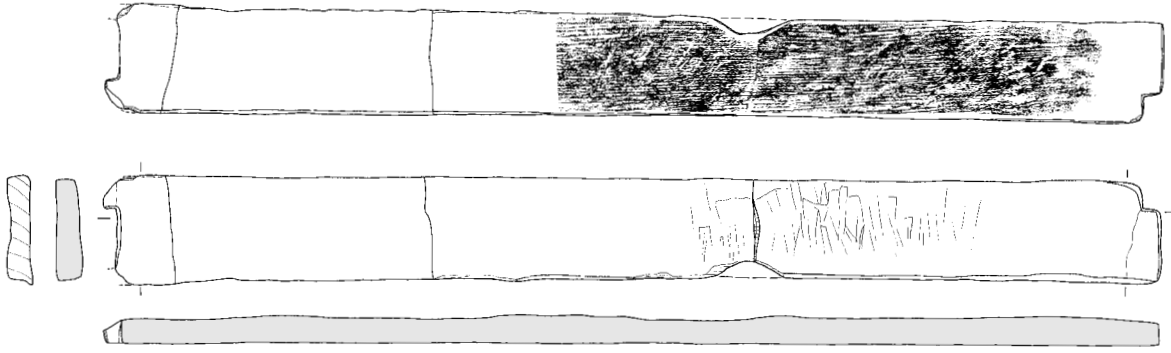
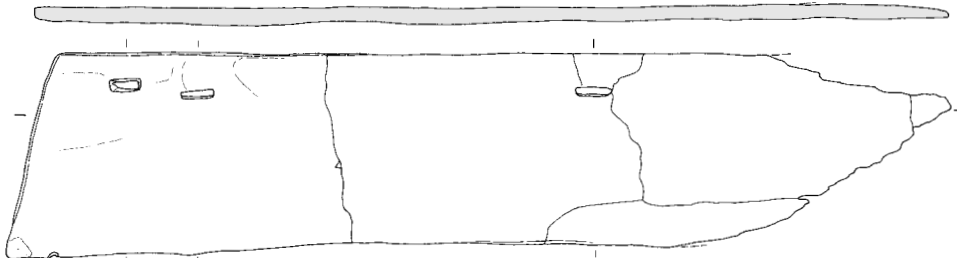


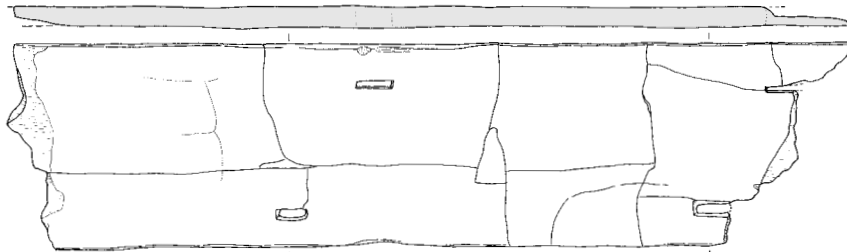
Fig.48 建築部材実測図 1 (1/8)



1 (W81)
シイ属



2 (W79)
タブノキ



3 (W93)
タブノキ



4 (W19)



Fig.49 建築部材実測図 2 (1/8)

2は櫂であるが、基部側は杭の先端として再加工が施されている。

Fig.45は漁撈具や工具把等である。1は刺突具であるが、基部に斜めの面取り加工がなされ複数本を組み合わせて使用するヤスと考えられる。先端近くは段が2箇所あり、カエシとしたものであろう。2は有茎の鏃で、先端付近は円錐形である。3は1、2と共通する硬質のイスノキを素材とする刺突具である。4は横斧の把である。装着部に丸みがあり、この把に合う斧は鉄製の鍛造袋状鉄斧と考えられる。先端から約10cmの箇所に斧袋部の当たりとみられる窪みがある。5は斧か鎌の把の基部であろう。長さ33cm以上を測る。6は横杓子の把とみられるものである。把手の断面は長方形に近く、基部には把に直行する方向の突起もあるが、消失しており、その形状は不明である。上面の基部近くには線刻画があるが、大小の矢印（傘印）に横線を組み合わせたものであり、その意味するところはよく分からない。7は横斧の把である。4より小型の鍛造袋状鉄斧と組み合わさるものである。

Fig.46は容器や蓋である。1は舟形の槽である。削り抜き作りである。片側の長側壁は消失している。中央の隔壁により、二槽に分かれており、片方の小口のみ鏝状に突出している。2は細長い容器の蓋である。あまり精巧には加工されてない。両小口に紐掛け突起がある。3は円形の蓋である。半分消失しているが、直径約19cmで片側に小さい突起を有する。甕形土器の煮沸用の蓋であろう。4は小型の槽である。加工が粗いが1と同じくクリ材である。外形を舟形に加工し、中央部は方形に削り込んでいる。5は台形の製材であるが、槽の未成品である可能性が考えられる。ただし、樹種は1・4と異なりシイ属であった。

Fig.47はその他の木製道具類や建築材である。1は爪付背負子の縦木である。長方形の透かし孔は横木を通すためのものである。枝の部分を使って荷物などを固定するが、この部分は根元近くで折れて欠失している。2は編み錘である。平面は鉄アレイ形を呈する面と中央部が少し括れるだけで長方形に近い面とがある。3は半分欠損しているが紡錘車である。4は用途不明品であるが、今宿五郎江12次W158のようなプロペラ形で両端部近くに円形孔を有する木製品の半分が折損したものとみられる。樹種は今回同定してもらった資料の中で唯一の針葉樹（ヒノキ）であった。5も用途不明の木製品である。現状の平面形は魚形で、片側に円形透かし穴が施される。6～9は建築部材またはその再加工品とみられるが、よく分からない。6は両端部を面取り加工した丸木材で、8は垂木の軒先側か。9は片側側面が弧を描く長い板材である。7は板材の側面に長方形のホゾ孔が開けられている。ホゾ孔は1.2cm×2.2cm、深さ2cmほどで二孔の間隔は10cm。組み合う材は小さく、大きな負荷には耐えられない。

Fig.48は弓、梯子、鼠返し等である。1は長さ100cm以上の丸木弓で、両端部近くが湾曲する。2は鼠返しである。直径52cmでホゾ穴は一辺10cmの方形である。3、4は梯子である。3の梯子は踏み込み部を削り込んで加工しているが、4に比べて踏み込み部が幅広く浅い。4は長さ176cmを測る。踏み込み部は枝の部分を利用して加工しているため、奥行きがあるが、幅は狭い。5は角材であり、柱材などの建築部材と考えられるが詳細は不明である。

Fig.49は建築部材である。1は板材で両小口に欠き込みを有する。上面と下面の一部に刃物傷が集中する箇所があり、机（案）の天板を転用したものである可能性がある（欠き込みはいずれも再加工によるものとみられるが、図左の欠き込みが天板と足の結合穴であった箇所か）。ただし、机に多いスギ材ではなく、長さも110cmを越える。2は妻壁板とみられる建築部材である。平面は台形を呈し、短辺側に長方形孔が3箇所以上並ぶ。3も同様の長方形孔を有する壁板である。両側の長側縁に沿って方形孔が並んでいる。また、向かい合う長方形孔同士は板の方向に対して斜行する配置となっている。

る。4は3cm強の厚みがあり、床材であろう。遺存が悪いが、方形孔がみられる。

③石器・石製品 (Fig.50)

1は表土より出土した縄文時代の蛇紋岩製磨製石斧である。長さ10.6cm、幅5.0cm、厚み2.3cmを測る。刃部が片減りしているのは、伐採斧として縦斧使用されていたからであるが、現状は扁平であり、最終的には再加工によって横斧として使用されていたものと考えられる。2はV区包含層より出土したシルト岩製の石包丁未成品(失敗品)である。背面は背つぶしが施されている。孔は1箇所のみで、貫通していない。長さ8.6cm、幅3.5cm、厚み0.9cmを測る。3はIV区灰色砂下より出土した(S1)滑石製の環状石錘である。石材は海岸の転石を利用したものとみられる。長径17.3cm、短径15.6cm、厚み3.5cm前後、1402gを測る。直径約4cmの両側穿孔である。4はV・VI区の灰色砂層より出土した砂岩製砥石である。方形板状を呈する。5はSX01下より出土した(S2)砂岩製砥石である。長さ30.2cmの方形柱状を呈する。6は矢板列2付近の流水粗砂層より出土した砂岩製砥石である。方形板状を呈する。7はII区包含層出土の砂岩製砥石である。三角形板状を呈する。使用面は鉄分の付着が多い。

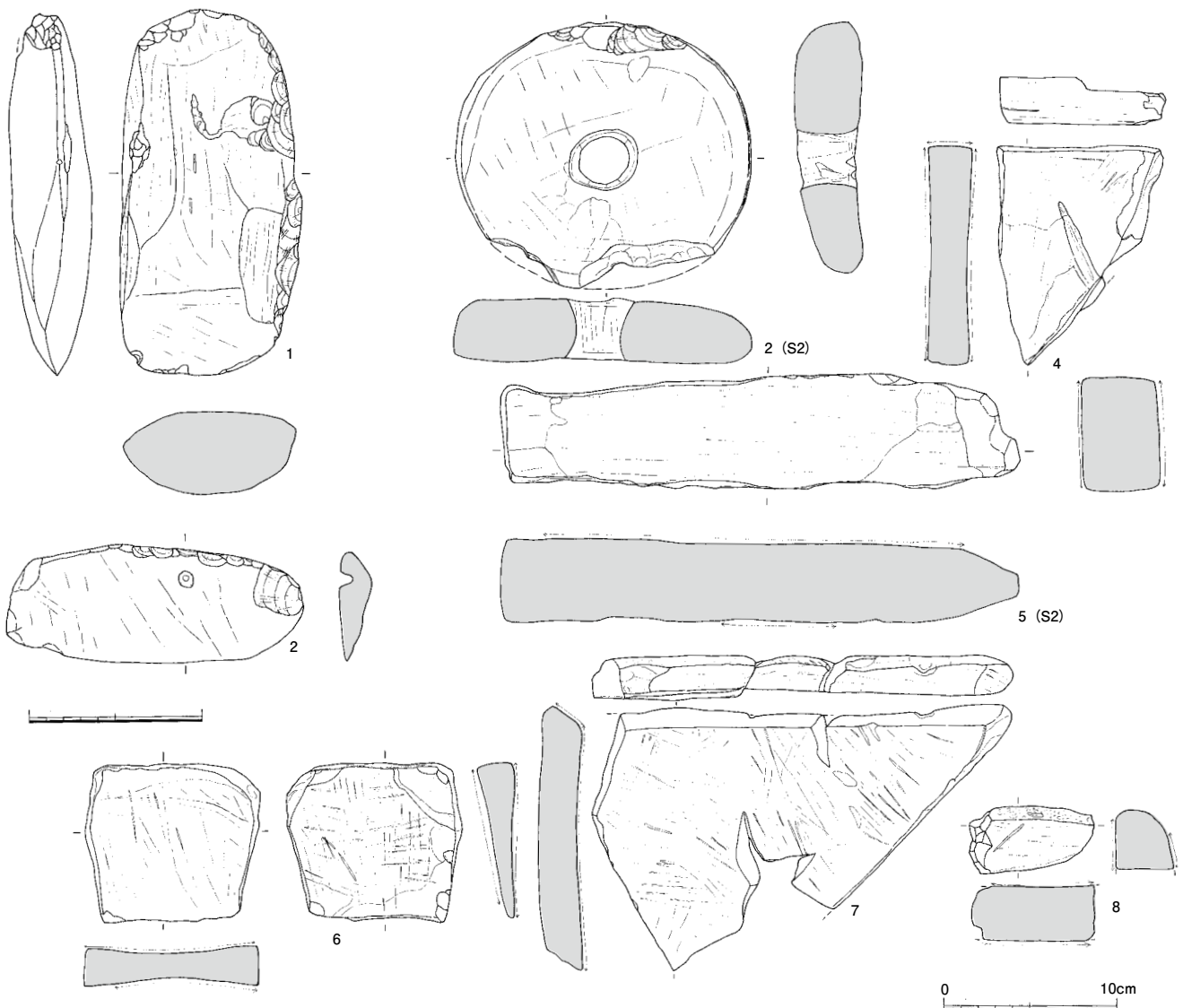


Fig.50 石製品実測図 (1/4)

8はシルト岩製の砥石である。

3. まとめ

谷遺跡はこれまでの調査から、今宿五郎江遺跡など周辺集落の生産関連遺跡としての性格が強い。第2次調査は未報告のため詳細を知り得ないが、杭列などに伴って板付I式期段階の突帯文土器などが出土しており、付近に弥生時代前期初頭の水田域がひろがると考えられる。

今回の第3次調査では、狭小な調査面積であったが、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の生産関連遺構の変遷を明らかにすることができた。

谷遺跡では弥生時代後期前半以前の遺物も出土しているが、後半以降に急増する。弥生時代後期後半から終末期は大塚遺跡など今宿五郎江遺跡周辺の分村が増加する段階と考えられるが、本調査地点の生産関連遺構も当該期が初現となっている。

弥生時代後期後半の生産関連遺構（第3面）は自然流路を主要水路として井堰、付設水路、畔などが設けられ、付設水路は水口、水尻で水量が微調整できる構造となっている。また、自然流路や付設水路の要所には護岸のための杭列や矢板列などが設けられている。水田そのものを検出できなかったが、調査区の西側の微高地上に広がっていたものと考えられる。

谷の埋没が進むなかで、水田域は谷側にも拡大していったものとみられる。弥生時代後期後半の幹線水路であった自然流路は埋没し、上面に大畦畔が設けられる（第2面のSX05）。その時期は弥生時代終末期以降と考えられる。付設水路周辺も土器や木製品を多量に包含する砂層で埋没していくが、流路としては存続していたようである。古墳時代初頭には再び井堰が設けられている（第1面のSX01）。そして、古墳時代前期前半以降はしばらく付近の土地から人が離れていたようで、再び開発の手が入るようになるのは7世紀以降である。

出土土器や木製品は近在した谷集落の内容を反映したものであろう。土器は弥生時代後期後半から古墳時代前期前半が多いが、谷遺跡の集落形成は、弥生時代中期後半から今宿平野の中心的集落となっている今宿五郎江遺跡に後出し、その分村として成立するものと考えられる。異系統土器には東海系、近畿系（V様式系、布留系）、豊前系、肥前系などがあるが、隣接する今宿五郎江遺跡に比べて、外来系土器の出土は少ないといえる。

出土木製品は建築部材と日常的道具（土木具、工具把、運搬具、漁撈具など）が主体である。仕切りを有する舟形槽や線刻画のある杓子の把も出土しているが、今宿五郎江遺跡のような特殊木製品の出土は少ない。一方、日常的道具の中でも鋤が全く出土しておらず、農耕具、土木具の一部は母村が集中生産や管理を行っていた可能性も考えられよう。

出土遺物から、交易や祭祀という面では、分村集落は母村集落から独立できていないと考えられ、また日常的道具の一部についても母村の管理下にあったと考えられるのではないだろうか。

隣接する今宿五郎江遺跡では、環濠周辺や遺跡の東部で杭列（主に畦畔等の土留め）や井堰などがみつかっており（10次、13次）、付近に生産関連遺構が広がっていて、環濠も一時期は用水路として機能していたことは間違いないが、その詳細については、十分に検討が進んでいない。糸島地域において弥生時代後期前後の生産関連遺跡・遺構はまだ、ほとんど調査例がなく、今回の調査やこれまで今宿五郎江遺跡でみつかった関連遺構は貴重かつ重要な調査成果といえる。

谷遺跡については、まだ、ごく一部について発掘調査が実施されたのみで、その実態については不明な点が多い。今宿五郎江遺跡と谷遺跡の集落間関係や水田稲作生産の有機的關係を解明するために、今後の発掘調査や研究の進展を期待したい。



1 第3面調査区全景（北から）



2 第3面南部近景（北から）



1 第2 - 3面 (北から)



2 第1面 (北から)



1 調査区北壁 (AB ライン) 西部



2 調査区北壁 (AB ライン) 東部



3 V区北壁 (CD ライン) 西部



4 V区北壁 (CD ライン) 東部



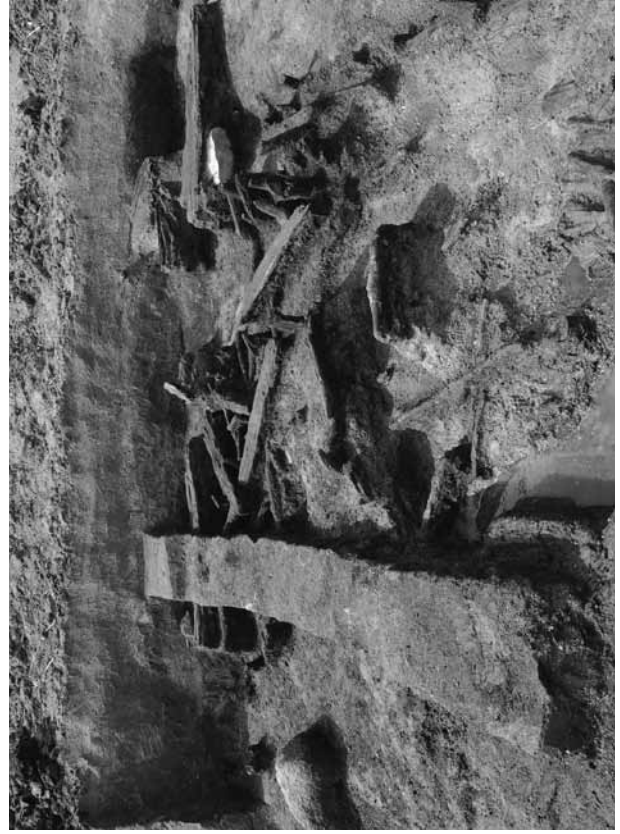
5 調査区南壁西部 (EF ライン)



6 調査区南壁東部 (F G ライン) (北から)



1 第1面包含層南部 (北から)



2 SX01 (北から)



3 SX05 (南から)



4 第2-3面 SX05 周辺 (東から)



1 SX04 周辺 (北から)



2 SX04 上部 (北から)



3 SX04 下部 (北から)



4 SD08 南部 (北から)



1 SX07 (西から)



2 杭列 4 (西から)



3 杭列 5 (東から)



4 矢板列 1 (北から)



5 矢板列 2 西 (西から)



6 矢板列 2 東 (東から)



7 矢板列 3 西 (西から)



8 矢板列 3 東 (東から)



43-1



43-2



43-3



43-4



43-5



44-2



44-1



45-1



45-3



45-2



45-4



45-5



45-6



45-7



44-1 出土状況

出土木製品 1



46-1



46-2



46-3



46-4



46-5



47-2



47-3



47-1



47-4



47-5

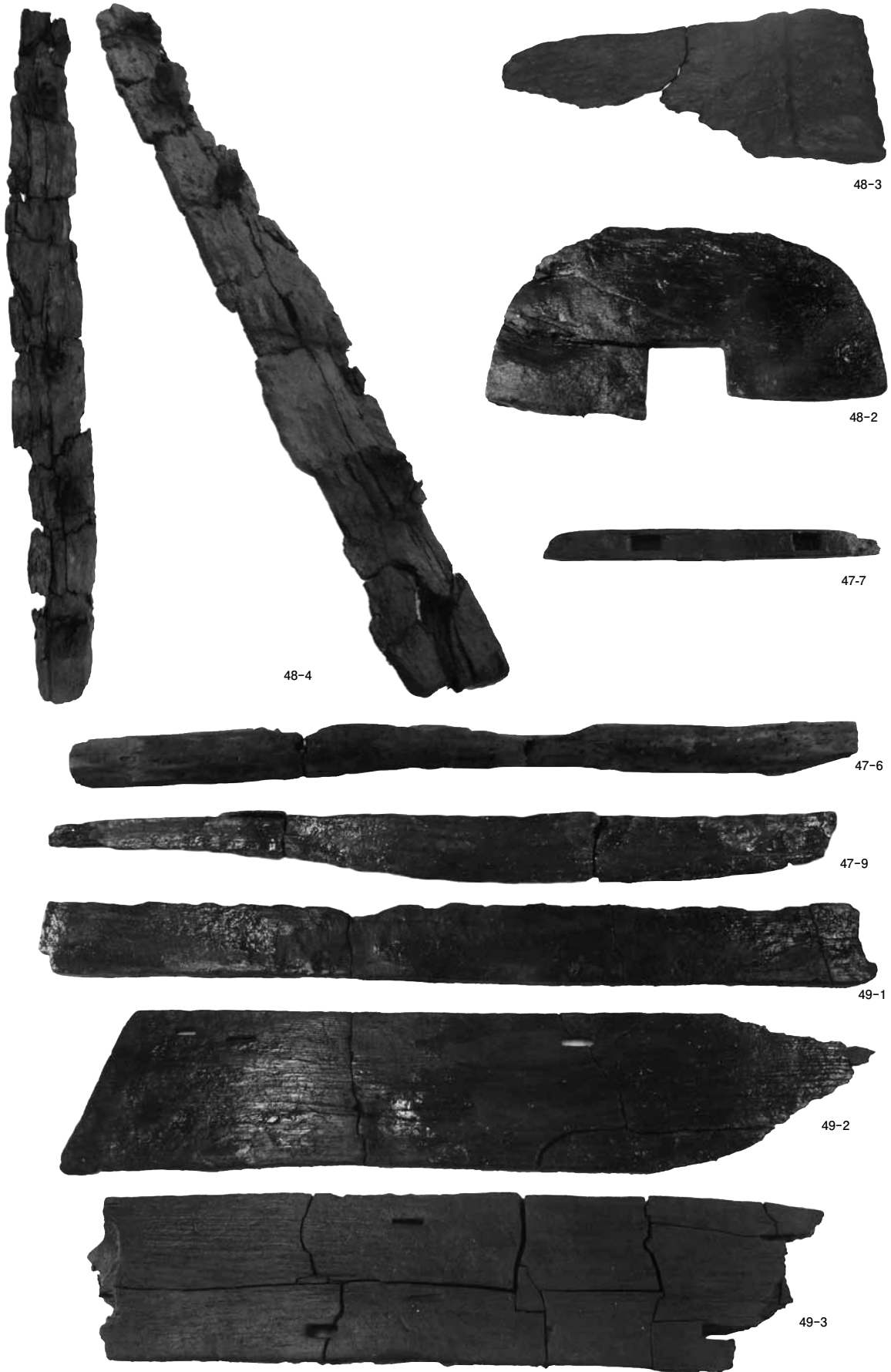


樹皮1



樹皮2

出土木製品2



出土建築部材



36-11



31-34



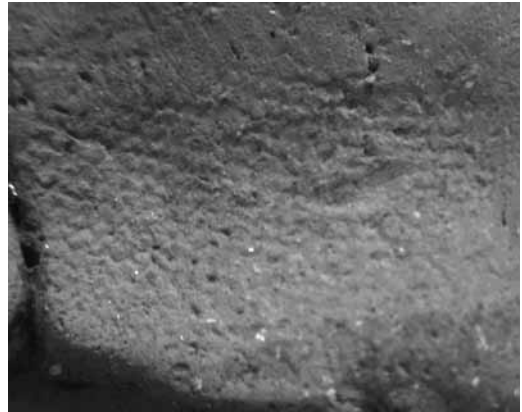
39-13



32-12



41-12底面 葉压痕



31-7 内面 布压痕



32-26内面 虫压痕

出土土器・压痕

V. 谷遺跡第3次調査の自然科学的分析

株式会社 古環境研究所

1. 出土木製品の樹種

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、谷遺跡第3次発掘調査で出土した弥生時代後期～古墳時代初頭の広鋏、又鋏背負子、斧の柄、杓子の柄、槽、櫂、ヤス、突刺具、蓋、木鏝、梯子、鼠返し、建築部材などの木材23点である。試料の詳細を分析結果表に示す。

3. 方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 写真1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で1～12細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ヤマモモ *Myrica rubra* Sieb. et Zucc. ヤマモモ科 写真2

横断面：小型で角張った道管が単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はあまり変化しない。軸方向柔細胞が散在及び短接線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で階段の数は2～10本ぐらいである。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。

以上の形質よりヤマモモに同定される。ヤマモモは本州（関東南部、福井県以西）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は器具、旋作などに用いられる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真3

横断面:年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面:道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科 写真4

横断面:年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面:道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属にはスダジイとツブラジイがあり、本州(福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑高木で高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 写真5・6

横断面:中型から大型の道管が1~数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面:道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面:放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科 写真7

横断面:中型から大型の道管が単独および2~数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。放射断面:道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面:放射組織は異性放射組織型で1~3細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クスノキ科 写真8

横断面:やや小型から中型の道管が単独および2~数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ

上がったものも存在する。放射断面:道管の穿孔は単穿孔または少数ではあるが、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面:放射組織は異性放射組織型で1~2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは、本州(暖地)、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科 写真9

横断面:小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。放射断面:道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10~18ぐらいである。放射組織は異性である。接線断面:放射組織は異性放射組織型で1~2細胞幅である。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 写真10

横断面:小型の道管が単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面:道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く40を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。接線断面:放射組織は異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8~10m、径20~30cmである。材は強靱、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* Lev. ヤブコウジ科 写真11

横断面:小型で角張った道管が単独あるいは2~3個放射方向および不規則方向に複合して散在し、全体に放射方向に配列する傾向を示す散孔材である。放射断面:道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。接線断面:放射組織は異性放射組織型で極めて高く、鞘細胞を有し3~6細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりタイミンタチバナに同定される。タイミンタチバナは、近畿以西の本州(千葉県以西)、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の大低木または高木である。

カンザブロウノキ *Symplocos theophrastaefolia* S. et Z. ハイノキ科 写真12

横断面:小型で角張った道管が単独あるいは2~4個不規則に複合して散在する散孔材である。放射断面:道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20~25本のものが多い。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。接線断面:放射組織は異性放射組織型で1~8細胞幅ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカンザブロウノキに同定される。カンザブロウノキは、本州(静岡県以西)、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で高さ10mに達する。材は建築などに用いられる。

5. 所見

樹種同定の結果、コナラ属アカガシ亜属 4 点、タブノキ 3 点、イスノキ 3 点、サカキ 3 点、クリ 2 点、シイ属 2 点、クスノキ 2 点、ヒノキ 1 点、ヤマモモ 1 点、タイミンタチバナ 1 点、カンザブrouノキ 1 点が同定された。

このうち、最も多いコナラ属アカガシ亜属は、広鋏、又鋏、容器の蓋、蓋（土器用）に使用されている。コナラ属アカガシ亜属は堅硬な材であり、西南日本では弥生時代以降、特に農耕具を中心に用いられている。タブノキは強さ耐朽性ともに中庸の材であり、梯子、建築部材（壁板材・方形貫通孔）、建築部材（妻壁板材・方形貫通）に使用されている。イスノキは重硬で緻密な材で耐朽性が高く、ヤス、刺突具、木鏝に使用されている。サカキは強靱、堅硬な材であり、背負子、斧の柄（頭部）、櫓に使用されている。クリは重硬で保存性が高く、小型槽、舟形槽（仕切有り）に使用されている。シイ属はやや重硬で耐朽性、保存性は低く、台状（槽未成品?）、建築部材（板材・欠き込み）に使用されている。クスノキは堅硬で耐朽性が高く、把付テミ形/垢取り?、鼠返しに使用されている。ヤマモモは概して強い材で、梯子に使用されている。タイミンタチバナは重硬な材であり、斧の柄に使用されている。カンザブrouノキは杓子の柄（線刻画あり）、ヒノキ材は用途不明（透孔付ヘラ状）に使用されている。

いずれも西南日本の照葉樹林の主要構成要素を含む照葉樹林域に分布する樹種であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造. 文永堂出版, 290p.

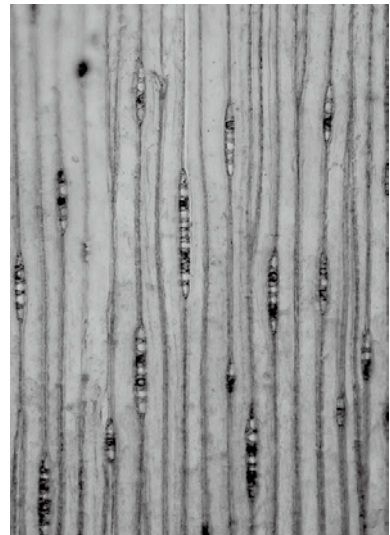
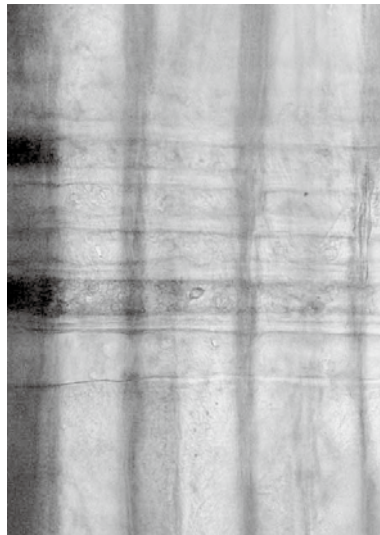
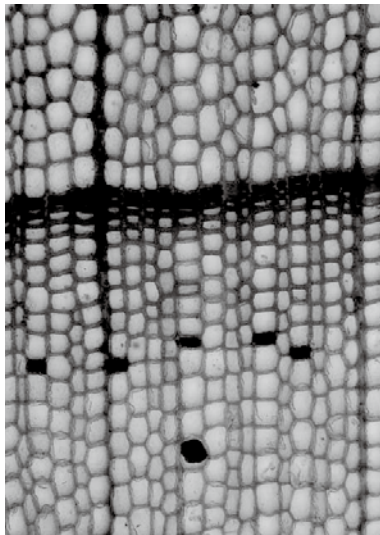
島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧. 雄山閣, 296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究特別 1 号. 植生史研究会, 242p.

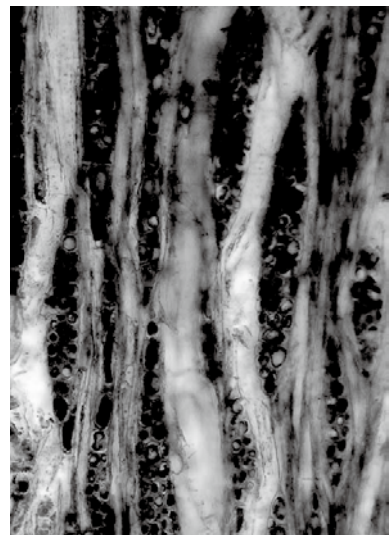
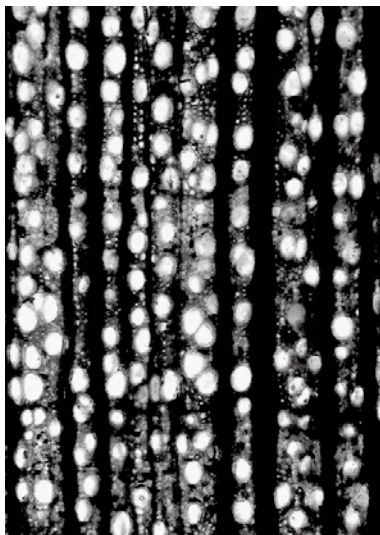
表 1 谷遺跡第3次発掘調査における樹種同定結果

登録番号	挿図番号	種別	出土位置	W番号	結果 (学名/和名)
30001	43-1	広鋏	V区灰色砂1～2	2	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
30002	43-5	又鋏	III区東 S X 05内	74	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
30005	44-1	大型垢取り形		9	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
30006	47-1	背負子	III区	45	<i>Cleyera japonica</i> Thunb. サカキ
30007	45-4	斧の柄	S X 05	84	<i>Myrsine seguinii</i> Lev. タイミンタチバナ
30010	45-7	斧の柄 (頭部)	ラベルなし		<i>Cleyera japonica</i> Thunb. サカキ
30011	45-6	杓子の柄 (線刻画あり)	S X 8		<i>Symplocos theophrastaefolia</i> Sieb. et Zucc. カンザブロウノキ
30012	46-4	小型槽	IV区	28	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
30013	44-2	櫂		10	<i>Cleyera japonica</i> Thunb. サカキ
30014	45-1	ヤス	S X 01 下	25	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc. イスノキ
30015	45-3	刺突具	IV区灰色砂下		<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc. イスノキ
30016	46-1	舟形槽 (仕切有り)	I 区東	4	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
30017	46-2	容器の蓋	II 区東	43	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
30018	46-3	蓋 (土器用)		40	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
30019	46-5	台状 (槽未成品?)	S X 01 下	49	<i>Castanopsis</i> シイ属
30021	45-2	木鏃	S X 5 下層		<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc. イスノキ
30024	47-4	用途不明 (透孔付へラ状)	I 区東	59	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
30027	48-4	梯子	S X 5 (I・II区)	3	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc. タブノキ
30028	48-3	梯子	W 5 下灰色砂	6	<i>Myrica rubra</i> Sieb. et Zucc. ヤマモモ
30029	48-2	鼠返し	I 区東	1	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
30030	49-3	建築部材 (壁板材・方形貫通孔)	S X 04	93	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc. タブノキ
30031	49-2	建築部材 (妻壁板材・方形貫通)	S X 05	79	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc. タブノキ
30032	49-1	建築部材 (板材・欠き込み)		81	<i>Castanopsis</i> シイ属

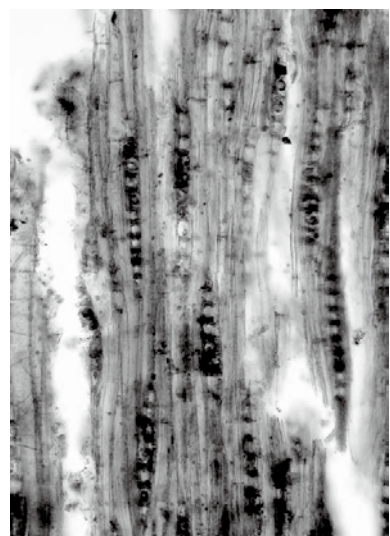
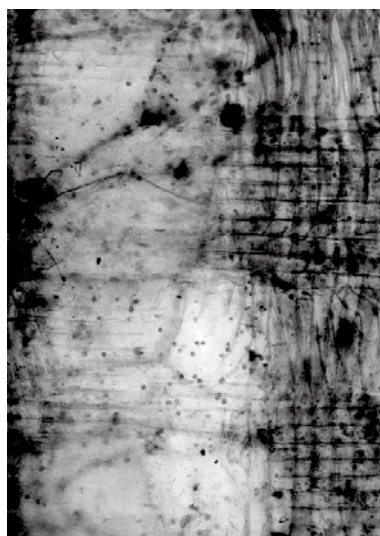
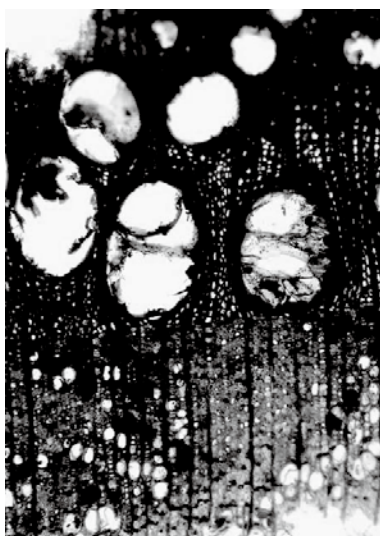
谷遺跡第3次発掘調査の木材 I



横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.05mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 1. 30024 用途不明 (透孔付ヘラ状) ヒノキ

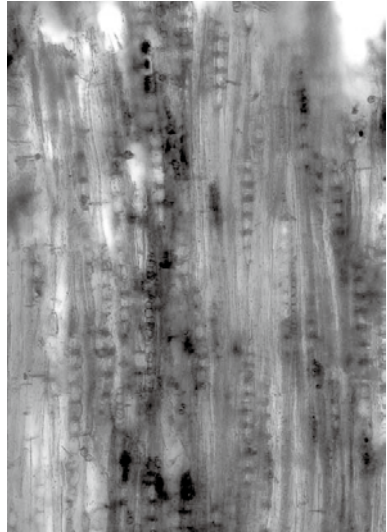
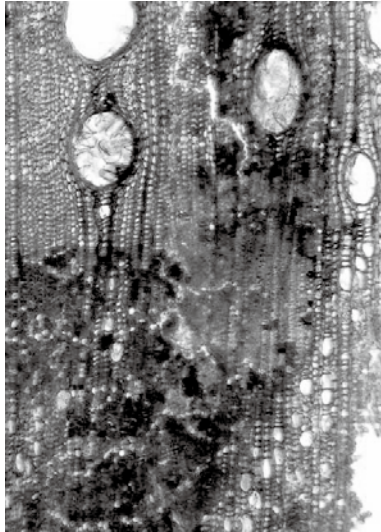


横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.1mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 2. 30028 梯子 ヤマモモ



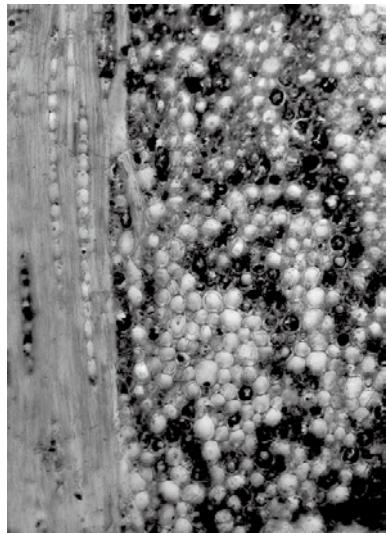
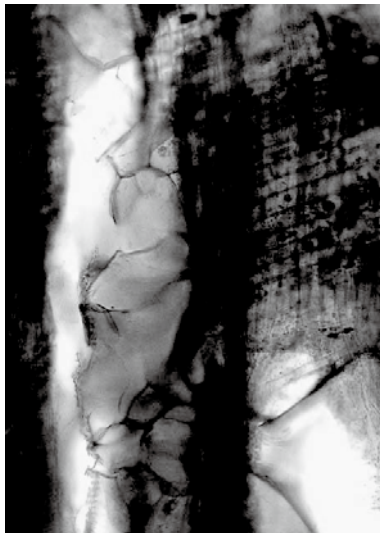
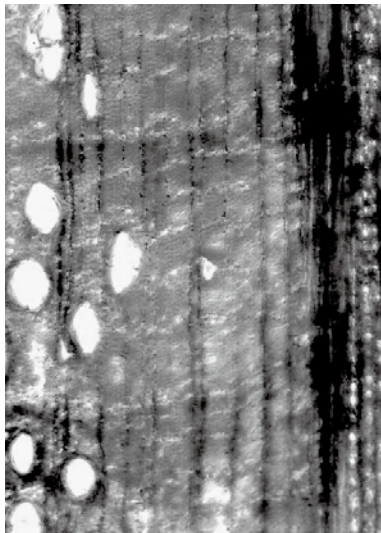
横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 3. 30016 舟形槽 (仕切有り) クリ

谷遺跡第3次発掘調査の木材 II



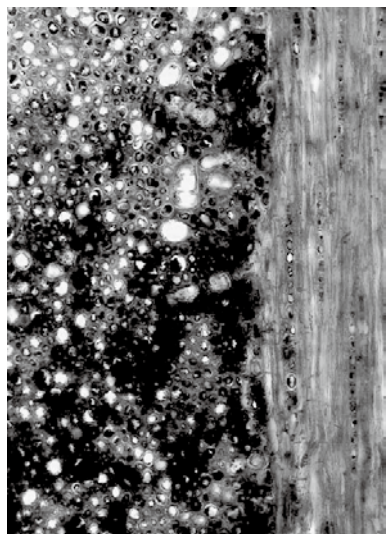
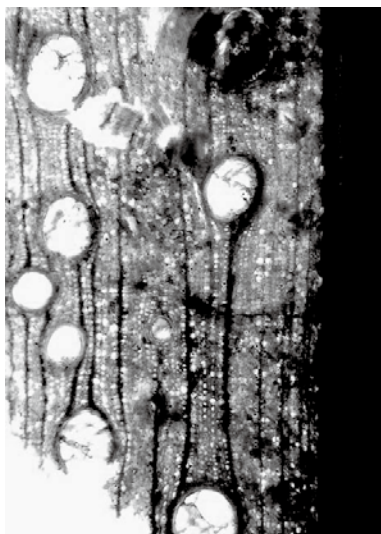
横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm

4. 30032 建築部材 (板材・欠き込み) シイ属



横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm

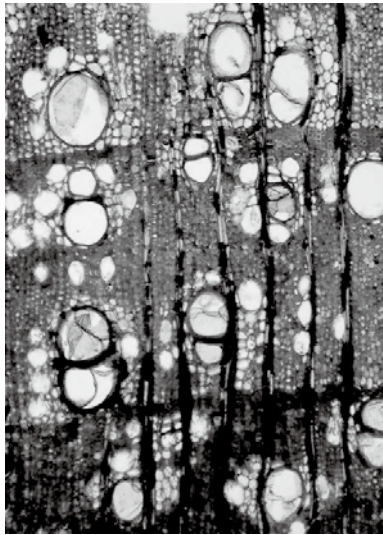
5. 30001 広楸 コナラ属アカガシ亜属



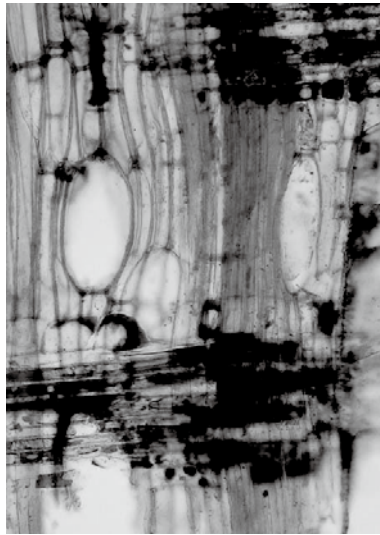
横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm

6. 30018 蓋 (土器用) コナラ属アカガシ亜属

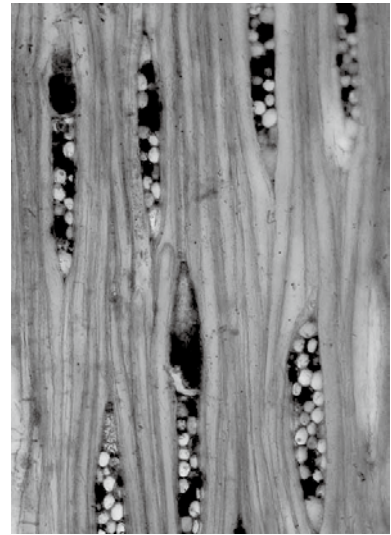
谷遺跡第3次発掘調査の木材 III



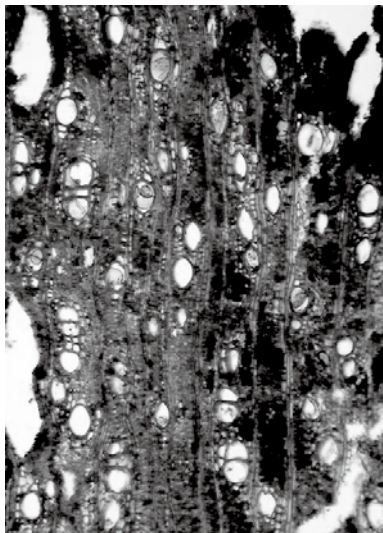
横断面 ————— : 0.5mm
7. 30005 把付テミ形/垢取り?



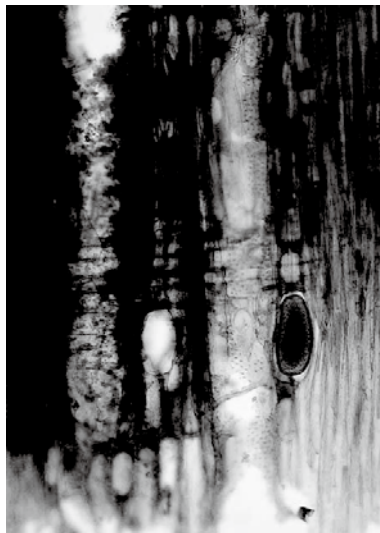
放射断面 ————— : 0.2mm
クスノキ



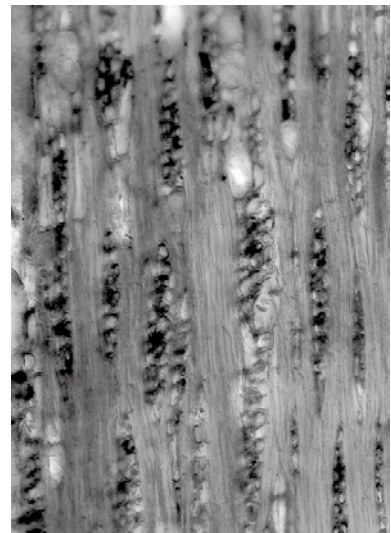
接線断面 ————— : 0.2mm



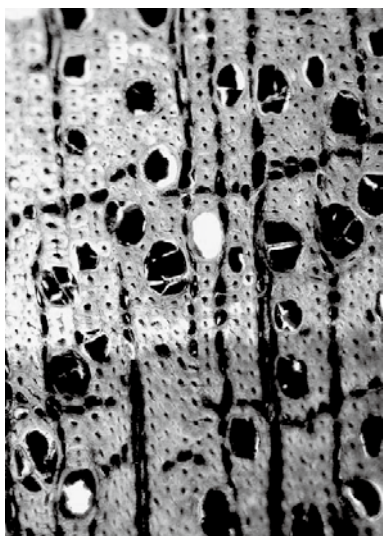
横断面 ————— : 0.5mm
8. 30027 梯子 タブノキ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.2mm
9. 30014 ヤス イスノキ

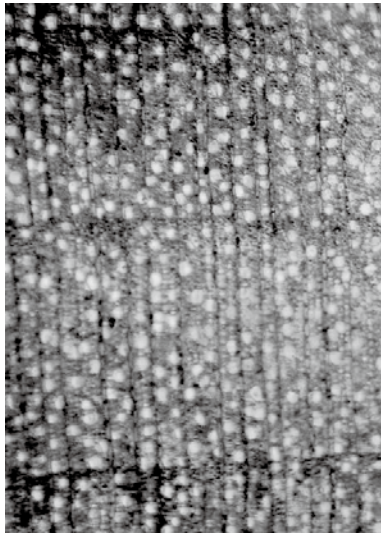


放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm

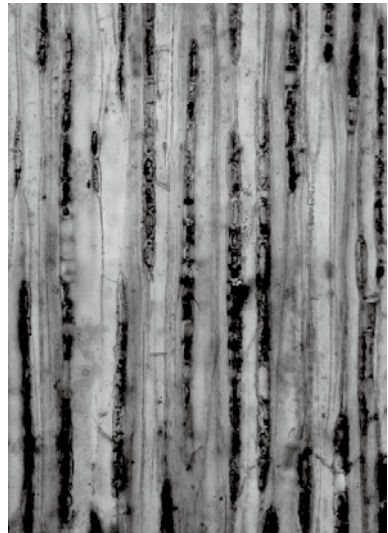
谷遺跡第3次発掘調査の木材 IV



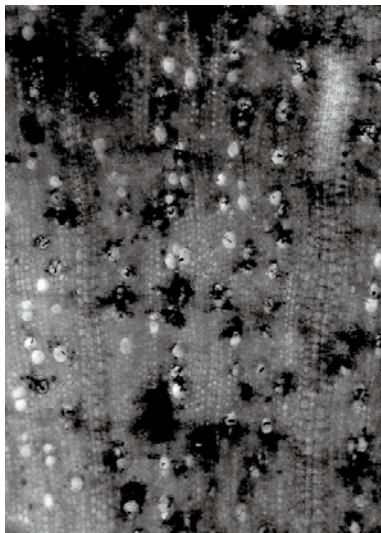
横断面 ————— : 0.5mm
10. 30013 18 櫓 サカキ



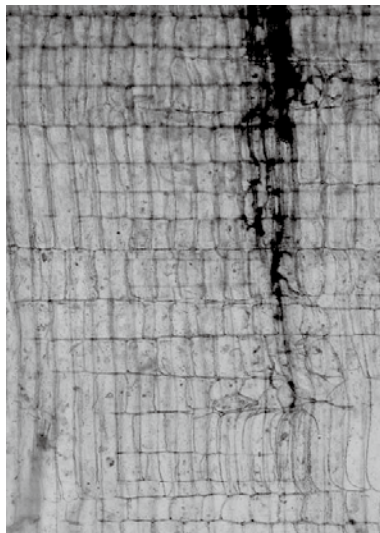
放射断面 ————— : 0.1mm



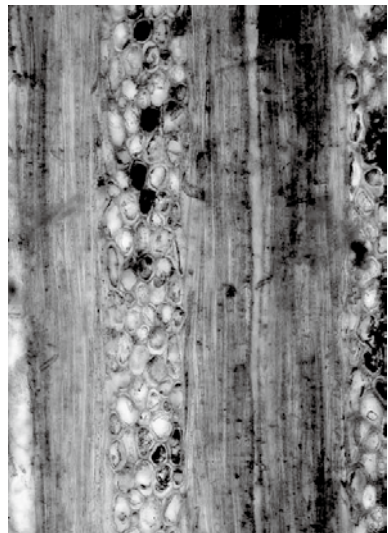
接線断面 ————— : 0.2mm



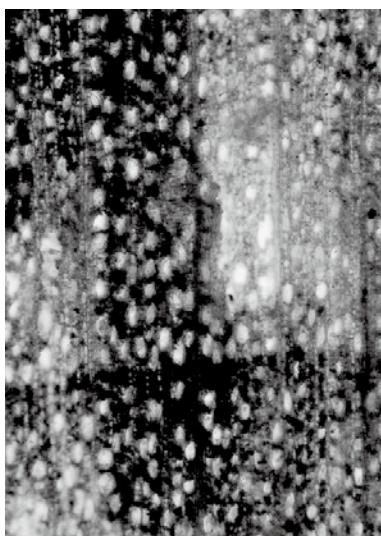
横断面 ————— : 0.5mm
11. 30007 30 斧の柄 タイミンタチバナ



放射断面 ————— : 0.2mm



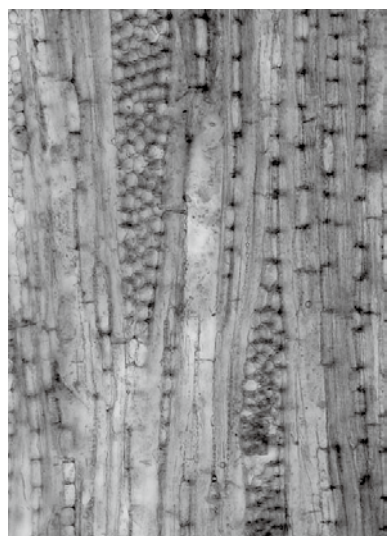
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm
12. 30011 181 杓子の柄 (線刻画あり) カンザブロウノキ



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm

2. 花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、調査区西部の流路断面から採取された試料I（4層：古墳時代前期以降）、J（10層：弥生時代後期から終末）、および調査区東部の流路井堰周辺で採取された試料C（8層：古墳時代前期以降）、D（23層：弥生時代後期から終末）、F（25層：弥生時代後期から終末）、G（27層：弥生時代後期から終末）の計6点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉34、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉28、シダ植物胞子2形態の計69である。また、寄生虫卵2分類群が検出された。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、クロウメモドキ科、ブドウ属、ノブドウ、ツバキ属、グミ属、ツツジ科、カキ属、ハインキ属、エゴノキ属、モクセイ科、イスノキ属、スイカズラ属〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ササゲ属、フウロソウ属、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵

(2) 花粉群集の特徴

1) 調査区西部

試料J (10層:弥生時代後期から終末) では、樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。草本花粉では、イネ科 (イネ属型を含む)、カヤツリグサ科が優勢で、ヨモギ属、アブラナ科、オモダカ属、ミズアオイ属などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属、マツ属複維管束亜属が優勢で、スギ、ハシバミ属、クリ、エノキ属－ムクノキなどが伴われ、樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科も認められた。試料I (4層:古墳時代前期以降) では、草本花粉ではヨモギ属が増加し、イネ科 (イネ属型を含む) はやや減少している。また、ササゲ属が出現している。樹木花粉では、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科がやや増加し、マツ属複維管束亜属は減少している。

2) 調査区東部

試料G (27層:弥生時代後期から終末)、試料F (25層:弥生時代後期から終末)、試料D (23層:弥生時代後期から終末) では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が優勢で、クリ、エノキ属－ムクノキ、マツ属複維管束亜属、スギなどが伴われる。草本花粉では、イネ科 (イネ属型を含む)、カヤツリグサ科が優勢で、ヨモギ属、アブラナ科、オモダカ属、ミズアオイ属などが伴われる。また、試料Gから鞭虫卵、試料Fから回虫卵がわずかに検出された。試料C (8層:古墳時代前期以降) では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高くなり、草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む) が増加している。樹木花粉では、シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が減少している。また、同試料では鞭虫卵がわずかに検出された。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

(1) 調査区西部

弥生時代後期から終末とされる試料J(10層)の時期は、水田雑草のオモダカ属やミズアオイ属を伴ってイネ属型が出現し、カヤツリグサ科も比較的多いことから、調査地点もしくはその周辺に水田が分布していたと推定される。遺跡周辺には、シイ類(シイ属-マテバシイ属)、カシ類(コナラ属アカガシ亜属)を主要構成要素とする照葉樹林が分布し、マツ類(マツ属複維管束亜属:ここでは二次林要素のニヨウマツ)、スギ、クリなども分布していたと考えられる。樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科は、形態上から人為地周辺に生育するカラムシ、カナムグラなどの草本とみられ、周囲の比較的乾燥したところに生育していたとみなされる。

古墳時代前期以降とされる試料I(4層)の時期になると、乾燥を好むヨモギ属が増加し、栽培植物であるササゲ属や栽培植物を含むアブラナ科が検出されることから、水田の他に畑の分布も示唆される。

(2) 調査区東部

弥生時代後期から終末とされる試料G(27層)、試料F(25層)、試料D(23層)の時期は、水田雑草のオモダカ属やミズアオイ属を伴ってイネ属型が出現し、カヤツリグサ科も比較的多いことから、調査地点もしくはその周辺に水田が分布していたと推定される。遺跡周辺には、シイ類やカシ類を主要構成要素とする照葉樹林が分布し、マツ類、スギ、クリなども分布していたと考えられる。部分的に寄生虫卵の鞭虫卵や回虫卵が検出されたが、いずれも低密度であることから、集落周辺などの人為環境における通常の生活汚染に由来するものと考えられる。

古墳時代前期以降とされる試料C(8層)の時期は、イネ科(イネ属型を含む)が増加していることから、周辺で水田が拡大したと考えられ、それに伴ってシイ類やカシ類などの照葉樹林が減少したと推定される。

文献

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純(1967)花粉分析. 古今書院, p.82-110.

中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純(1977)稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

表1 谷遺跡第3次発掘調査における花粉分析結果

分類群		I	J	C	D	F	G
学名	和名	4層	10層	8層	23層	25層	27層
Arboreal pollen		樹木花粉					
<i>Podocarpus</i>	マキ属	1					
<i>Abies</i>	モミ属				2	1	1
<i>Tsuga</i>	ツガ属				1	1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	18	37	13	29	9	31
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	26	10	12	8	5	22
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	21	2	4	3	2	3
<i>Juglans</i>	クルミ属					1	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		1	1	1		
<i>Betula</i>	カバノキ属			1	1	1	3
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	7	2	3	5	10
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ		2			2	1
<i>Castanea crenata</i>	クリ	16	6	9	25	38	21
<i>Castanea crenata-Castanopsis-Pasania</i>	クリ-シイ属-マテバシイ属	38	37	27	139	123	189
<i>Fagus</i>	ブナ属						1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	3	5	8	8	7	13
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	32	38	44	94	94	128
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		1	7	1		2
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	5	7	3	10	7	21
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ					2	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属		1			3	1
<i>Ilex</i>	モチノキ属		1			1	1
Celastraceae	ニシキギ科		1	1		1	
Rhamnaceae	クロウメモドキ科				1		
<i>Vitis</i>	ブドウ属				3	1	1
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ					1	
<i>Camellia</i>	ツバキ属					2	
<i>Elaeagnus</i>	グミ属			1		1	
Ericaceae	ツツジ科					1	1
<i>Diospyros</i>	カキ属						1
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属		1			1	1
<i>Syrax</i>	エゴノキ属						1
Oleaceae	モクセイ科			1	1	1	1
<i>Distylium</i>	イスノキ属			3		1	1
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属					1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	22	13	8	13	41	30
Rosaceae	バラ科				4	3	4
Leguminosae	マメ科	5	2	5		1	6
Araliaceae	ウコギ科		1		1	3	
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属						1
Nonarboreal pollen		草本花粉					
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属	3	1	6		2	
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属		1				
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属		1	1	1		1
Gramineae	イネ科	89	85	138	121	108	113
<i>Oryza type</i>	イネ属型	5	19	30	15	4	42
Cyperaceae	カヤツリグサ科	48	32	35	39	37	41
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ				1		
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属		3	10	5	1	6
<i>Polygonum</i>	タデ属						1
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	2	1	7	4	6
<i>Rumex</i>	ギンギン属			5			2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	3	3		5	3	6
Caryophyllaceae	ナデシコ科			4			
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属			1		2	2
Cruciferae	アブラナ科	5	5	5	3	5	12
<i>Vigna</i>	ササゲ属	1					
<i>Geranium</i>	フウロソウ属			1			
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	1	1		2		1
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属	1					
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1		6	3		
Apiioideae	セリ亜科	5	2	5		1	5
Labiatae	シソ科			1	3	1	4
<i>Plantago</i>	オオバコ属					1	
<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキツル					11	
Lactuoidaeae	タンポポ亜科	3	1	4			1
Asteroidaeae	キク亜科	2	3	1		2	1
<i>Xanthium</i>	オナモミ属					1	1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	73	11	25	7	14	14
Fern spore		シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	19	22	14	28	29	47
Trilate type spore	三条溝胞子	33	31	30	38	63	60
Arboreal pollen	樹木花粉	161	157	137	330	313	456
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	27	16	13	18	48	41
Nonarboreal pollen	草本花粉	241	170	279	212	197	259
Total pollen	花粉総数	429	343	429	560	558	756
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	7.0	3.1	2.0	4.0	3.5	4.7
		$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	17	9	3	17	5	19
Fern spore	シダ植物胞子	52	53	44	66	92	107
Helminth eggs		寄生虫卵					
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵					2	
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵			1			2
Total	計			1		2	2
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度			1.2		3.4	1.6
				$\times 10$		$\times 10$	$\times 10$
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(++)					

谷遺跡第3次発掘調査の花粉・孢子・寄生虫卵

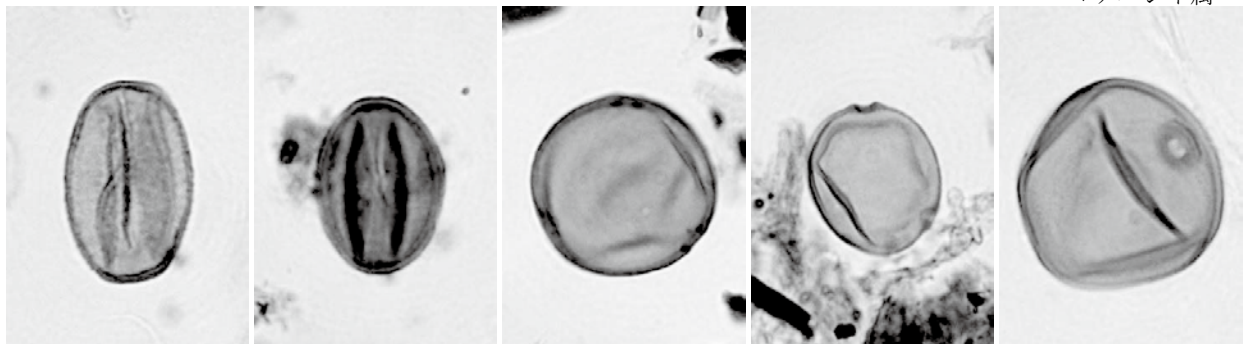


1 マツ属複維管束虫属

2 スギ

3 クリ

4 シイ属
-マテバシイ属



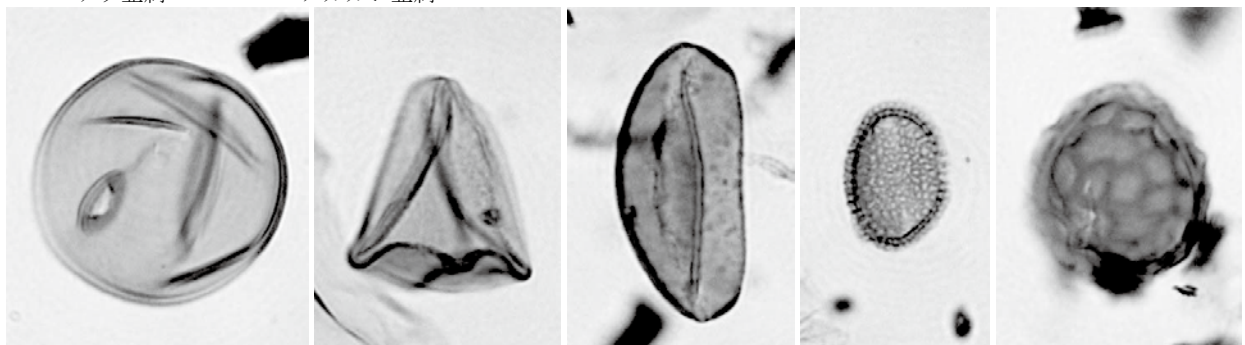
5 コナラ属
コナラ虫属

6 コナラ属
アカガシ虫属

7 エノキ属-ムクノキ

8 クワ科-イラクサ科

9 イネ科



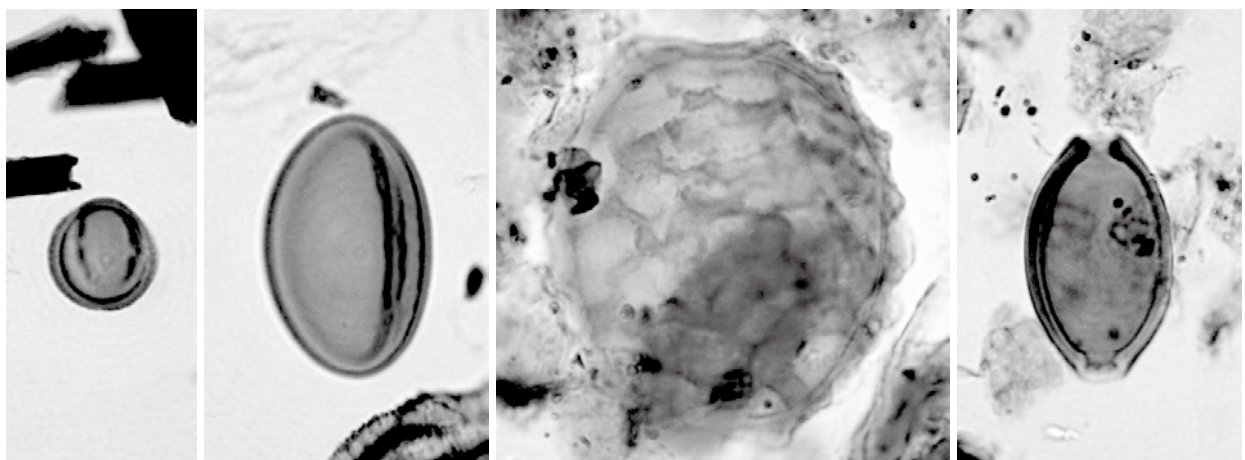
10 イネ属型

11 カヤツリグサ科

12 ミズアオイ属

13 アブラナ科

14 ササゲ属



15 ヨモギ属

16 シダ植物単条溝孢子

17 回虫卵

18 鞭虫卵

— 10 μm

報告書抄録

ふりがな	たにいせき2・みょうばるいせき5							
書名	谷遺跡2・女原遺跡5							
副書名	谷遺跡第3次・女原遺跡第7次調査の報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1151集							
編著者名	森本幹彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-0001 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たにいせき 谷遺跡 第3次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくいまじゅくまち 西区今宿町	40130	0627	33° 34' 21"	130° 16' 54"	20090302 ～ 20090409	290	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
谷遺跡	生産	弥生時代後期～古墳 時代前期	井堰、溝、大畦畔	弥生土器・土師器・須恵 器、木器、石器、		弥生時代後期後半から古 墳時代前期の生産関連遺 構		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
みょうばるいせき 女原遺跡 第7次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくみょうばる 西区女原	40130	0688	33° 34' 22"	130° 16' 10"	20090821 ～ 20091109	2,400	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
女原遺跡	集落	古墳時代後期	掘立柱建物、溝、	弥生土器・土師器・須恵 器、石器		古墳時代後期の掘立柱建 物		
要約	<p>谷遺跡第3次調査地点は、今宿五郎江遺跡などに近在している。弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけての生産関連遺構が複数面重複する遺跡で、井堰、水路、大畦畔といった各時期の生産関連遺構の変遷が明らかになった。土器、木器も多量に出土している。</p> <p>女原遺跡第7次調査地点は遺跡の北部に位置するが、古墳時代後期を中心とした掘立柱建物などがみつかった。当該期の柱穴における須恵器埋納事例のほか、古墳時代初頭の吉備系土器や縄文時代早期前後の石器の出土があった。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1151集

谷遺跡2・女原遺跡5

－谷遺跡第3次・女原遺跡第7次調査の報告－

2012年（平成24年）3月16日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6-6-41